

# 佐久駅周辺土地区画整理事業 埋蔵文化財発掘調査報告書

—長野県佐久市長土呂・岩村田弥生時代集落の調査—

長土呂遺跡群	<small>KA MI MU RA</small> 上村遺跡
	<small>KA MI MA E DA</small> 上前田遺跡
	<small>E I ZO N</small> 永存遺跡
	<small>SHI MO O BA ZU KA</small> 下伯母塚遺跡
枇杷坂遺跡群	<small>SU OU JI</small> 直路遺跡 I・II・III
円正坊遺跡群	<small>SHI MI ZU DA</small> 清水田遺跡 II
周防畑遺跡群	<small>TSU I NO MA E</small> 辻の前遺跡
	<small>NA KA NA KA TA</small> 中仲田遺跡

2003. 3

佐 久 市  
佐久市教育委員会

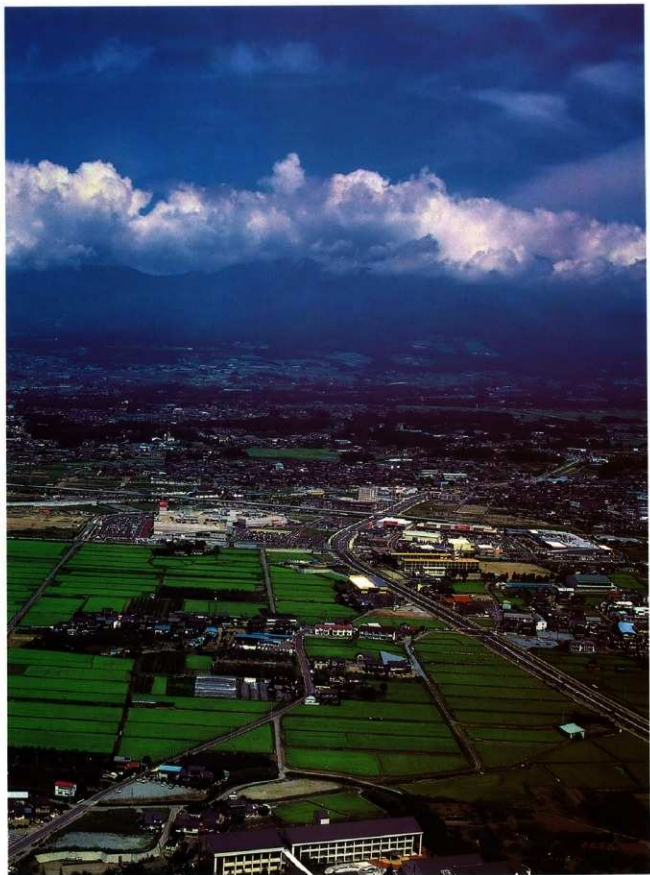
# 佐久駅周辺土地区画整理事業 埋蔵文化財発掘調査報告書

—長野県佐久市長土呂・岩村田弥生時代集落の調査—

長土呂遺跡群	<small>KA MI MU RA</small> 上村遺跡
	<small>KA MI MA E DA</small> 上前田遺跡
	<small>E I ZO N</small> 永存遺跡
	<small>SHI MO O BA ZU KA</small> 下伯母塚遺跡
枇杷坂遺跡群	<small>SU GU JI</small> 直路遺跡 I・II・III
円正坊遺跡群	<small>SHI MI ZU DA</small> 清水田遺跡 II
周防畑遺跡群	<small>TSU JI NO MA E</small> 辻の前遺跡
	<small>NA KA NA KA TA</small> 中仲田遺跡

2003.3

佐久市  
佐久市教育委員会



調査区付近航空写真



調査区航空写真（区画整理施工前、平成7年5月撮影）



調査区航空写真（区画整理施工後、平成13年5月撮影）





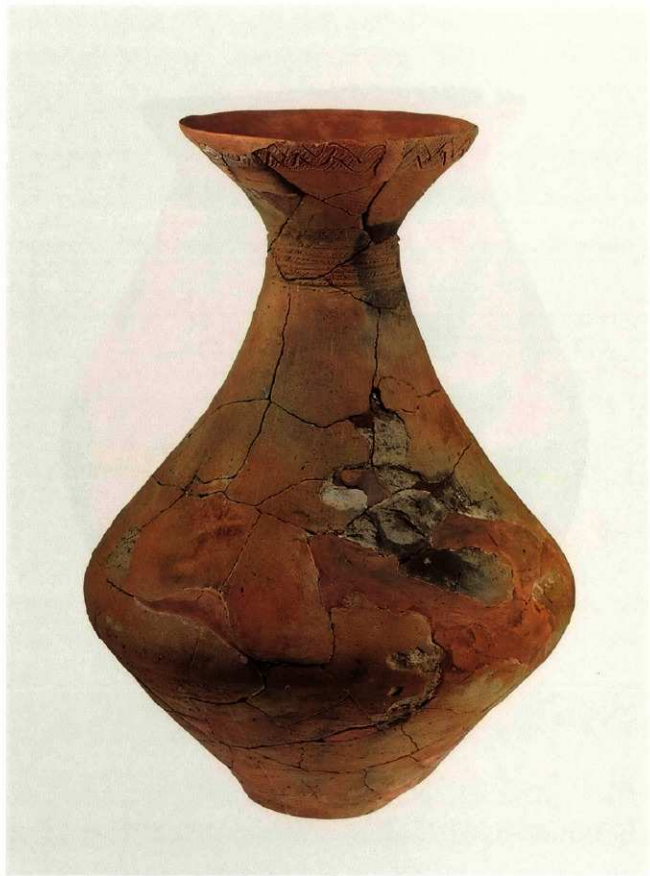
調査区遠景



調査区付近航空写真



直路遺跡 I H 1 号住居址出土土器



直路遺跡 I H 1 号住居址出土土器

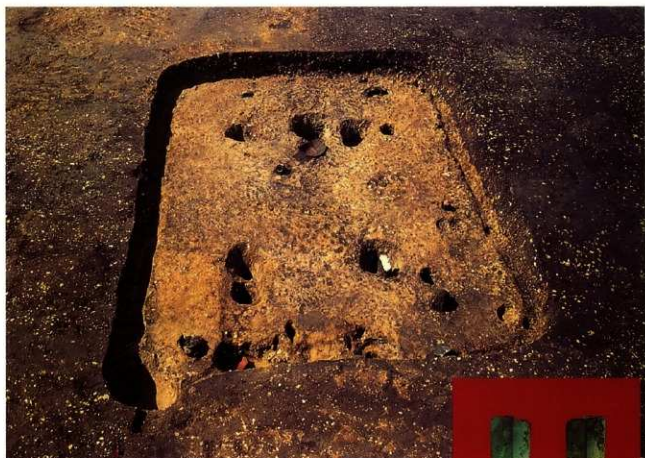


直路遺跡 I H 1 号住居址出土土器

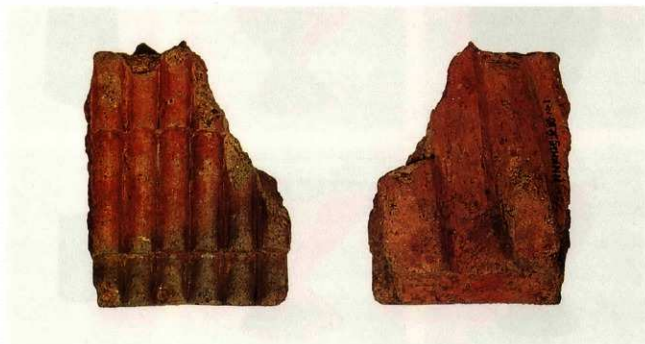


直路遺跡1H1号住居址出土遺物





下柏母塚遺跡日8号住居址・銅版



上村遺跡M3号溝址出土瓦塔片

## 例 言

1 本書は、佐久市が行う佐久駅周辺土地区画整理事業に伴う、埋蔵文化財発掘調査報告書である。

2 調査委託者 佐久市

3 調査受託者 佐久市教育委員会

4 遺跡名

長土呂遺跡群 上村遺跡・上前田遺跡・永存遺跡・下伯母塚遺跡  
 枇杷坂遺跡群 直路遺跡Ⅰ・直路遺跡Ⅱ・直路遺跡Ⅲ  
 円正坊遺跡群 清水田遺跡Ⅱ  
 周防畑遺跡群 辻の前遺跡・中仲田遺跡

5 調査期間及び面積

試掘調査	平成7年12月11日～12月26日 平成8年6月19日～6月21日、11月20日 平成9年5月6日～6月24日 平成10年4月22日～12月14日 平成11年8月31日～9月26日
発掘調査	平成7年10月27日～11月9日 平成8年6月19日～7月19日 平成9年6月10日～7月18日 平成10年4月22日～8月5日、8月25日～12月15日 平成11年5月6日～10月13日
整理調査	平成8年1月8日～1月18日 平成8年7月18日～7月25日 平成10年4月6日～8月25日 平成11年7月26日～8月25日 平成12年4月1日～5月25日、平成13年1月26日～3月25日 平成13年4月2日～平成14年3月26日 平成14年4月1日～平成15年3月28日
調査面積	600,470.91㎡

6 試掘調査は林 幸彦・須藤隆司・羽毛田卓也が担当した。

発掘調査は上村遺跡を富沢一明が、上前田遺跡を須藤隆司が、直路遺跡Ⅰ・下伯母塚遺跡を上原 学が、直路遺跡Ⅱ・永存遺跡・清水田遺跡Ⅱを林 幸彦が、直路遺跡Ⅲを森泉かよ子が、辻の前遺跡・中仲田遺跡を羽毛田卓也がそれぞれ担当した。

整理調査は平成13年度まで各担当者が行い、平成14年度は三石宗一が担当した。

本書の執筆・編集是三石が行った。

7 本書に使用した航空写真は、直路遺跡Ⅱは株式会社ユー・アール測量設計、清水田遺跡Ⅱは株式会社みすず総合コンサルタント、中仲田遺跡は株式会社こうそくが撮影したものである。


8 すべての資料は、佐久市教育委員会の責任下に保管されている。

## 凡 例

- 1 遺構の略記号は以下のとおりである。  
住居址-H、掘立柱建物址-F、竪穴状遺構-Ta、土坑-D、溝址-M、ピット-P
- 2 グリッドは調査範囲全体を網羅するように国家座標を組み、国家座標に沿って200m×200mのⅠ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ…ⅪⅤ地区とし、各々を25区分した40m×40mの区画をA・B・C…Y区とした。更に、それを100区分した4m×4mのグリッドを設定し、東西列を東からあ・い・う…こ、南北列を北から1・2・3…10とし、各グリッドの北東交点をグリッド名とした。また、遺構番号は各遺跡毎に通し番号としたため、調査時の番号とは異なる。
- 2 挿図の縮尺は遺構-1/80、遺物-1/4を基本としたが、異なる場合は図中に明記した。
- 3 遺構の海拔標高は、水系標高を「標高」として記した。
- 4 土層の色調は、1999年版『新版 標準土色帖』に基づいて示した。
- 5 住居址の面積は掘り込み床面積であり、掘立柱建物址は四隅の柱穴の芯によって囲まれた範囲を表示した。
- 6 写真図版中の遺物番号は挿図番号と対応する。また、縮尺は実測図と同一である。
- 7 挿図中のスクリーントーンは以下のことを表す。

### 遺構

地 山  焼土範囲  柱 痕 

住居址掘方 

### 遺物

赤色塗彩  黒色処理  須恵器断面 

# 目 次

巻頭図版

例 言

凡 例

第Ⅰ章 調査の概要	1
第1節 調査の経緯と経過	1
第2節 調査体制	3
第3節 調査日誌	5
第4節 遺跡の位置と周辺遺跡	6
第5節 試掘調査	10
第6節 基本層序	11
第Ⅱ章 長土呂遺跡群上村遺跡	14
第1節 土 坑	14
第2節 溝 址	14
第3節 ビット	17
第4節 遺構外出土遺物	17
第Ⅲ章 長土呂遺跡群上前田遺跡	19
第1節 土 坑	19
第2節 溝 址	23
第3節 ビット	24
第Ⅳ章 長土呂遺跡群永存遺跡	26
第1節 土 坑	26
第2節 溝 址	27
第3節 遺構外出土遺物	27
第Ⅴ章 長土呂遺跡群下伯母塚遺跡	29
第1節 竪穴住居址	29
第2節 溝 址	45
第Ⅵ章 枇杷坂遺跡群直路遺跡Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ	49
第1節 竪穴住居址	49
第2節 竪穴状遺構	74
第3節 掘立柱建物址	78
第4節 周溝址	78
第5節 土 坑	80
第6節 溝址・ビット	85
第7節 遺構外出土遺物	89
第Ⅶ章 円正坊遺跡群清水田遺跡Ⅱ	92
第1節 竪穴住居址	92
第2節 溝址・ビット	108
第3節 遺構外出土遺物	109

第Ⅷ章 周防燧遺跡群辻の前遺跡	112
第1節 竪穴住居址	112
第2節 竪穴状遺構	139
第3節 土坑	139
第4節 溝址・ピット	140
第5節 遺構外出土遺物	145
第Ⅸ章 周防燧遺跡群中仲田遺跡	148
第1節 竪穴住居址	148
第2節 掘立柱建物址	149
第3節 土坑	149
第4節 溝址・ピット	153
第5節 遺構外出土遺物	155
第Ⅹ章 調査のまとめ	163

引用参考文献  
図 版

## 挿 図 目 次

第1図 位置図	1	第26図 H 2号住居址(2)	31
第2図 周辺遺跡分布図(1)	7	第27図 H 3号住居址(1)	32
第3図 周辺遺跡分布図(2)	9	第28図 H 3号住居址(2)	33
第4図 調査区・トレンチ設定図	10	第29図 H 4号住居址	35
第5図 基本層序模式図	11	第30図 H 5号住居址(1)	36
第6図 グリッド設定図	12	第31図 H 5号住居址(2)	37
第7図 長土呂遺跡群上村遺跡全体図	13	第32図 H 5号住居址(3)	38
第8図 D 1号土坑	14	第33図 H 6号住居址	39
第9図 M 1・2号溝址、ピット	15	第34図 H 7号住居址	40
第10図 M 3号溝址、ピット	16	第35図 H 8号住居址(1)	41
第11図 遺構外出土遺物	17	第36図 H 8号住居址(2)	42
第12図 長土呂遺跡群上前田遺跡全体図	18	第37図 H 9号住居址	44
第13図 D 1・5号土坑	19	第38図 M 1・6・7号溝址	45
第14図 土坑内出土遺物	19	第39図 M 2～5号溝址	46
第15図 D 2～4・6～25号土坑	20	第40図 枇杷坂遺跡群直路遺跡Ⅰ全体図	47
第16図 M 1～3号溝址、ピット	22	第41図 枇杷坂遺跡群直路遺跡Ⅱ、Ⅲ全体図	48
第17図 M 1～3号溝址出土遺物	23	第42図 H 1号住居址(1)	49
第18図 長土呂遺跡群永存遺跡全体図	25	第43図 H 1号住居址(2)	50
第19図 D 1～5号土坑	26	第44図 H 1号住居址(3)	50
第20図 M 1号溝址	26	第45図 H 1号住居址(4)	51
第21図 M 2号溝址	27	第46図 H 1号住居址(5)	52
第22図 遺構外出土遺物	27	第47図 H 1号住居址(6)	53
第23図 長土呂遺跡群下柏母塚遺跡全体図	28	第48図 H 1号住居址(7)	54
第24図 H 1号住居址	29	第49図 H 1号住居址(8)	55
第25図 H 2号住居址(1)	30	第50図 H 1号住居址(9)	56



第51回	H 2号住居址	58
第52回	H 3号住居址	59
第53回	H 4号住居址	60
第54回	H 5号住居址	61
第55回	H 6号住居址	62
第56回	H 7号住居址	63
第57回	H 8号住居址 (1)	64
第58回	H 8号住居址 (2)	65
第59回	H 9号住居址 (1)	66
第60回	H 9号住居址 (2)	67
第61回	H10号住居址 (1)	68
第62回	H10号住居址 (2)	69
第63回	H11号住居址	69
第64回	H12号住居址	70
第65回	H13号住居址	70
第66回	H14号住居址	71
第67回	H15号住居址	71
第68回	H16号住居址 (1)	72
第69回	H16号住居址 (2)	73
第70回	H17号住居址	74
第71回	Ta 1号竪穴状遺構 (1)	75
第72回	Ta 1号竪穴状遺構 (2)	76
第73回	Ta 2号竪穴状遺構	77
第74回	Ta 3号竪穴状遺構	77
第75回	F 1号竪立柱建物址	77
第76回	SM 1号周溝址	78
第77回	SM 2号周溝址	79
第78回	D 1~16号土坑	81
第79回	D 2・4・7・11・13~16号土坑出土遺物	82
第80回	D17号土坑	83
第81回	D18~28号土坑	84
第82回	D29・30号土坑	84
第83回	M 1号溝址	85
第84回	M 2・3号溝址、ビット群	86
第85回	M 4・5号溝址	87
第86回	M 6号溝址	88
第87回	直路遺跡ⅢPit132出土遺物	89
第88回	遺構外出土遺物	89
第89回	円正坊遺跡群清水田遺跡Ⅱ全体図	91
第90回	H 1号住居址 (1)	92
第91回	H 1号住居址 (2)	93
第92回	H 2号住居址 (1)	94
第93回	H 2号住居址 (2)	95
第94回	H 3号住居址 (1)	97
第95回	H 3号住居址 (2)	98
第96回	H 4号住居址 (1)	99
第97回	H 4号住居址 (2)	100
第98回	H 4号住居址 (3)	101
第99回	H 5号住居址 (1)	102
第100回	H 5号住居址 (2)	103
第101回	H 6号住居址	104

第102回	H 7号住居址 (1)	105
第103回	H 7号住居址 (2)	106
第104回	H 8・9号住居址	107
第105回	M 1・2号溝址	108
第106回	ビット2	109
第107回	遺構外出土遺物 (1)	109
第108回	遺構外出土遺物 (2)	110
第109回	周防細道跡群Ⅱの前遺跡全体図	111
第110回	H 1号住居址	113
第111回	H 2号住居址	114
第112回	H 3号住居址 (1)	116
第113回	H 3号住居址 (2)	117
第114回	H 4号住居址	118
第115回	H 5号住居址	119
第116回	H 6号住居址 (1)	121
第117回	H 6号住居址 (2)	122
第118回	H 7号住所 (1)	123
第119回	H 7号住所 (2)	124
第120回	H 8号住居址 (1)	125
第121回	H 8号住居址 (2)	126
第122回	H 9号住居址 (1)	127
第123回	H 9号住居址 (2)	128
第124回	H10号住居址	129
第125回	H11号住居址 (1)	130
第126回	H11号住居址 (2)	131
第127回	H12号住居址	133
第128回	H13号住居址	134
第129回	H14号住居址 (1)	135
第130回	H14号住居址 (2)	136
第131回	H14号住居址 (3)	137
第132回	Ta 1号竪穴状遺構	139
第133回	D 6~8号土坑出土遺物	139
第134回	D 1~9号土坑	140
第135回	M 1・2・5号溝址	141
第136回	M 3・4・6~8号溝址	142
第137回	ビット群	143
第138回	遺構外出土遺物	145
第139回	周防細道跡群中仲田遺跡全体図 (1)	146
第140回	周防細道跡群中仲田遺跡全体図 (2)	147
第141回	H 1号住居址	148
第142回	F 1号竪立柱建物址	149
第143回	D 1~14号土坑	150
第144回	D15~22号土坑	151
第145回	D 4~6・8~10・14・15号土坑出土遺物	152
第146回	M 1・2号溝址	153
第147回	M 3・4号溝址、ビット群	154
第148回	遺構外出土遺物 (1)	155
第149回	遺構外出土遺物 (2)	156
第150回	遺構外出土遺物 (3)	157
第151回	遺構外出土遺物 (4)	158

## 目 次

図版一	調査区全景	図版五十	H16・17号住居址、Ta1号竪穴状遺構、SM2号溝溝址出土遺物
図版二	調査区付近航空写真	図版五十一	D4・7・15・30号土坑、M4・5号溝址、Pit2、遺構外出土遺物
図版三	上村遺跡全景	図版五十二	清水田遺跡Ⅱ全景
図版四	D1号土坑、M1～3号溝址	図版五十三	清水田遺跡Ⅱ全景、H1号住居址
図版五	M1～3号溝址、遺構外出土遺物	図版五十四	H1・2号住居址
図版六	上前田遺跡全景、D1号土坑	図版五十五	H3号住居址
図版七	D2～5号土坑	図版五十六	H3・4号住居址
図版八	D6～13号土坑	図版五十七	H4・5号住居址
図版九	D14～21号土坑	図版五十八	H6・7号住居址
図版十	D22・23・25号土坑、M1・3号溝址、ピット群	図版五十九	H6～9号住居址
図版十一	D1・4・5・13・14・21号土坑、M1号溝址山土遺物	図版六十	M1・2号溝址、グリッド遺物出土状況、Pit2遺物出土状況
図版十二	D1～5号土坑、M1・2号溝址、遺構外出土遺物	図版六十一	H1・2号住居址出土遺物
図版十三	下柏母塚遺跡全景	図版六十二	H3・4号住居址出土遺物
図版十四	H1・2号住居址	図版六十三	H4号住居址出土遺物
図版十五	H2・3号住居址	図版六十四	H5・7・8号住居址、Pit2、M2号溝址出土遺物
図版十六	H4・5号住居址	図版六十五	遺構外出土遺物
図版十七	H5～7号住居址	図版六十六	辻の前遺跡全景
図版十八	H8・9号住居址	図版六十七	H1・2号住居址
図版十九	H8・9号住居址、M1・5～7号溝址	図版六十八	H1～3号住居址
図版二十	H1～3号住居址出土遺物	図版六十九	H4・5号住居址
図版二十一	H3～5号住居址出土遺物	図版七十	H6・8号住居址
図版二十二	H6～8号住居址出土遺物	図版七十一	H7・8号住居址
図版二十三	H8・9号住居址、M3・6号溝址出土遺物	図版七十二	H9号住居址
図版二十四	H1号住居址	図版七十三	H10・11号住居址
図版二十五	H1号住居址	図版七十四	H11・12号住居址
図版二十六	H1・2号住居址	図版七十五	H13・14号住居址
図版二十七	H3・4号住居址	図版七十六	Ta1号竪穴状遺構、D1～7号土坑
図版二十八	Ta1号竪穴状遺構、D1～4号土坑	図版七十七	D8・9号土坑、M1～3・8号溝址
図版二十九	D4・5・7～14号土坑	図版七十八	M5・6号溝址、ピット群
図版三十	直路遺跡Ⅱ付近航空写真、直路遺跡Ⅱ全景	図版七十九	H1～3・5号住居址出土遺物
図版三十一	H5号住居址	図版八十	H5・6号住居址出土遺物
図版三十二	H5～7号住居址	図版八十一	H6～8号住居址出土遺物
図版三十三	H8号住居址	図版八十二	H9・11号住居址出土遺物
図版三十四	H9号住居址	図版八十三	H12～14号住居址出土遺物
図版三十五	H10号住居址	図版八十四	H14号住居址、D6・7号土坑、M4号溝址出土遺物
図版三十六	H11～13号住居址	図版八十五	中仲田遺跡A地区全景
図版三十七	Ta2・3号竪穴状遺構	図版八十六	H1号住居址、F1号竪立柱建物址
図版三十八	D17～22号土坑	図版八十七	D1～8号土坑
図版三十九	D23～27号土坑、M2・3号溝址	図版八十八	D9～13号土坑、包含層遺物出土状況
図版四十	M4・5号溝址、ピット群	図版八十九	中仲田遺跡B地区全景
図版四十一	直路遺跡Ⅲ全景、H15・16号住居址	図版九十	D14～18号土坑、M1・2号溝址
図版四十二	H16・17号住居址、D29・30号土坑	図版九十一	中仲田遺跡C地区全景、D19・20号土坑、M3号溝址
図版四十三	SM1・2号周溝址、M6号溝址	図版九十二	D21・22号土坑、ピット群
図版四十四	H1号住居址出土遺物	図版九十三	ピット群
図版四十五	H1号住居址出土遺物	図版九十四	H1号住居址、D4～6・9号土坑、M2・3号溝址、包含層出土遺物
図版四十六	H1号住居址出土遺物	図版九十五	包含層出土遺物
図版四十七	H1号住居址出土遺物	図版九十六	包含層・遺構外出土遺物
図版四十八	H1～3・5・6・8号住居址山土遺物		
図版四十九	H8～10・12・15号住居址山土遺物		

# 第I章 調査の概要

## 第1節 調査の経緯と経過

長土呂遺跡群・枇杷坂遺跡群・周防畑遺跡群は佐久市大字長土呂及び岩村田に所在し、浅間火山の第一軽石流の堆積と浸食によって形成された田切り地形に挟まれた台地上に展開する遺跡群である。この台地上には東から栗毛坂遺跡群・枇杷坂遺跡群・長土呂遺跡群・芝宮遺跡群・周防畑遺跡群・近津遺跡群・西近津遺跡群などが展開しており、佐久市でも有数な遺跡群が密集している地域である。

また、円正坊遺跡群の存在する台地の南端に至ると、田切りとの比高差が減少し微高地状の地形となり一見平坦な地形を見せているが、いくつかの発掘調査によって塚原泥流の残丘地形とそれを取り巻く低地が確認されており、微高地上からは多くの集落が検出されている。

今回、当地区において佐久市により佐久駅周辺土地区画整理事業が計画されたため、試掘調査により遺構の分布状況を把握し、その結果をふまえた協議により記録保存のための発掘調査を実施することとなった。

調査は佐久市区画整理課より委託を受けた佐久市教育委員会が実施し、平成7年度から平成11年度にかけて発掘調査を、平成7年度から平成14年度に整理調査を行った。



第1図 位置図 (1:50,000)

長土呂遺跡群 上村遺跡(N N K M)

所在地 佐久市大字長土呂字上村380-1他  
 調査期間 平成7年10月27日～11月9日  
 調査面積 202㎡  
 調査担当者 富沢 一明  
 検出遺構 土坑1基、溝址3条、ピット

長土呂遺跡群 上前田遺跡(N K M)

所在地 佐久市大字長土呂字上前田1479-5他  
 調査期間 平成8年6月19日～7月19日  
 調査面積 310㎡  
 調査担当者 須藤 隆司  
 検出遺構 土坑25基、溝址3条、ピット

長土呂遺跡群 永存遺跡(N E)

所在地 佐久市大字岩村田字永存  
 調査期間 平成10年4月22日～5月25日  
 調査面積 2,560㎡  
 調査担当者 林 幸彦  
 検出遺構 土坑5基、溝址2条

長土呂遺跡群 下伯母塚遺跡(N S U)

所在地 佐久市大字長土呂字下伯母塚  
 調査期間 平成9年6月10日～7月1日  
 調査面積 3,500㎡  
 調査担当者 上原 学  
 検出遺構 竪穴住居址9棟、溝址5条、ピット

枇杷坂遺跡群 直路遺跡Ⅰ(N S J I)

所在地 佐久市大字長土呂字直路308-1他  
 調査期間 平成9年7月1日～7月18日  
 調査面積 1,800㎡  
 調査担当者 上原 学  
 検出遺構 竪穴住居址4棟、竪穴状遺構1基、土坑16基、溝址1条、ピット

枇杷坂遺跡群 直路遺跡Ⅱ(N S J II)

所在地 佐久市大字岩村田字直路307-1他 字水引272-1他  
 調査期間 平成10年8月25日～12月15日  
 調査面積 3,890㎡  
 調査担当者 林 幸彦  
 検出遺構 竪穴住居址10棟、竪穴状遺構2基、土坑12基、溝址4条、ピット

枇杷坂遺跡群 直路遺跡Ⅲ(N S J III)

所在地 佐久市大字長土呂字水引283-1他  
 調査期間 平成11年9月13日～9月24日  
 調査面積 316㎡  
 調査担当者 森泉かよ子  
 検出遺構 竪穴住居址3棟、掘立柱建物址1棟、周溝址2基、土坑2基、溝址1条、ピット

円正坊遺跡群 清水田遺跡Ⅱ(S D II)

所在地 佐久市大字岩村田字清水田1369-1他  
 調査期間 平成10年5月11日～8月5日  
 調査面積 3,540㎡  
 調査担当者 林 幸彦  
 検出遺構 竪穴住居址9棟、溝址2条、ピット

周防畑遺跡群	辻の前遺跡(S T S)
所在地	佐久市大字長土呂字辻の前1163他
調査期間	平成11年5月6日～7月25日
調査面積	1,995㎡
調査担当者	羽毛田卓也
検出遺構	竪穴住居址14棟、竪穴状遺構1基、土坑9基、溝址8条、ピット
周防畑遺跡群	中仲田遺跡(S N A)
所在地	佐久市大字長土呂
調査期間	平成11年7月26日～10月13日
調査面積	3,162㎡
調査担当者	羽毛田卓也
検出遺構	竪穴住居址1棟、掘立柱建物址1棟、土坑22基、溝址3条、ピット

## 第2節 調査体制

### 平成7年度

調査受託者	教 育 長	大井 季夫 (4月～6月)							
		依田 英夫 (7月～)							
事 務 局	教 育 次 長	市川 源							
	埋蔵文化財課長	戸塚 満							
	管 理 係 長	谷津 恭子 (4月～6月)							
	管 理 係	田村 和広							
	埋蔵文化財係長	大塚 達夫							
	埋蔵文化財係	林 幸彦 三石 宗一 須藤 隆司 小林 眞寿							
		羽毛田卓也 富沢 一明 上原 学							

### 平成8年度

調査受託者	教 育 長	依田 英夫							
事 務 局	教 育 次 長	市川 源							
	埋蔵文化財課長	北沢 元平							
	管 理 係 長	榑沢 慶子							
	管 理 係	田村 和広							
	埋蔵文化財係長	大塚 達夫							
	埋蔵文化財係	林 幸彦 三石 宗一 須藤 隆司 小林 眞寿							
		羽毛田卓也 富沢 一明 上原 学							

### 平成9年度

調査受託者	教 育 長	依田 英夫							
事 務 局	教 育 次 長	市川 源							
	埋蔵文化財課長	須江 仁胤							
	管 理 係 長	榑沢 慶子							
	埋蔵文化財係長	大塚 達夫							
	埋蔵文化財係	林 幸彦 三石 宗一 須藤 隆司 小林 眞寿							
		羽毛田卓也 富沢 一明 上原 学							



第I章 調査の概要

平成10年度

調査受託者	教 育 長	依田 英夫						
事 務 局	教 育 次 長	北沢 馨						
	埋蔵文化財課長	須江 仁風 (兼管理係長)						
	埋蔵文化財係長	萩原 一馬						
	埋蔵文化財係	林 幸彦	三石 宗一	須藤 隆司	小林 眞寿			
		羽毛田卓也	富沢 一明	上原 学				

平成11年度

調査受託者	教 育 長	依田 英夫						
事 務 局	教 育 次 長	小林 宏造						
	文化財課長	草間 芳行						
	文化財係長	萩原 一馬						
	文化財係	林 幸彦	須藤 隆司	小林 眞寿	羽毛田卓也			
		富沢 一明	上原 学	山本 秀典	出澤 力			

平成12年度

調査受託者	教 育 長	依田 英夫						
事 務 局	教 育 次 長	小林 宏造						
	文化財課長	草間 芳行						
	文化財係長	萩原 一馬						
	文化財係	林 幸彦	須藤 隆司	小林 眞寿	羽毛田卓也			
		富沢 一明	上原 学	山本 秀典	出澤 力			

平成13年度

調査受託者	教 育 長	依田 英夫 (4月～6月)						
事 務 局	教 育 次 長	高柳 勉 (7月～)						
		小林 宏造 (4月～5月)						
		黒沢 俊彦 (5月～)						
	文化財課長	草間 芳行						
	文化財係長	萩原 一馬 (4月～5月)						
		森角 吉晴 (5月～)						
	文化財係	林 幸彦	須藤 隆司	小林 眞寿	羽毛田卓也			
		富沢 一明	上原 学	山本 秀典	出澤 力			

平成14年度

調査受託者	教 育 長	高柳 勉						
事 務 局	教 育 次 長	黒沢 俊彦						
	文化財課長	嶋崎 節夫						
	文化財係長	森角 吉晴						
	文化財係	林 幸彦	三石 宗一	須藤 隆司	小林 眞寿			
		富沢 一明	上原 学	山本 秀典	出澤 力			

平成7年度～平成14年度

調査主任	佐々木宗昭	森泉かよ子						
調査副主任	堺 益子							
調査員	秋山 勝哉	浅沼ノブ江	阿部 和人	荒井 かつ	荒井ふみ子			
	安藤 静	井出徳四郎	井出 恆永	市川 昭	市川チイ子			

井上 行雄	今井 勇一	岩崎 重子	岩下 吉代	岩下とも子
岩下ふみ子	上原 幸子	内堀 団	礪水 知子	白田 真杉
梅澤 淳子	遠藤しづか	大井みつる	萩原千鶴子	小田川 栄
小幡 弘子	柏木 貞夫	柏木 三郎	柏木 義雄	木内 明美
木内 節雄	菊池 喜重	菊池 康一	高地 正雄	神津ツネヨ
小金沢たけみ	小須田サクエ	小林 幸子	小林 妙子	小林まさ子
小林 裕	小林百合子	小林よしみ	小山 功	小山 正吉
小山 澄恵	桜井 敦子	櫻下 純子	佐々木 正	佐々木久子
佐藤 愛子	佐藤志け子	佐藤 剛	佐藤 玉枝	鎌崎 清一
鳥田 幹子	清水佐知子	須藤 瑞帆	須藤 吉助	副島 光子
高瀬 武男	高橋かね子	高橋サチコ	高橋 ふみ	高橋 冬子
高見沢 綾	武田まつ子	田中 章雄	田中ひさ子	角田すづ子
角田トミエ	東城 友子	東城 幸子	仲野 寿夫	樋田 咲枝
中條 悦子	中嶋 角治	中島武三郎	中嶋 照夫	中島とも子
中島 智広	中嶋フクジ	中嶋 良造	成澤 富子	新津 幸雄
萩原 宮子	羽毛田香里	橋詰 勝子	橋詰けさよ	橋詰 信子
花岡美津子	花里香代子	花里四之助	花里三佐子	林 美智子
林 幸男	比田井久美子	平林 泰	細堂ミスズ	細谷 秀子
堀籠 滋子	堀籠 因	堀籠みさと	真嶋 保子	増野 深志
水間 雅義	宮川百合子	武者 幸彦	茂木とよ子	森角 雅子
柳澤 孝子	柳澤千賀子	山浦 貴久	山浦 豊子	山崎 直
山田 幸枝	山村 容子	依田 みち	和久井義雄	渡辺久美子

### 第3節 調査日誌

#### 平成7年度

平成7年10月27日～11月9日 長土呂遺跡群上村遺跡発掘調査  
 平成7年12月11日～12月26日 試掘調査  
 平成8年1月8日～1月18日 整理調査

#### 平成8年度

平成8年6月19日～7月19日 長土呂遺跡群上前田遺跡発掘調査  
 平成8年6月19日～6月21日 試掘調査  
 平成8年7月18日～7月25日 整理調査  
 平成8年11月21日 試掘調査

#### 平成9年度

平成9年5月6日～6月24日 試掘調査  
 平成9年6月10日～7月1日 長土呂遺跡群下伯母塚遺跡発掘調査  
 平成9年7月1日～7月18日 枇杷坂遺跡群直路遺跡Ⅰ発掘調査

#### 平成10年度

平成10年4月22日～12月14日 試掘調査  
 平成10年4月22日～5月25日 長土呂遺跡群永存遺跡発掘調査  
 平成10年5月11日～8月5日 円正坊遺跡群清水田遺跡Ⅱ発掘調査  
 平成10年4月6日～8月25日 整理調査  
 平成10年8月25日～12月15日 枇杷坂遺跡群直路遺跡Ⅱ発掘調査

#### 平成11年度

平成11年5月6日～7月25日 周防畑遺跡群辻の前遺跡発掘調査  
 平成11年7月26日～10月13日 周防畑遺跡群中仲田遺跡発掘調査  
 平成11年7月26日～8月25日 整理調査



- 平成11年8月31日～9月26日 試掘調査
- 平成11年9月13日～9月24日 枇杷坂遺跡群直路遺跡Ⅲ発掘調査
- 平成11年11月26日～平成12年3月31日 整理調査

平成12年度

- 平成12年4月1日～5月25日 整理調査
- 平成13年1月26日～3月25日 整理調査

平成13年度

- 平成13年4月2日～平成14年3月26日 整理調査

平成14年度

- 平成14年4月1日～平成15年3月28日 整理調査



## 第4節 遺跡の位置と周辺遺跡

### 位置

今回発掘調査を行った地区は佐久平の北部、佐久市大字長土呂及び岩村田地籍に所在する。佐久平の北部地域は浅間山麓の末端部に位置し、御代田町方面から南西方向に放射状にのびる田切り地形が発達した地域であり、この田切りに挟まれた浅間第一軽石流を基盤とする帯状の台地上には長土呂遺跡群・枇杷坂遺跡群・周防畑遺跡群・芝宮遺跡群など佐久市でも有数の遺跡群が展開している。これらの台地上では上信越自動車道関係の発掘調査をはじめとして、岩村田北部第一土地区画整理事業・佐久流通業務団地造成事業・国道141号道路改良事業などに伴う大規模な発掘調査が行われている。

今回の調査対象地は北陸新幹線佐久駅周辺の土地区画整理事業用地約60haであり、これらの台地の南西端部にあたる。この台地は徐々に田切り地形との比高差を減じて今回の調査区付近で消滅し圃場整備による平坦な水田地帯が広がっている。しかし、この一見平坦に見えるこの水田地帯の下には塚原泥流の残丘による微高地とそれを取り巻く低地が存在することが周辺の発掘調査によって判明している。

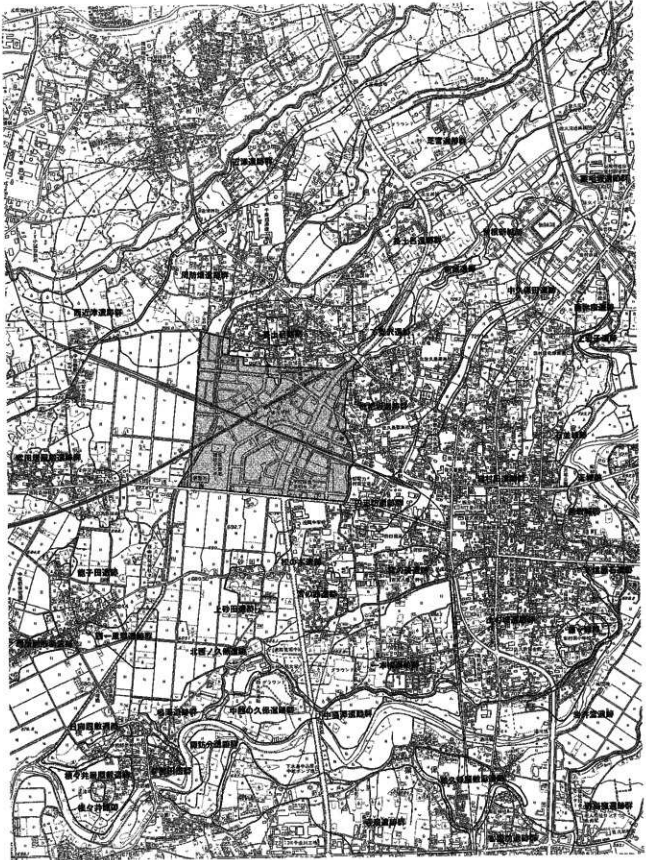
### 周辺遺跡

今回の調査地は北東方向からのびる田切り地形の末端部にあたり、東方に枇杷坂遺跡群・円正坊遺跡群、北方に長土呂遺跡群・周防畑遺跡群が展開している。また、西方の長土呂及び塚原、南方の岩村田市街地南西部、浅間中学校付近では低湿地や塚原泥流による残丘上に多くの遺跡がみられる。更にこの低地を挟んだ湯川右岸には北西ノ久保遺跡群・一本柳遺跡群・中西の久保遺跡群などが展開している。

枇杷坂遺跡群・長土呂遺跡群・周防畑遺跡群は、御代田町方面から南西方向にのびる田切り地形に挟まれた台地上に展開する遺跡群であり、上信越自動車道関係の発掘調査をはじめとして佐久流通業務団地造成事業・道路整備事業・区画整理事業等に伴う大規模な発掘調査が相次いで行われている。長土呂遺跡群では佐久流通業務団地造成事業に伴い、聖原遺跡Ⅰ・Ⅲ・Ⅳ～Ⅵ・Ⅷ・Ⅸの発掘調査が平成元年度から7年度に実施され、西方に隣接して平成7年度に行われた聖原遺跡Ⅹと併せて竪穴住居址975棟、掘立柱建物址858棟等が調査された。また、岩村田北部第一土地区画整理事業に伴い長土呂遺跡群曾根新城遺跡Ⅰ～Ⅳ・Ⅵ、枇杷坂遺跡群上久保田向遺跡Ⅰ・Ⅱ・Ⅴ～Ⅶ、栗毛坂遺跡群西曾根遺跡Ⅱ・Ⅲの調査が実施された。竪穴住居址40棟、掘立柱建物址35棟等が検出され、古墳時代から平安時代の集落が台地上に広がっていることが確認されている。周防畑遺跡群では、昭和55年度に遺跡群南端部の微高地上に位置する周防畑B遺跡の発掘調査が行われ、弥生時代後期の住居址の他、径約5mの円形周溝墓を中心とする土壘墓群が調査されている。

円正坊遺跡群はJR小海線によって枇杷坂遺跡群と画されているが、同一の台地上の南西端部にあたり枇杷坂遺跡群から連続するものである。円正坊遺跡では5回にわたって調査が行われており、円正坊遺跡Ⅰ・Ⅲ・Ⅳでは古墳時代中期から後期、平安時代の竪穴住居址、弥生時代後期から古墳時代の周溝が検出され、円正坊遺跡Ⅱ・Ⅴでは弥生時代中期・後期の竪穴住居址が調査されている。また、昭和53年に調査された清水田遺跡では弥生時代中期Ⅰ種・後期Ⅰ0棟、古墳時代中期3種の竪穴住居址、土壘墓、溝が調査された。

田切りの消滅した平地部分では、国道141号バイパス工事に伴い松の木遺跡Ⅰ・Ⅱ、中長塚遺跡Ⅰ・Ⅱの調査が行われ、低地に囲まれた微高地から弥生時代後期後半から古墳時代の竪穴住居址10棟、掘立柱建物址等が検出された。



第2圖 周辺灌漑分布図(1)

また、湧り遺跡では弥生時代から現代までの水田層が確認されている。この地域はかねてから古代の生産址の存在が予想されていた地域であり、湧り遺跡・中長塚遺跡の他に現在圃場整備の行われた水田下に破壊されずに残存している可能性が高いと考えられている。

一本柳遺跡群では、東一本柳遺跡・東一本柳古墳・北一本柳遺跡・西一本柳遺跡の調査が行われている。特に昭和46年に調査された東一本柳古墳は、金剛製の杏葉・辻金具、鉄製帯をはじめとする用具、鉄鍬、刀装具、玉類などの豊富な副葬品で知られている。また、西一本柳遺跡では国道141号バイパス建設等に伴い多くの発掘調査が行われており、弥生時代中期から平安時代までの住居址200棟以上が調査され、平成3・4年度に調査された西一本柳遺跡Iでは頸部下で欠損した人面付き土器が出土した。

北西ノ久保遺跡の調査では弥生時代中期から平安時代の住居址158棟をはじめ、弥生時代の方形周溝墓・木棺墓群、多量の埴輪が出土した古墳時代中期から後期の古墳群等が調査され、台地の東斜面からは中世の五輪塔等の石塔婆群が検出されている。

第1表 周辺遺跡一覧表

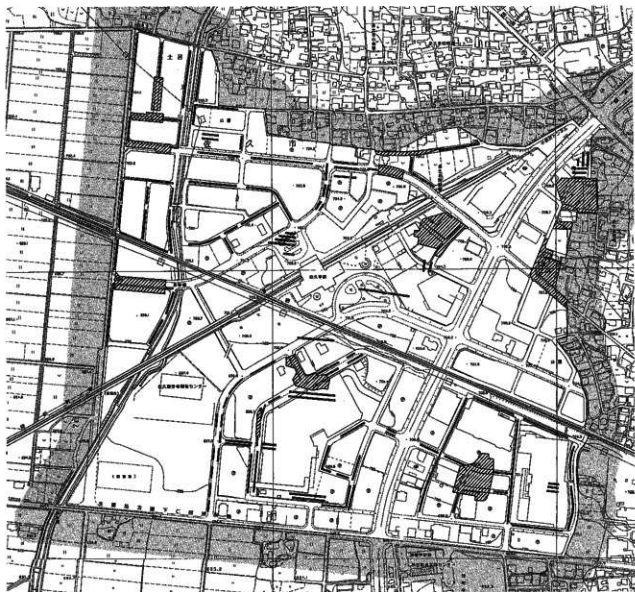
編	所在地	調査年次	検出遺構・出土遺物等	
1	長土呂遺跡群上村遺跡	長土呂字上村	平成7年度	本調査
2	長土呂遺跡群上村田遺跡	長土呂字上村田	平成8年度	
3	長土呂遺跡群永有遺跡	惣村田字永有	平成10年度	
4	長土呂遺跡群下宿田遺跡	長土呂字下宿田	平成3年度	
5	惣村田遺跡群磯路遺跡I	長土呂字磯路	平成3年度	
6	惣村田遺跡群磯路遺跡II	長土呂字磯路	平成10年度	
7	惣村田遺跡群磯路遺跡III	長土呂字磯路	平成11年度	
8	内正坊遺跡群清水田遺跡I	惣村田字清水田	平成10年度	
9	内正坊遺跡群清水田遺跡II	長土呂字清水田	平成11年度	
10	内正坊遺跡群中出田遺跡	長土呂字中出	平成11年度	
11	下宿田遺跡	長土呂字下宿田	平成1年秋	検出遺構なし
12	惣村田遺跡群上直道遺跡I	惣村田字上直道	昭和60年度	住居址2 (弥生後期)・溝2・銅鏡
13	惣村田遺跡群上直道遺跡II	惣村田字上直道	昭和59年度	住居址5 (古墳後期～平安)・土坑4・銅鏡・漆
14	内正坊遺跡群内正坊遺跡I	惣村田字内正坊外	平成8年度	住居址6 (弥生～平安)・竪立柱建物址1・古墳址1・土坑8
15	内正坊遺跡群内正坊遺跡II	惣村田字内正坊外	平成11年度	住居址3I (古墳中・後期、平安)・竪立柱建物址2I・銅鏡・漆
16	内正坊遺跡群内正坊遺跡III	惣村田字内正坊外	平成11年度	住居址5 (古墳後期～弥生中期)・土坑2
17	内正坊遺跡群内正坊遺跡IV	惣村田字内正坊外	平成14年度	住居址3II (弥生～平安)・竪立柱建物址4・土坑
18	内正坊遺跡群内正坊遺跡V	惣村田字内正坊外	昭和53年度	住居址15 (弥生・古墳)・竪立柱建物址1・井戸址1・土坑2・溝2
19	内正坊遺跡群内正坊遺跡VI	惣村田字内正坊外	昭和62年度	住居址7 (弥生後期～平安)・竪立柱建物址・内正坊遺溝・土器墓
20	湯田遺跡	長土呂字湯田	平成12年度	住居址3 (弥生後期～古墳前期)・土坑1・溝1
21	湯田遺跡群中出田遺跡I	長土呂字中出	平成12年度	溝3
22	湯田遺跡群中出田遺跡II	長土呂字中出	平成12年度	溝3
23	湧り遺跡	坂屋字湧り・丸山	平成4年秋	水田跡・溝
24	内正坊遺跡群高石遺跡	惣村田字高石	昭和60年度	土坑2 (弥生後期～古墳前期)
25	惣の木遺跡I	惣村田字惣の木	平成8年度	住居址6 (弥生後期～平安)・土坑2・溝4
26	惣の木遺跡II	惣村田字惣の木	平成9年度	住居址4 (弥生後期～古墳中期)
27	惣の木遺跡III	惣村田字惣の木	平成10年度	住居址7 (弥生～古墳後)・溝1
28	中長塚遺跡I・II	惣村田字中長塚	平成6・10年度	水田跡
29	宮の西遺跡	惣村田字宮の西	昭和59年度	検出遺構なし
30	一本柳遺跡群北一本柳遺跡	惣村田字北一本柳	昭和47年度	住居址16 (弥生後期～平安)・土坑5I
31	一本柳遺跡群東一本柳遺跡	惣村田字東一本柳	昭和43年度	住居址5 (古墳後期)
32	一本柳遺跡群西一本柳遺跡I	惣村田字西一本柳	平成2・4年度	住居址5 (弥生・古墳)・竪立柱建物址3・溝1・人面付土器
33	一本柳遺跡群西一本柳遺跡II	惣村田字西一本柳	平成4年度	住居址69 (弥生中期～平安)・竪立柱建物址5・土坑11・溝2I
34	一本柳遺跡群西一本柳遺跡III	惣村田字西一本柳	平成7・8年度	住居址20I (弥生～平安)・竪立柱建物址6・土坑12・溝1I
35	一本柳遺跡群西一本柳遺跡IV	惣村田字西一本柳	平成8年度	住居址8 (弥生～平安)・竪立柱建物址10・土坑7・溝13
36	一本柳遺跡群西一本柳遺跡V	惣村田字西一本柳	平成9年度	溝7・ビッド12
37	一本柳遺跡群西一本柳遺跡VI	惣村田字西一本柳	平成10年度	住居址17 (弥生～平安)・竪立柱建物址1・竪立柱建物址5・土坑8・溝
38	一本柳遺跡群西一本柳遺跡VII	惣村田字西一本柳	平成12～14年度	住居址84 (弥生～平安)・竪立柱建物址3I・土坑5I・溝7
39	一本柳遺跡群西一本柳遺跡VIII	惣村田字西一本柳	平成14年度	住居址5I (弥生～平安)・竪立柱建物址9・土坑8・溝12
40	中西ノ久保遺跡群中西ノ久保遺跡I	惣村田字中西ノ久保	平成4年度	住居址18 (古墳後期～平安)・竪立柱建物址1・土坑4・溝2
41	中西ノ久保遺跡群中西ノ久保遺跡II	惣村田字中西ノ久保	平成7年度	住居址34 (古墳～平安)・竪立柱建物址7・溝3
42	中西ノ久保遺跡群中西ノ久保遺跡III	惣村田字中西ノ久保	平成9年度	住居址23 (古墳～平安)・竪立柱建物址5・溝2
43	中西ノ久保遺跡群中西ノ久保遺跡IV	惣村田字中西ノ久保	平成10年度	住居址16 (古墳～平安)・竪立柱建物址2
44	持田遺跡	惣久保字持田	平成7年度	住居址30 (古墳～平安)・竪立柱建物址9・内正坊遺溝・土坑
45	北西ノ久保遺跡	惣村田字北西ノ久保	昭和57・60年度	住居址158 (弥生中期～平安)・周溝17・銅深鉢・木棺墓他
46	堀沢遺跡群丸屋田遺跡	堀4字丸屋田	平成9年度	住居址43 (弥生中期)・周溝4 (弥生後期)・周溝2・竪立柱建物址他・銅鏡・鉄鏡
47	西一本柳遺跡群西一本柳遺跡	惣村田字西一本柳	昭和43年度	住居址11 (弥生後期)・周溝・土坑7・竪立柱建物1・溝6
48	西一本柳遺跡群西一本柳遺跡	惣村田字西一本柳	昭和48年度	溝5・水溝1 (近代)





第3図 周辺遺跡分布四(2)

## 第5節 試掘調査



第4図 調査区・トレンチ敷定図

今回調査を行った佐久駅周辺土地区画整理事業用地は、北側で長土呂遺跡群、東側で枇杷坂遺跡群・円正坊遺跡群に隣接しており、面積約60haと広大な範囲であることから、事前に調査対象地内の地層及び遺構の有無を把握するため試掘調査を実施した。

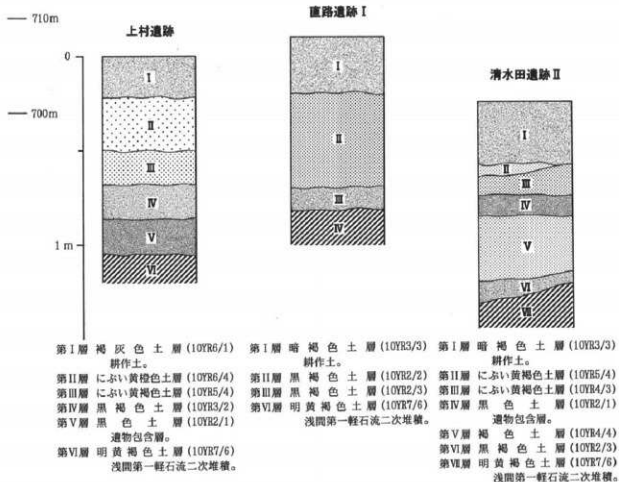
試掘調査は事業用地内の主に道路用地部分を中心として幅約2mのトレンチを重機によって掘り下げを行った。調査地は前述したように田切り地形が消滅した一見平坦な水田地帯であるが、試掘調査の結果、水田圃場整備により一部削平を受けている部分も認められたものの、水田下に多くの遺構が破壊されずに残っていることが判明した。これらの遺構は、田切りの谷から押し出された堆積土によって形成された低湿地に囲まれた塚原泥流の残丘と北東方向から延びる浅間第一軽石流に覆われた微高地上に展開していることが確認されたことから、第4図に示したように面的調査の範囲を決定した。また、低地部では砂層・シルト層下に泥炭層の厚い堆積がみられた。

なお、調査区内を南北に延びる国道141号バイパスについても事前に試掘調査を行ったが、北方から延びる田切り地形末端部の低地部分にあたり遺構は検出されなかった。

## 第6節 基本層序

今回の調査地は北東方向からのびる田切り地形の末端部にあたり、これらの田切り地形に挟まれた台地上に展開する長土呂遺跡群・枇杷坂遺跡群・周防畑遺跡群の南西縁辺部にあたる。また、円正坊遺跡群はJ R小海線によって枇杷坂遺跡群と画されているが同一の台地上に位置し、枇杷坂遺跡群から連続するものである。この田切りは本調査地付近で消滅し、田切りの谷から押し出された堆積土によって形成された低湿地が広がる。

基本層序の抽出は調査地北端部の上村遺跡、東端部の直路遺跡Ⅰと南側の清水田遺跡Ⅱの3箇所で行った。各遺跡における遺構確認面はそれぞれ第Ⅵ層・第Ⅱ層・第Ⅴ層上面である。

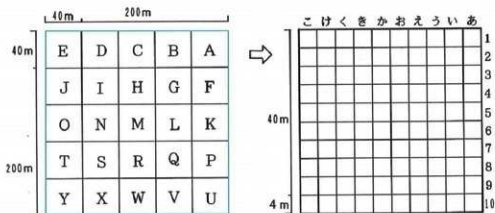
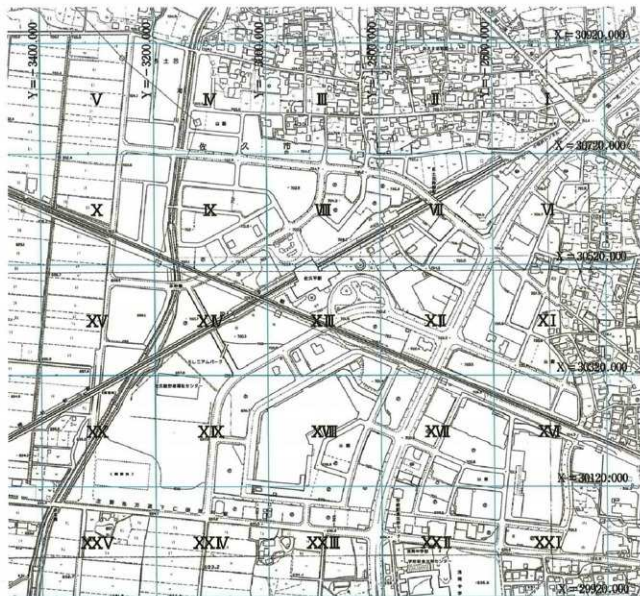


第5図 基本層序模式図

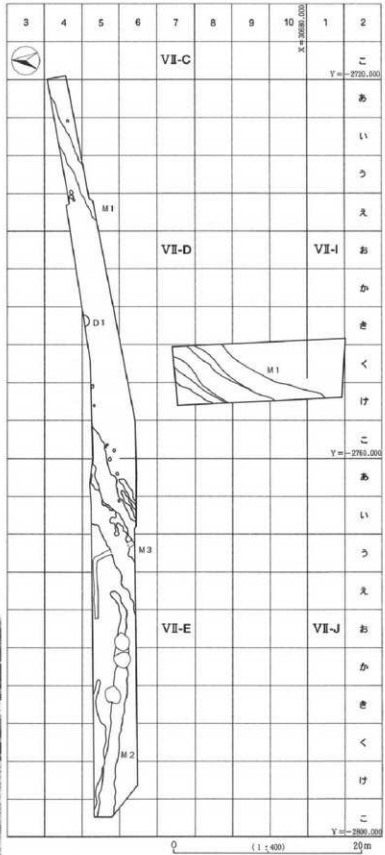
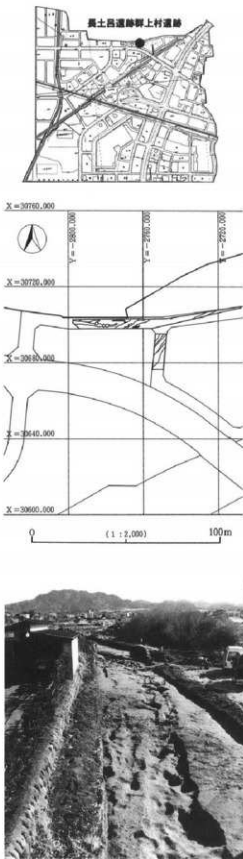


直路遺跡H 5・6・8・16号住居址において、左写真に示したように地盤のズレが確認され、H 8号住居址の西壁を例示した。浅間第一軽石流が水平方向にズレている状況が窺える。この地盤のズレは直路遺跡の南東約350mの円正坊遺跡Ⅰ～Ⅴにおいても確認されており、いずれも台地の縁辺部に位置する遺跡である。円正坊遺跡Ⅳでは弥生時代から古墳時代後期の竪穴住居址においてみられるもの、平安時代の竪穴住居址ではこの現象はみられていない。

以上から、平安時代以前に低地に臨む台地の縁辺部におきた現象であると考えられる。



第6図 グリッド設定図



第7図 長土呂遺跡群上村遺跡全体図

## 第II章 長土呂遺跡群上村遺跡

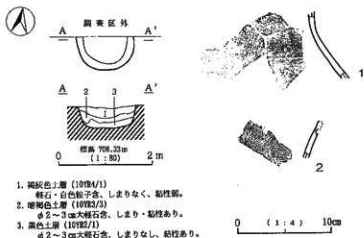
### 第1節 土坑

#### D1号土坑 (第8図、図版4)

調査区中央東側Ⅷ-D-き-5グリッドで検出された。他遺構との重複関係はないものの、北半部は調査区外であるため、規模・形状は不明であるが、径1.2m前後の円形を呈するものと考えられる。確認面からの深さは38cmを測り、覆土は3層からなる。底面は平坦である。

遺物は弥生土器壺(1)、甕(2)を図示した。

1は頸部に髷指T字文が施文される壺であり、2は柳指波状文・羽状文が施文される甕の口縁部片である。その他、赤色塗彩された壺の胴部片、柳指波状文の甕がある。



1. 褐色土層 (1072/1)  
軽石・白色粘土、しまりなく、粘性弱。
2. 暗褐色土層 (1072/3)  
φ2~3cm大礫石多、しまり・粘性あり。
3. 黒色土層 (1072/1)  
φ2~3cm大礫石多、しまりなし、粘性あり。

第8図 D1号土坑

### 第2節 溝址

#### M1号溝址 (第9図、図版4・5)

調査区東側Ⅷ-D-あ-4グリッドからえ-5グリッドにかけて検出され、調査区内13.6mについて調査を行った。他遺構との重複関係はない。幅1.1~1.4m、深さ30~74cmを計測する。東から西に向かって傾斜しており、比高差は40cmを測る。覆土は7層からなり、底面には砂が堆積していることから流路と考えられる。

遺物は弥生土器7点(1~7)を図示した。

1は蓋、2・3は鉢である。2・3は内面に赤色塗彩が施されており、同一個体であると考えられる。

#### M2号溝址 (第9図、図版4・5)

調査区西側Ⅷ-E-え-5グリッドからこ-5グリッドにかけて検出された。東西方向に延びる溝で、一部攪乱により破壊される。検出長24.4m、幅60cm~1.6mを計測する。深さは東端部が最も浅く6cmで西端部で45cmを測り、東から西に向かって傾斜している。覆土は2層からなり、砂の堆積がみられることから流路と考えられる。

遺物は須恵器1点の他、古銭、石器、銅鐙を図示した。

9は「元豊通寶」(初建年1078年)で書体は行書である。10は磨製石鏃である。11は銅鐙で幅1.2cmを測るが、小片のため径は不明である。

#### M3号溝址 (第10図、図版4・5)

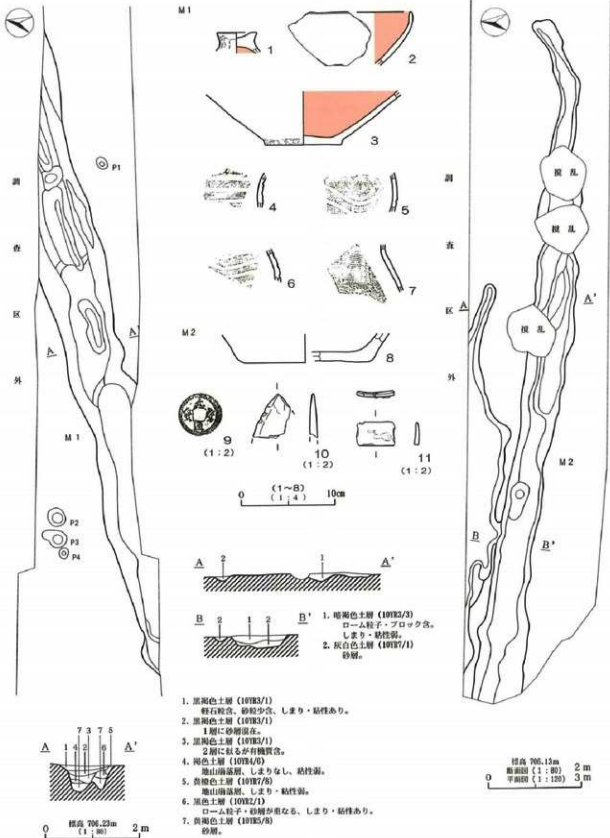
調査区中央付近Ⅷ-D-こ-5グリッドからⅧ-E-え-6グリッドにかけて検出された。調査区内を北東方向から南西方向に向かって延びる溝で、一部暗渠により破壊される。検出長13m、幅4.8m、深さ20~80cm内外を測る。覆土は4層からなり一部砂の堆積がみられ、底面も凹凸の激しい状態であることから流路と考えられる。

遺物は小皿(1~3)、土鍋(4・5)、甕(6)、瓶子(7)、瓦塔(8)、石器(9~16)を図示した。

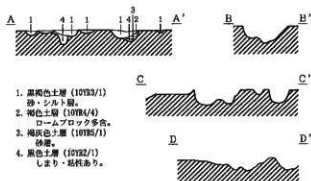
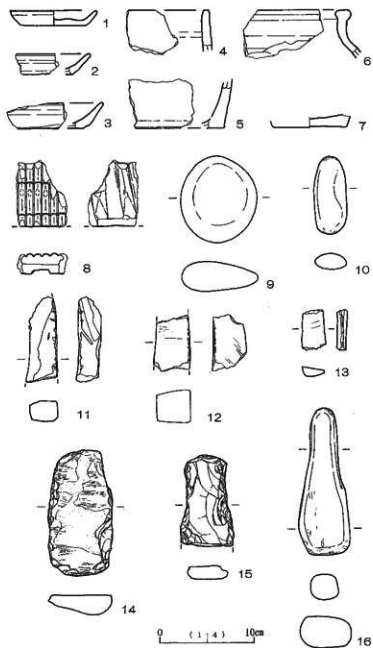
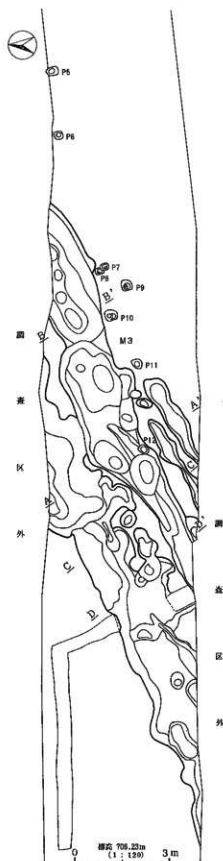
1~3はロクロナデによる土師質土器小皿であり、ロクロからの切り離し方法は回転車切りである。4・5は土鍋片で、4は口唇部に面取りが施される。7は瀬戸瓶子の底部である。

8は瓦塔の屋蓋部であり、表面に丸瓦、裏面に垂木が表現されている。

11~13は砥石であり、11・12は4面が使用されている。石斧には14・15がある。14は擦面がみられるが、製作途中で放棄されたものであろう。



第9図 M1・2号溝址、ピット



第10図 M3号溝址、ピット



第2表 M1～3号溝址出土遺物観察表

No	器種	法 量			外形・調整・文様		備 考
		口径(長)	底径(幅)	器高(厚)	外 面	内 面	
1	蓋	4.0	—	<2.0>	ナデ	赤色塗彩	M1
2	片	—	—	<5.6>	ヘラミガキ	ヘラミガキ、赤色塗彩	M1
3	片	—	<8.0>	<5.3>	ヘラミガキ	ヘラミガキ、赤色塗彩	M1
8	壺	—	<12.0>	<3.0>	ナデ	ナデ	M2
9	元倉通寶	2.3	—	—	—	—	M2, 3.2g
10	磨製石鏃	1.5	2.6	0.4	—	—	M2
11	銅圓	2.0	1.2	0.2	—	—	M2
1	小皿	9.0	6.8	1.6	ロクロナデ	ロクロナデ	M3
2	小皿	—	—	<2.2>	ロクロナデ	ロクロナデ	M3
3	小皿	—	—	<2.7>	ロクロナデ	ロクロナデ	M3
4	土鍋	—	—	<4.2>	ナデ、口唇部曲取り	ナデ	M3
5	土鍋	—	—	<5.2>	ナデ	ナデ	M3
6	茶	—	—	<4.5>	—	—	M3
7	飯子	—	7.8	<1.2>	—	—	M3
8	瓦管	—	—	—	—	—	M3
9	礫石・磁石	9.1	8.2	3.2	—	—	M3, 315g
10	礫石	8.1	3.6	2.0	—	—	M3, 75g
11	磁石	9.0	3.4	2.4	—	—	M3, 84.6g
12	磁石	5.9	3.9	3.5	—	—	M3, 100.2g
13	磁石	4.2	2.7	1.1	—	—	M3, 15g
14	打製石斧	13.3	6.8	2.2	未製品	—	M3, 300g
15	打製石斧	9.7	5.7	1.6	—	—	M3, 128g
16	礫石・磁石	15.6	5.5	3.1	—	—	M3, 311g

## 第3節 ビット (第9・10図)

単独ビットは調査区東側M1号溝址付近で4基、調査区中央M3号溝址付近で5基の12基が検出された。規模は径10～40cm、深さ5～30cm前後を測る。各ビットからの出土遺物はないが、P9内底面より10cm前後の礫が5個まとまった状態で出土している。

各ビットの検出位置・規模等については、ビット一覧表に記した。

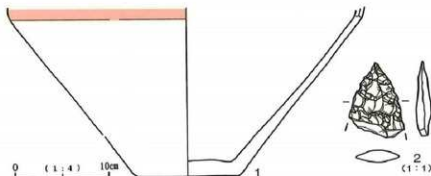
第3表 ビット一覧表

No	検出位置	規模(cm)		備 考	No	検出位置	規模(cm)		備 考	
		径	深さ				径	深さ		
1	Ⅱ-E-1-4	14	12	10	7	Ⅱ-D-1-5	28	21	28	P8を切る
2	Ⅱ-D-1-4	20	18	7	8	Ⅱ-D-1-5	24	22	28	P7に切られる
3	Ⅱ-D-1-4	27	18	6	9	Ⅱ-D-1-5	36	33	32	
4	Ⅱ-D-1-4	12	10	5	10	Ⅱ-E-1-5	41	38	21	
5	Ⅱ-D-1-5	36	27	11	11	Ⅱ-E-1-5	35	30	30	
6	Ⅱ-D-1-5	25	24	18	12	Ⅱ-E-1-5	32	26	20	M3を切る

## 第4節 遺構外出土遺物 (第11図、図版5)

遺構外出土遺物として壺(1)、打製石鏃(2)を図示した。

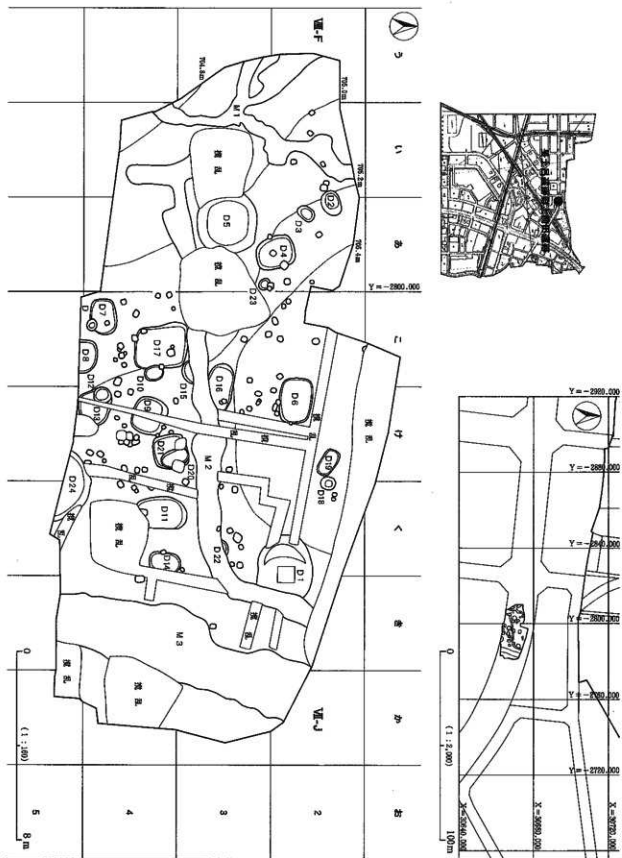
1は調査区西端部、Ⅱ-E-1-4-6グリッドから出土した壺で、胴部上半は赤色塗彩され、下半はヘラミガキが行われる。内面は剥離が著しい。2は黒曜石製の打製石鏃である。この他、土師器・須恵器の小片が出土している。



第11図 遺構外出土遺物

第4表 遺構外出土遺物観察表

No	器種	法 量			外形・調整・文様		備 考
		口径(長)	底径(幅)	器高(厚)	外 面	内 面	
1	壺	—	10.7	<17.8>	ヘラミガキ、胴上半赤色塗彩	剥離	
2	打製石鏃	2.0	1.4	0.4	基部欠損	—	0.8g



第12図 長土呂遺跡群上南田遺跡全体図

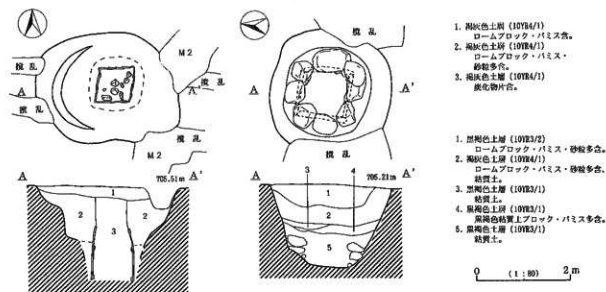
## 第三章 長土呂遺跡群上前田遺跡

## 第1節 土坑 (第13~15図、図版6~11)

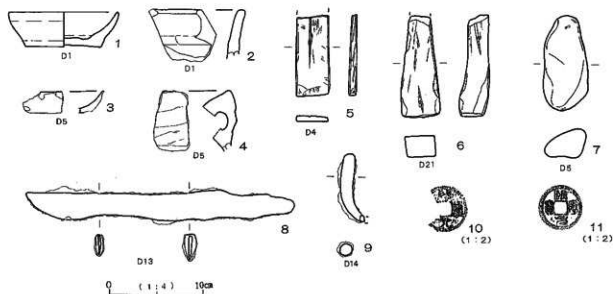
上前田遺跡で検出された土坑は25基を数え、調査区のはほぼ全面から検出された。そのうちD1号土坑・D5号土坑は井戸址である。本遺跡の北方に長土呂館跡が存在しており、これに関連した遺構であると思われる。

土坑内から出土した遺物には皿・内耳土器・石器・鉄製品・古銭がある。1・2はD1号土坑、3・4・7はD5号土坑からの出土である。5・6は砥石でD4号土坑・D21号土坑からの出土であり、6は4面が使用されている。8はD13号土坑から出土した小柄で全長28.5cmを測る。10は「開元通寶」(初鑄年960年・真書)、11は「熙寧元寶」(1068年・篆書)でD14号土坑、D21号土坑からの出土である。

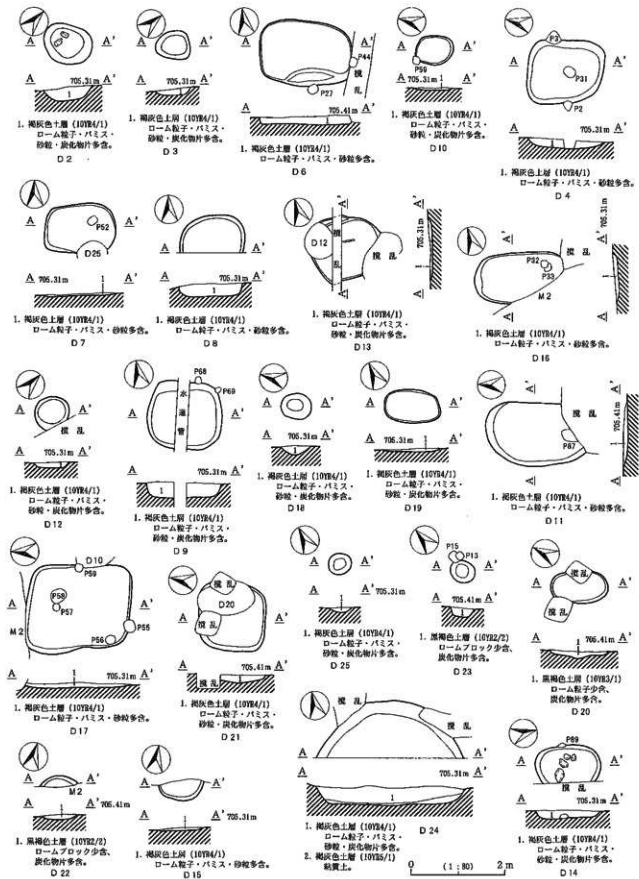
各土坑の規模・形態等については土坑一覧表に記した。



第13図 D1・5号土坑



第14図 土坑内出土遺物



第15図 D 2~4・6~25号土坑

第5表 土坑内出土遺物観察表

No	器 種	法 量			形 状・調 整・文 様		備 考
		口径(長)	底径(幅)	器高(厚)	外 面	内 面	
1	小皿	(11, 6)	(8, 0)	3.7	ロクロナデ、底面彫刻糸切り	ロクロナデ	D1
2	土鍋	—	—	<4, 7>	ナデ、口唇部彫取り	ナデ	D1
3	土鍋	—	—	2, 2	ロクロナデ、底面彫刻糸切り	ナデ	D5
4	土鍋	—	—	<5, 7>	ナデ、口唇部彫取り	ナデ、耳部貼り付け	D5
5	瓶石	8.6	3.5	0.8			D4、29g
6	瓶石	10.6	4.1	2.9			D21、172g
7	瓶石・瓶石	10.0	5.8	3.2			D5、215g
8	小瓶	28.4	3.6	2.3			D13
9	鉄製品	3.6	0.9	0.7			D14
10	陶元透貨	2.4	—	—			D14、12g
11	陶元元貨	2.4	—	—			D21、3.0g

第6表 土坑一覧表

No	検出位置	平面形態	規 模 (cm)			長軸方向	備 考
			長軸長	短軸長	深さ		
D1	Ⅶ-J-き-2	楕円形	310	230	—	N-90°	井戸址、M2・覆瓦に切られる。
D2	Ⅶ-F-あ-2	楕円形	105	88	33	N-69°-E	
D3	Ⅶ-F-あ-2	楕円形	73	60	15	N-35°-E	
D4	Ⅶ-F-あ-2	楕丸長方形	163	128	25	N-15°-W	P2・3・31に切られる。
D5	Ⅶ-F-あ-3	円形	260	—	198	—	井戸址、覆瓦に切られる。
D6	Ⅶ-J-け-2	楕丸長方形	195	140	25	N-81°-W	P27・44に切られる。
D7	Ⅶ-J-こ-4	楕丸長方形	150	100	7	N-85°-E	D25、P52に切られる。
D8	Ⅶ-J-こ-4	—	140	—	17	—	南半部調査区外。
D9	Ⅶ-J-け-4	楕丸長方形	160	150	36	N-71°-W	P68・69、覆瓦に切られる。
D10	Ⅶ-J-こ-4	楕円形	83	65	5	N-9°-W	D17を切る。P59に切られる。
D11	Ⅶ-J-く-4	楕円形	—	134	11	—	P87、覆瓦に切られる。
D12	Ⅶ-J-け-4	円形	76	—	17	N-10°-E	D13を切る。覆瓦に切られる。
D13	Ⅶ-J-け-4	楕丸長方形	150	140	10	N-73°-E	D12、覆瓦に切られる。
D14	Ⅶ-J-く-4	楕円形	135	—	18	N-13°-E	P89、覆瓦に切られる。
D15	Ⅶ-J-こ-3	(円形)	—	—	4	—	M2に切られる。
D16	Ⅶ-J-こ-3	楕円形	—	—	15	—	M2、P32・33、覆瓦に切られる。
D17	Ⅶ-J-こ-4	楕丸長方形	220	175	9	N-5°-W	D10、M2、P55-59に切られる。
D18	Ⅶ-J-く-2	楕円形	65	56	20	N-9°-W	
D19	Ⅶ-J-け-2	楕円形	117	70	13	N-60°-W	
D20	Ⅶ-J-け-3	楕円形	125	80	17	N-25°-W	D21を切る。覆瓦に切られる。
D21	Ⅶ-J-け-4	楕丸長方形	140	135	21	N-11°-W	D20、覆瓦に切られる。
D22	Ⅶ-J-く-3	—	—	—	11	—	M2に切られる。
D23	Ⅶ-F-あ-3	楕円形	53	45	28	N-32°-W	P13・15に切られる。
D24	Ⅶ-J-く-5	(円形)	—	—	38	—	覆瓦に切られる。南側調査区外。
D25	Ⅶ-J-こ-4	楕円形	50	40	14	N-47°-W	D7を切る。

## D1号土坑 (第13・14図、図版6・11)

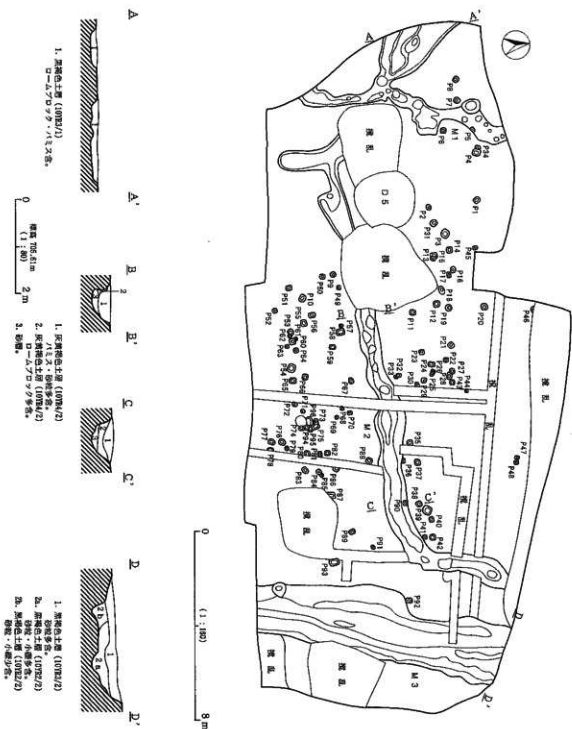
調査区北東部Ⅶ-J-き-2グリッドから検出された井戸址である。東側上部をM2号溝址に切られ、東西に覆瓦による破壊を受ける。長軸長3.1m×短軸長2.3mの楕円形の掘り方内に、板材の木枠が約70cmの方形に組まれている。底面は湧水のため不明である。木枠内には3層が堆積している。

遺物は小皿(1)・土鍋片(2)を図示した。1のロクロからの切り離し方法は回転糸切りである。

## D5号土坑 (第13・14図、図版7・11)

調査区西側Ⅶ-F-あ-3グリッドから検出された井戸址である。東及び西側上面に覆瓦による破壊を受ける。径2.6mの円形の掘り方底面に径10cm前後の丸太材を方形に組んだ後、2段の石積みが円形に組まれる。石積みは内径90cm、高さ40cm前後を測り、石材には軽石と安山岩が用いられている。

遺物は小皿(3)・土鍋片(4)・石器(7)を図示した。3の小皿は外面の剥離が著しいが、ロクロからの切り離し方法は回転糸切りである。



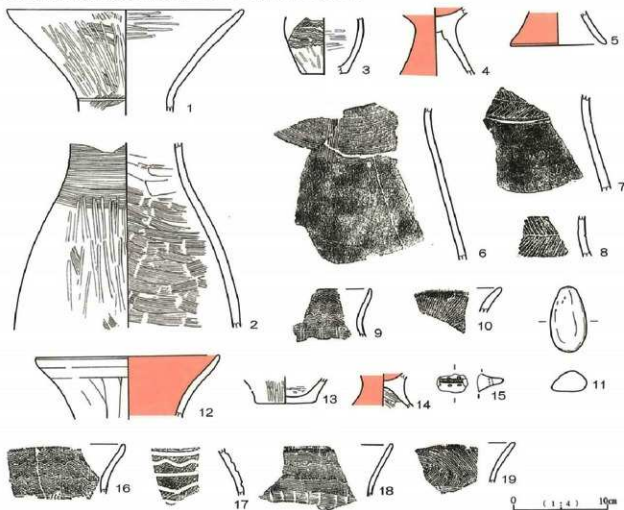
第16図 M1-3号溝坑、ピット

## 第2節 溝 址

## M1号溝址 (第16・17図、図版10・11)

調査区西側Ⅷ-F-ⅰ-2グリッドからⅰ-4グリッドにかけて検出された。南北に延びる溝で、ⅰ-3グリッドで西方からの溝が合流する。検出長9m、幅40~80cm、深さ6~28cmを計測する。北から南に向かって傾斜しており、北端部と南端部の比高差は20cmを測る。覆土は黒褐色土層1層からなり、底面の状態から流路であると思われる。

遺物は弥生土器、石器が出土している。土器の器種には壺(1・2・6~8)、甕(3・9・10)、高坏(4・5)がある。壺の頸部文様には柳描T字文の2・6と埴輪による平行沈線の間に斜位の沈線を波杉状に充填する7・8がある。甕には柳描波状文の施文される3・9と斜走文の10がある。



第17図 M1~3号溝址出土遺物

第7表 M1~3号溝址出土遺物観察表

No	器種	法 量		成 形・調 整・文 様		備 考
		口径(長)	底径(幅)	外 面	内 面	
1	壺	25.2	-	(10.8)	ハラミガキ、頸部柳描横線文	ハラミガキ
2	壺	-	-	(19.4)	ハラミガキ、頸部柳描横線文	ナデ、ハケメ
3	甕	-	(4.8)	(6.0)	柳描波状文	ハラミガキ
4	高坏	-	-	(7.1)	ハラミガキ、赤色塗彩	坏部ハラミガキ、赤色塗彩
5	高坏	-	(10.2)	(3.5)	ハラミガキ、赤色塗彩	ナデ
11	磨石・砥石	6.9	3.8	2.2		M1、29.7g
12	壺	(19.6)	-	(6.7)	ナデ	ハラミガキ、赤色塗彩
13	壺	-	(6.5)	(2.4)	ハラミガキ	ハラミガキ
14	高坏	-	-	(3.2)	ハラミガキ、赤色塗彩	坏部ハラミガキ、赤色塗彩
15	有孔磨石土器	-	-	(2.0)	先頭部縄文	

M2号溝址 (第16・17図)

調査区北側Ⅳ-J-き-2グリッドから西側Ⅳ-F-い-4グリッドにかけて検出された。D1・15・16・17・22号土坑と重複関係があるがいずれも本址の方が新しい。また、一部攪乱による破壊を受けている。検出長20.8m、幅60cmから1m内外、深さは東側で50cm前後であるが、西端部では約10cmと浅く、わずかに東から西に向かって傾斜している。覆土は3層からなり、底面に砂層の堆積が見られることから流路と考えられる。

遺物は弥生土器が出土しており、器種には竝(12)、甕(13・16)、高坏(14)がある。16は頸部に櫛溝状文、口縁部に櫛溝波状文の施文される甕である。

M3号溝址 (第16・17図、図版10)

調査区東側Ⅳ-J-か-2グリッドからき-5グリッドにかけて検出された。調査区を南北に走る溝で、一部攪乱による破壊を受けている。検出長10.8m、幅2～3m、深さ58～77cmを計測する。北から南に向かって傾斜しており、北端部と南端部の比高差は20cmを測る。覆土は砂粒・小礫を含む2層からなり、底面の状態から流路と考えられる。遺物は弥生土器が出土している。18は櫛溝状文と波状文、19は櫛溝状文と羽状文の甕である。

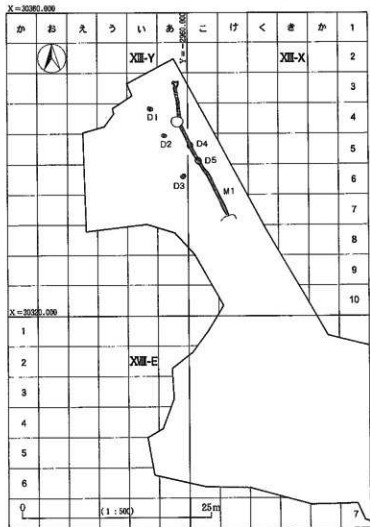
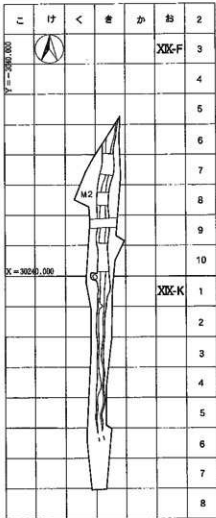
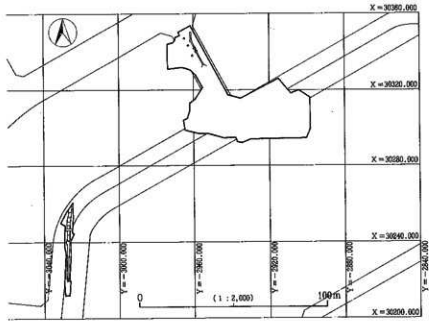
第3節 ビット (第16図、図版10)

本遺跡からは総数で96基のビットが確認された。各ビットの検出位置・規模等についてはビット一覧表に記した。

第8表 ビット一覧表

No	検出位置	規模(cm)		備 考	No	検出位置	規模(cm)		備 考
		径	深さ				径	深さ	
1	Ⅳ-F-あ-2	22	8		49	Ⅳ-J-こ-4	14×12	10	
2	Ⅳ-F-い-1	18	12	D4を切る。	50	Ⅳ-J-こ-4	20×18	15	
3	Ⅳ-F-あ-2	32	21	D4を切る。	51	Ⅳ-J-こ-4	26×21	39	
4	Ⅳ-F-い-2	32	12	P34を切る。	52	Ⅳ-J-こ-4	22×17	19	D7を切る。
5	Ⅳ-F-い-2	24×16	8		53	Ⅳ-J-こ-4	26×24	35	P62を切る。
6	Ⅳ-F-い-2	22×17	4		54	Ⅳ-J-こ-4	34×31	33	
7	Ⅳ-F-い-2	24×16	4		55	Ⅳ-J-こ-4	27×21	10	D17を切る。
8	Ⅳ-F-い-2	20×16	4		56	Ⅳ-J-こ-4	23×17	11	D17を切る。
9	Ⅳ-J-こ-4	18×17	10		57	Ⅳ-J-こ-4	14×12	9	D17を切る。
10	Ⅳ-J-こ-4	28×22	27		58	Ⅳ-J-こ-4	33×27	12	D17を切る。
11	Ⅳ-J-こ-3	16	9		59	Ⅳ-J-こ-4	17×16	4	D10・17を切る。
12	Ⅳ-J-こ-3	24×22	50		60	Ⅳ-J-こ-4	24×23	27	P61を切る。
13	Ⅳ-F-い-1	20×-	25	D23を切る、P15に切られる。	61	Ⅳ-J-こ-4	14×-	10	P60に切られる。
14	Ⅳ-F-あ-2	22	18		62	Ⅳ-J-こ-4	22×-	11	P33に切られる。
15	Ⅳ-F-い-1	30×24	32	D23、P13を切る。	63	Ⅳ-J-こ-4	16×13	9	
16	Ⅳ-J-こ-2	22×20	19		64	Ⅳ-J-こ-4	15	10	
17	Ⅳ-J-こ-2	18×16	10		65	Ⅳ-J-け-4	23×20	32	
18	Ⅳ-J-こ-2	26×21	38		66	Ⅳ-J-け-4	21	29	
19	Ⅳ-J-こ-2	24×22	37		67	Ⅳ-J-け-4	18×15	14	
20	Ⅳ-J-こ-2	28×25	46		68	Ⅳ-J-け-4	15×14	4	D9を切る。
21	Ⅳ-J-こ-2	20	8		69	Ⅳ-J-け-4	12	12	D9を切る。
22	Ⅳ-J-け-2	18×17	27		70	Ⅳ-J-け-4	17×15	8	
23	Ⅳ-J-こ-1	22×20	39		71	Ⅳ-J-け-4	16	32	
24	Ⅳ-J-け-3	26×20	14		72	Ⅳ-J-け-4	14×13	14	
25	Ⅳ-J-け-3	-×16	26	P26に切られる。	73	Ⅳ-J-け-4	18×-	14	P75に切られる。
26	Ⅳ-J-け-3	18×14	27	P25を切る。	74	Ⅳ-J-け-4	18×-	17	P94を切る、覆土に切られる。
27	Ⅳ-J-け-2	22×18	7	D6、P28を切る。	75	Ⅳ-J-け-4	34×25	4	P73・85を切る。
28	Ⅳ-J-け-2	30×14	27	P27に切られる。	76	Ⅳ-J-け-4	26×18	12	
29	Ⅳ-J-け-3	18×15	17		77	Ⅳ-J-け-4	27×19	15	
30	Ⅳ-J-け-3	-×12	11	覆土に切られる。	78	Ⅳ-J-け-4	21×15	13	覆土に切られる。
31	Ⅳ-F-あ-2	25×20	44	D4を切る。	79	Ⅳ-J-け-4	14	5	
32	Ⅳ-J-け-3	17×15	10	D16、P33を切る。	80	Ⅳ-J-け-4	22×20	7	
33	Ⅳ-J-け-3	16	13	D16を切る、P33に切られる。	81	Ⅳ-J-け-4	22×15	5	
34	Ⅳ-F-い-2	22×-	10	P4に切られる。	82	Ⅳ-J-け-4	20×19	23	
35	Ⅳ-J-け-3	23×22	8		83	Ⅳ-J-け-4	28×20	6	
36	Ⅳ-J-け-3	15×12	8		84	Ⅳ-J-け-4	20	4	P85を切る。
37	Ⅳ-J-け-3	24×22	21		85	Ⅳ-J-け-4	12×-	5	P84に切られる。
38	Ⅳ-J-け-3	25×22	31		86	Ⅳ-J-け-4	22	4	
39	Ⅳ-J-け-3	36×33	5		87	Ⅳ-J-け-4	35×24	12	D11を切る、覆土に切られる。
40	Ⅳ-J-け-3	18	10		88	Ⅳ-J-け-4	35×22	6	M2を切る。
41	Ⅳ-J-け-3	18×16	14		89	Ⅳ-J-け-4	14	7	D14を切る。
42	Ⅳ-J-け-3	2・2	17		90	Ⅳ-J-け-3	18×14	12	M2を切る。
43	Ⅳ-J-け-2	23×18	25		91	Ⅳ-J-け-3	18×14	12	
44	Ⅳ-J-け-2	20×-	6	D6を切る、覆土に切られる。	92	Ⅳ-J-け-3	28×16	16	M3を切る。
45	Ⅳ-F-あ-2	16×15	15	覆土に切られる。	93	Ⅳ-J-け-4	44×31	17	覆土に切られる。
46	Ⅳ-J-こ-1	15	15		94	Ⅳ-J-け-4	28×23	13	P95・96を切る、P74、覆土に切られる。
47	Ⅳ-J-け-2	18×14	9		95	Ⅳ-J-け-4	-	7	P75・94に切られる。
48	Ⅳ-J-け-2	16×15	10		96	Ⅳ-J-け-4	40×30	5	P94、覆土に切られる。





第18図 長土呂遺跡群永存遺跡全体

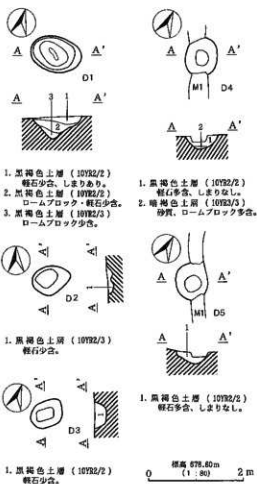
## 第IV章 長土呂遺跡群永存遺跡

### 第1節 土坑 (第19図、図版12)

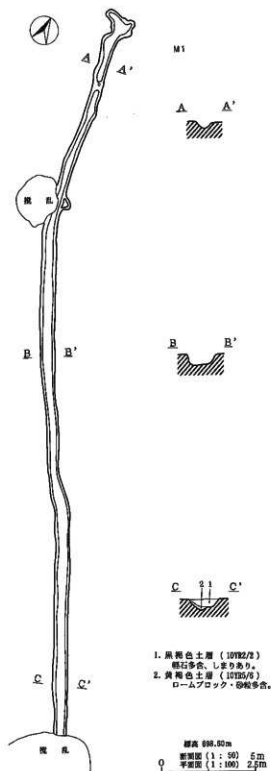
本遺跡からは5基の土坑が検出された。これらは調査区北端部Ⅲ-X-こ-5グリッド及びⅦ-Y-あ・い-4~6グリッド付近、M1号溝址周辺より確認され、D4・5号土坑はM1号溝址に切られる。

各土坑の規模は、D1号土坑が長軸長1.13m×短軸長0.75m×深さ0.47m、長軸方位N-84°-E、D2号土坑が0.8m×0.58m×0.14m、N-74°-E、D3号土坑が0.69m×0.54m×0.25m、N-48°-E、D4号土坑が0.8m×0.7m×0.3m、N-28°-W、D5号土坑が0.8m×0.7m×0.27m、N-46°-Wを測り、楕円形の平面プランを呈する。覆土は黒褐色土層を基調とする。

いずれの土坑からも出土遺物はなく、時期・性格等については不明である。



第19図 D1~5号土坑



第20図 M1号溝址

## 第2節 溝 址

## M1号溝址 (第20回、図版12)

調査区北端部Ⅱ-Y-あ-3グリッドからⅡ-X-け-7グリッドにかけて検出された。南北に延びる溝であり、D4・5号土坑を切る。また、南端部は擾乱による破壊を受けている。検出長19.2m、幅22~40cm、深さ3~15cmを測る。出土遺物はなく性格は不明である。

## M2号溝址 (第21回、図版12)

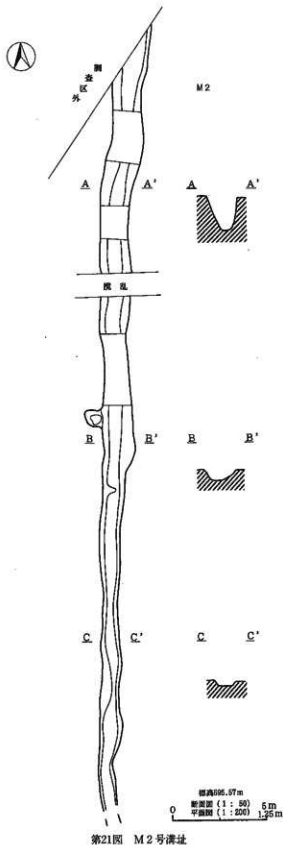
西側調査区Ⅲ-F-き-5グリッドからⅢ-K-き-6グリッドにかけて検出された。北から南に向かって延びる溝であり、他遺構との重複関係はない。検出長41.6m、幅60~165cmを計測する。深さは北端部で30cmを測るが南端部で消滅し、比高差は62cmを測る。出土遺物はなく性格は不明である。

## 第3節 遺構外出土遺物 (第22回、図版12)

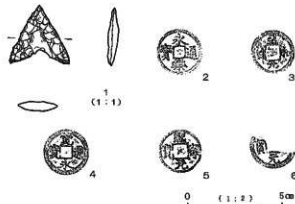
石鏃1点、古銭5点を図示した。

1はチャート製の打製石鏃である。

2は「永楽通寶」(初铸年1408年・真書)、3は「至和元寶」(1054年・真書)、4は「寛永通寶」(1626年・真書)、5は「熙寧元寶」(1068年・真書)、6は欠損品であり銭貨名は不明であり、□□元寶と判読できるのみである。



第21回 M2号溝址

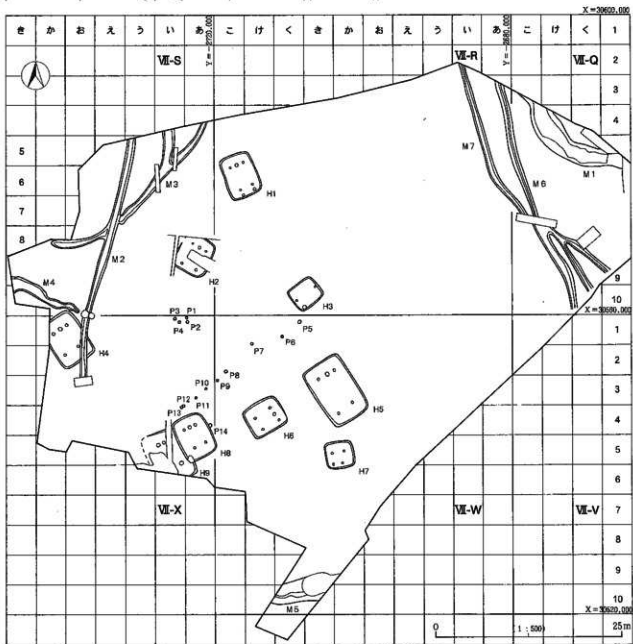
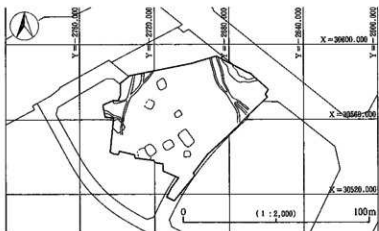


第22回 遺構外出土遺物

第9表 遺構外出土遺物観察表

No	器 種	造 量			備 考
		口縁(長)	底径(幅)	器高(厚)	
1	打製石鏃	1.5	1.6	0.2	0.6g
2	永楽通寶	2.5	-	-	3.1g
3	至和元寶	2.4	-	-	2.8g
4	寛永通寶	2.5	-	-	3.1g
5	熙寧元寶	2.4	-	-	2.3g
6	□□元寶	2.3	-	-	1.7g

第V章 長土呂遺跡群下台母塚遺跡

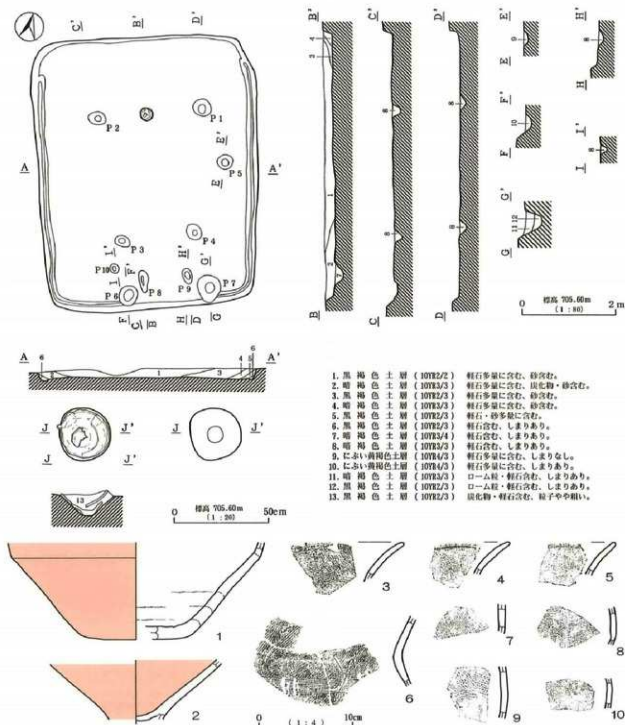


第23図 長土呂遺跡群下台母塚遺跡全体図

# 第V章 長土呂遺跡群下伯母塚遺跡

## 第1節 竪穴住居址

H1号住居址 (第24図、図版14・20)



第24図 H1号住居址

本住居址は調査区北側、Ⅷ-R-こー6グリッドに位置する。他遺構との重複関係はない。南北5.48m、東西4.20mの隅丸長方形を呈し、壁残高13~22cm、床面積22.5㎡を測る。長軸方位はN-17°-Wを示す。周溝は北壁と南壁中央を除いて壁下に巡る。覆土は1層黒褐色土層が主体を占め、自然堆積である。

ピットは9基が検出された。P1~P4が主柱穴であり、17cm~22cmの深さを有する。P6~P9は南壁下中央に位置し、この部分で周溝が途切れていることから出入り口に関する柱穴と考えられる。

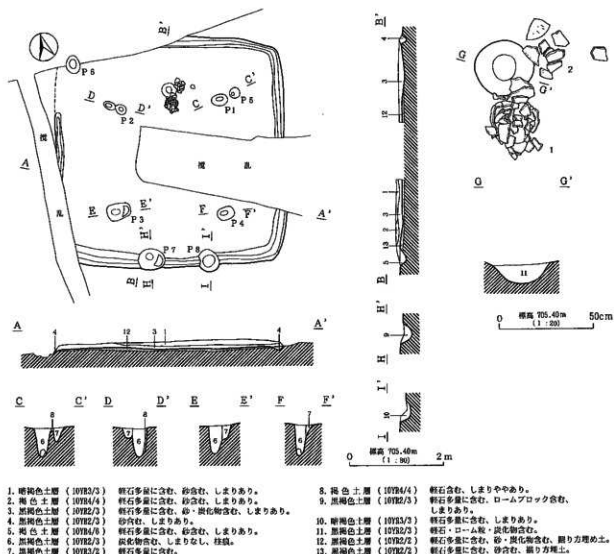
炉址は主柱穴であるP1・P2間に位置し、径28cm、深さ11cmの円形の掘り方に壺の底部(1)と高坏の坏部(2)を埋設して設けられる。

遺物は壺(1)、高坏(2)、甕(3~10)を図示した。

1は外面に赤色塗彩された壺の底部、2は高坏の坏部であり、炉址内に埋設された状態で出土した。甕には構描波状文の3~5、8・10と捺描斜走文の6・7・9がある。

第10表 H1号住居址出土遺物観察表

No	器種	法 量		成 形 ・ 測 量 ・ 文 様		備 考		
		口径(長)	底径(幅)	器高(寸)	外 面		内 面	
1	壺	—	(11.8)	(10.2)	ヘラミガキ、赤色塗彩	別冊	炉	
2	高坏	—	—	(5.8)	ヘラミガキ、赤色塗彩	坏部ヘラミガキ、赤色塗彩	—	炉



第25図 H2号住居址(1)

## H 2号住居址 (第25・26図、図版14・15・20)

本住居址は調査区中央西側、Ⅶ-S-a-8グリッドに位置する。他遺構との重複関係はないものの、北壁西側・西壁南側及び東壁から住居址中央にかけて複乱による破壊を受ける。南北4.9m、東西4.8mの隅丸方形を呈し、壁残高は南壁中央で12cmを計測する。床面積は約23㎡を測る。周溝は全周するものと思われる。覆土は自然堆積であり、床面は12・13層を埋め戻して構築される。

ピットは9基が検出された。P1・P4が主柱穴であるが、これらに隣接してピットが検出されており、柱の建て替えが想定される。また、P1・P4の底面より径15cm・12cmの柱材が出土している。P7・P8は南壁中央より検出され、出入り口に関する柱穴と思われる。

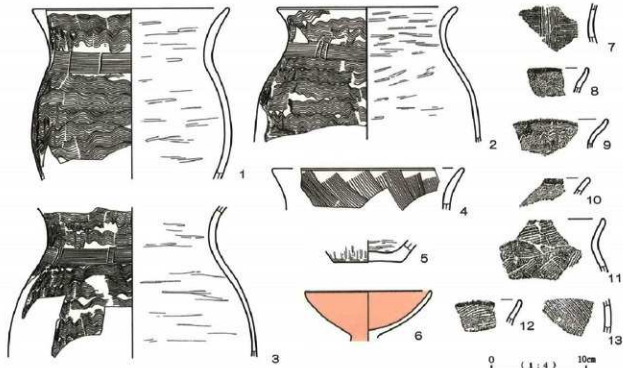
炉址は主柱穴であるP1・P2間北側に位置し、径30cm、深さ10cmの地床炉である。周囲からは甕(1・2)、高坏(6)が出土している。

遺物は甕(1～5・8～13)、高坏(6)、壺(7)を図示した。

甕の施文は柳描によるもので、頸部に崖状文を巡らし、口縁部から胴部に液状文を施文する1～3・8～10と斜走文または羽状文の施文される4・11～13がある。また、11は頸部に崖状文の施文は行われていない。高坏は6が1点出土しており、内外面ともに赤色塗彩が行われる。壺には柳描T字文が施文される頸部片(7)がある。

## H 3号住居址 (第27・28図、図版15・20・21)

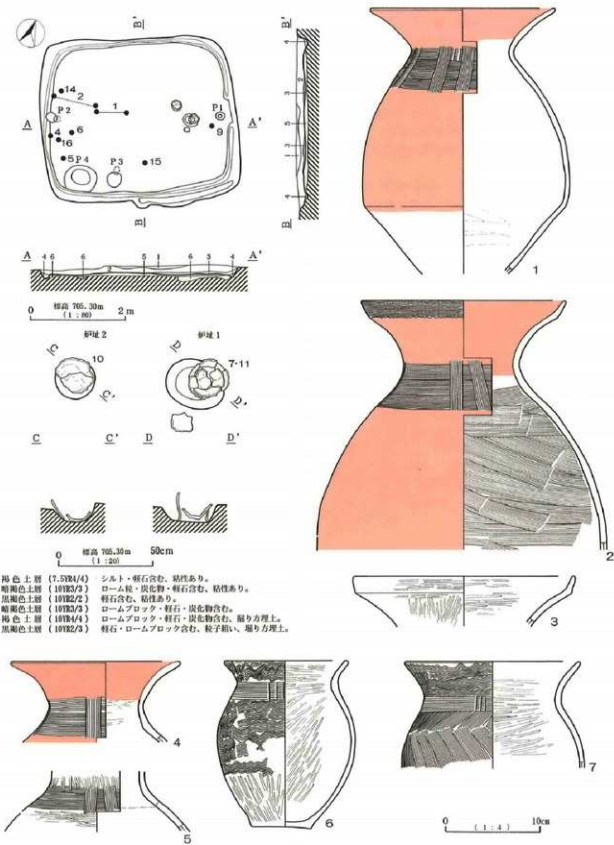
本住居址は調査区中央、Ⅶ-R-き-10グリッドに位置し、他遺構との重複関係はない。南北3.1m、東西3.84mの東西に長い隅丸長方形を呈し、南壁東半部にテラスを有する。壁残高14cm～21cm、床面積10.8㎡を測る小型の住居址である。長軸方位はN-70°-Eを示す。周溝は東壁中央でわずかに断絶するもののほぼ全周する。覆土は自然堆積



第26図 H 2号住居址(2)

第11表 H 2号住居址出土遺物観察表

No	器種	法		口径(長)	底径(幅)	器高(厚)	成形・調整・文様		備考
		口	底				外面	内面	
1	甕	20.8	-	(18.0)			柳描液状文、頸部柳描崖状文	ヘラミガキ	
2	甕	(19.2)	-	(14.2)			柳描液状文、頸部柳描崖状文	ヘラミガキ	
3	甕	-	-	(15.7)			柳描液状文、頸部柳描崖状文	ヘラミガキ	
4	甕	(20.4)	-	(4.4)			柳描斜走文	ヘラミガキ	
5	甕	-	7.4	(1.8)			ヘラミガキ	ヘラミガキ	
6	高坏	13.5	-	(5.2)			ヘラミガキ、赤色塗彩	環部ヘラミガキ、赤色塗彩	



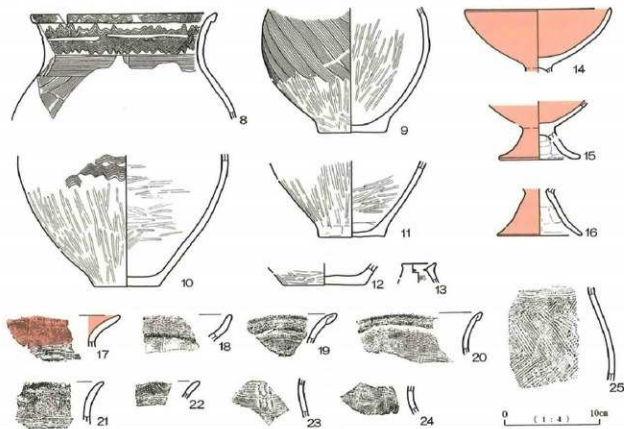
第27図 H3号住居址(1)



であり、床面は5・6層を埋め戻して構築される。

ピットは4基が検出された。東壁・南壁下中央より検出されたP1・P2が主柱穴であろうか。各々16cm・31cmの深さを有する。

炉址は中央東側より2基が検出された。炉址1はP1の西40cmに位置し、径32cm×25cm、深さ10cmの楕円形の掘り方に甕の上半部(7)を口縁部を下に置き、さらにその中に甕の底部(11)を埋設して設けられる。炉址2は炉址1



第28図 H3号住居址(2)

第12表 H3号住居址出土遺物観察表

No	器種	法 量			成 形 ・ 調 整 ・ 文 様		備 考
		口径(長)	底径(幅)	器高(厚)	外 面	内 面	
1	甕	(19.8)	—	(26.1)	ヘラミガキ、赤色塗彩 頸部佛指丁字文	口辺部ヘラミガキ、赤色塗彩 胴部ナデ	
2	甕	21.8	—	(26.2)	ヘラミガキ、赤色塗彩 口縁部佛指状文 頸部佛指丁字文	口辺部ヘラミガキ、赤色塗彩 胴部ハケミ	
3	甕	(23.5)	—	(5.2)	ヘラミガキ	ヘラミガキ	
4	甕	18.0	—	(8.5)	ヘラミガキ、赤色塗彩 頸部佛指丁字文	口辺部ヘラミガキ、赤色塗彩 胴部ナデ	
5	甕	—	—	(6.5)	ヘラミガキ、頸部佛指丁字文	ナデ	
6	甕	13.2	6.4	17.7	佛指状文、頸部佛指状文	ヘラミガキ	
7	甕	18.7	—	(11.2)	口辺部佛指状文、 胴部佛指状文、頸部佛指状文	ヘラミガキ	
8	甕	(19.8)	—	(11.0)	口辺部佛指状文、 胴部佛指状文、頸部佛指状文	ヘラミガキ	
9	甕	—	7.2	(13.2)	佛指羽状文	ヘラミガキ	
10	甕	—	7.1	(13.9)	佛指状文	ヘラミガキ	
11	甕	—	7.1	(7.8)	ヘラミガキ	ヘラミガキ	
12	甕	—	8.7	(1.9)	ヘラミガキ	ヘラミガキ	
13	蓋	3.7	—	(2.1)	ヘラミガキ	ナデ	
14	高坏	15.7	—	(6.7)	ヘラミガキ、赤色塗彩	ヘラミガキ、赤色塗彩	
15	高坏	—	(8.7)	(5.8)	ヘラミガキ、赤色塗彩	頸部ヘラミガキ、赤色塗彩 胴部ナデ	
16	高坏	—	(9.0)	(4.9)	ヘラミガキ、赤色塗彩	ナデ、赤色塗彩付着	

の北西より検出され、径21cm、深さ10cmの円形の掘り方に竈の下半部(10)を埋設して構築される。

遺物は壺(1~5・17・18)、甕(6~12・19~25)、蓋(13)、高坏(14~16)を図示した。

壺は頸部に櫛摺T字文が施文されるが、単純口縁の1・4と受口口縁の2・3がある。また、2は口縁部に波状文が巡る。1・2・4は外面と口縁部内面に赤色塗彩が行われるが、3・5には行われていない。1の赤彩は被熱により口縁部外面にわずかに残っているのみである。

甕は口縁部から体部に櫛摺による波状文または羽状文が施文された後、頸部に櫛状文が巡らされる。口縁部と体部に波状文を施し、頸部に櫛状文を巡らす6の他に、口縁部に波状文、体部に羽状文を施した後頸部に櫛状文を巡らせる7・8がある。また、8は口縁部に波状文を巡らせた後、造状工具による沈線が加えられる。7・11は炉址1、10は炉址2に埋設されていたものである。蓋には13があり、ヘラミガキが施される。

高坏には14~16があるが、全体の器形が知れるものはない。いずれも脚部内面を除いて赤色塗彩が行われる。

#### H4号住居址(第29図、図版16・21)

本住居址は調査区西端部、Ⅶ-X-お-1グリッドに位置する。M2号溝址と重複し、南東部分を切られる。また、住居址中央部分と北西部分で覆土による破壊を受けている。南北6.8m、東西5.0mの隅丸長方形を呈し、床面積34㎡前後を測る。壁残高は南西隅で10cmを計測するが、東壁・北壁付近は床面まで削平を受けている。長軸方位はN-34°-Wを示す。周溝は南壁下中央を除いて全周する。

ピットは9基が検出され、P1~P4が主柱穴である。38cm~46cmの深さを有し、整然とした配置である。P5~P8は南壁下中央に位置し、この部分で周溝が途切れていることから出入り口に関する柱穴と考えられる。

炉址は主柱穴であるP1・P2間に位置し、径50cm、深さ8cmの円形に掘り窪めて設けられる。

遺物は甕(1・7~9)、鉢(2・3)、甌(4)、高坏(5)、壺(6)を図示した。

1は小型の甕で口縁部から体部に櫛摺波状文が巡るが、頸部の櫛状文は施文されていない。鉢2・3は内外面に赤色塗彩が行われる。4はヘラミガキ調整が施され、体部が直線的に開く単孔の甌である。5は赤色塗彩される高坏の坏部で口縁端部が屈曲して開き、口唇部に突起が加えられる。

#### H5号住居址(第30~32図、図版16・17・21)

本住居址は調査区中央南側、Ⅶ-W-き-3グリッドに位置する。他遺構との重複関係はない。南北8.14m、東西6.08mの隅丸長方形を呈し、床面積46.6㎡の大型の住居址である。壁残高は31cm~43cmを計測し、長軸方位はN-30°-Wを示す。周溝は全周する。覆土は自然堆積であり、床面は13~17層を埋め戻して構築される。

ピットは床面上から6基、南西隅から1基、北壁から3基の10基、掘り方から6基が検出されたが、北壁から検出されたP9・P10・P12については本址に伴うものかどうか不明である。P1~P4が主柱穴であり、31cm~50cmの深さを有し、南北4.7m、東西2.5mの整然とした配置である。また、P1~P4の内側掘り方より検出されたP11~P14は本址の建て替え以前の主柱穴である。掘り方の状態から住居址の拡張が想定される。P15・P16は南壁下中央の床下から検出され、出入り口に関する柱穴と考えられる。

炉址は主柱穴であるP1・P2間に位置し、51cm×41cm、深さ8cmの楕円形に掘り窪めた後、高坏の坏部(19)を埋設して設けられる。また掘り方P11・P12間より建て替え以前の炉址が検出された。46cm×41cmの円形の掘り方に扁平な礫を1個埋設しており、壺の底部(4)が出土した。

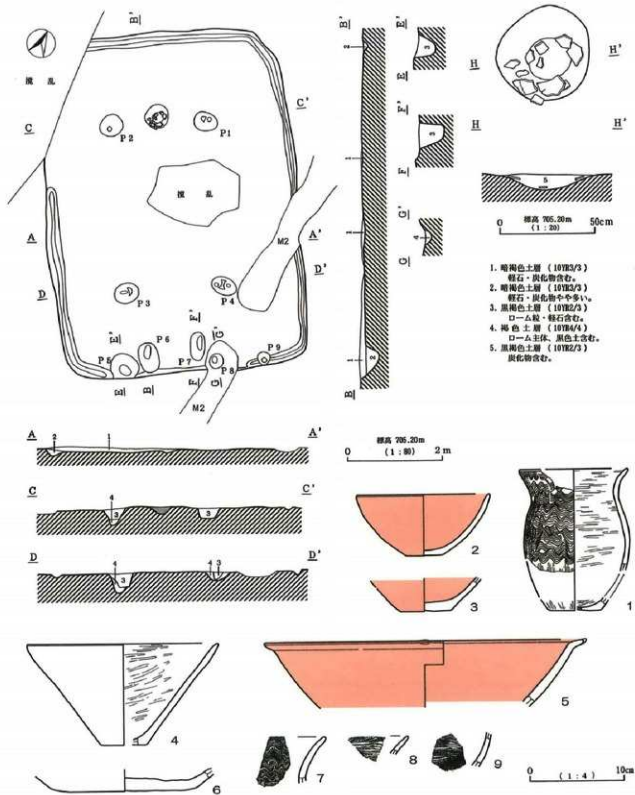
遺物は壺(1~4)、甕(5~14・26・27)、蓋(15)、高坏(16~22)、鉢(23~25)、石器(28~34)を図示した。壺には全体の器形が知れるものはないが、1・2は受口状の口縁部をもつ。無彩の1・2と赤彩される3・4があり、2は頸部に櫛状文が巡る。

甕には櫛摺による波状文が施文される5・7・8・26・27と羽状文の6がある。また、5・6には頸部の櫛状文が施文されない。台付甕は14の台部が1点出土しているのみである。15は無彩の蓋で内外面ヘラミガキ調整が施される。

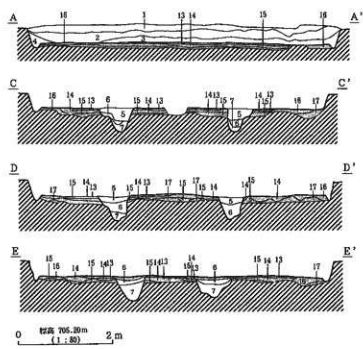
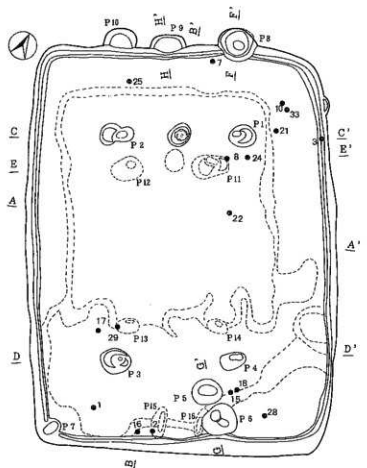
高坏は16~22の8点があるが、全てが脚部内面を除いて赤色塗彩が行われる。坏部の形態はいずれも口縁端部が屈曲して開くが、16・17・19は中位の縁が明瞭であるのに対し、18は曲線的で不明瞭である。脚部は「ハ」の字状に開く20・21と裾部で大きく開く22がある。

鉢には赤色塗彩される23と無彩の24・25がある。23・24には口縁端部に片口が起り出される。25は直線的な体部から口縁部が内彎するもので、24とともにヘラミガキ調整が施される。

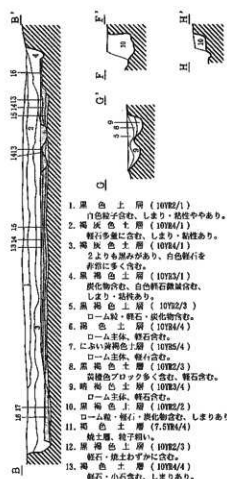
石器には28~33の礫石と34の台石があり、いずれも安山岩製である。



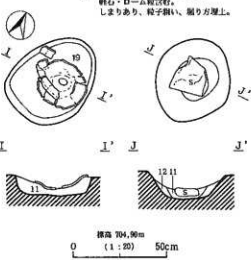
第29圖 H4号住居址



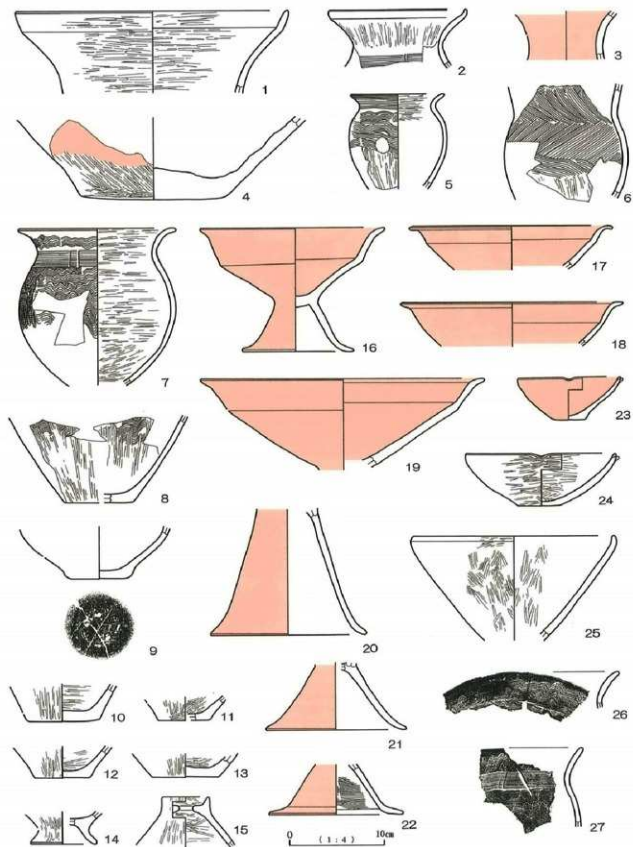
0 標高 706.20m (1:80) 2m



1. 黒色 上層 (10782/1)  
白色砂子を含む。しまり・粘性ややあり。
2. 褐灰色 土層 (10784/1)  
軽石多量に含む。しまり・粘性あり。
3. 褐灰色 土層 (10784/1)  
2よりも厚みがあり、白色軽石を表面に多く含む。
4. 黒褐色 土層 (10783/1)  
炭化物を含む。白色軽石微量を含む。しまり・粘性あり。
5. 黒褐色 上層 (10782/3)  
ローム粒・軽石・炭化物を含む。
6. 褐色 土層 (10784/4)  
ローム主体。軽石を含む。
7. におい黄褐色土層 (10785/4)  
ローム主体。軽石を含む。
8. 黒褐色 土層 (10782/3)  
黄褐色ブロック多く含む。軽石を含む。
9. 暗褐色 土層 (10783/4)  
ローム主体。軽石を含む。
10. 黒褐色 土層 (10782/2)  
ローム粒・軽石・炭化物を含む。しまりあり。
11. 褐色 土層 (7.5784/4)  
粘土質。軽石細い。
12. 黒褐色 土層 (10782/3)  
軽石・粘土お少に含む。
13. 褐色 土層 (10784/4)  
軽石・小石を含む。しまりあり。粘土やや硬い。張り方埋土。
14. 黒褐色 土層 (10782/2)  
軽石・ロームブロックを含む。しまりあり。粘土細い。張り方埋土。
15. 褐色 土層 (10784/6)  
ローム主体。軽石・黒色土を含む。張り方埋土。
16. におい黄褐色土層 (10784/3)  
軽石・ロームブロックを含む。しまりあり。粘土細い。張り方埋土。
17. 暗褐色 土層 (10783/4)  
軽石・ローム粒を含む。しまりあり。粘土細い。張り方埋土。



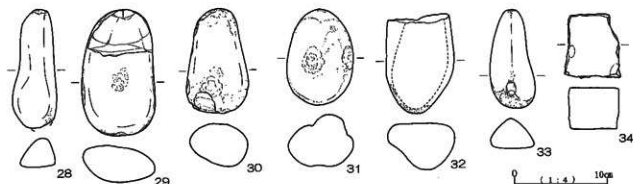
第30図 H5号住居址(1)



第31圖 H5号住居址(2)

第13表 H4号住居址出土遺物観察表

No	器種	法量			外形	成形・調整・文様		備考
		口径(実)	底径(備)	器高(厚)		外面	内面	
1	甌	10.7	(5.6)	(15.0)	縹褐色状文		ヘラミガキ	
2	鉢	(14.2)	(4.0)	6.5	ヘラミガキ、赤色塗彩		ヘラミガキ、赤色塗彩	
3	鉢	—	5.6	(3.3)	ヘラミガキ、赤色塗彩		ヘラミガキ、赤色塗彩	印
4	甌	(20.3)	(5.0)	10.7	ヘラミガキ		ヘラミガキ	
5	高坏	(34.0)	—	(7.0)	ヘラミガキ、赤色塗彩		ヘラミガキ、赤色塗彩	口唇部突起
6	甌	—	(15.4)	(1.7)	剥離		剥離	



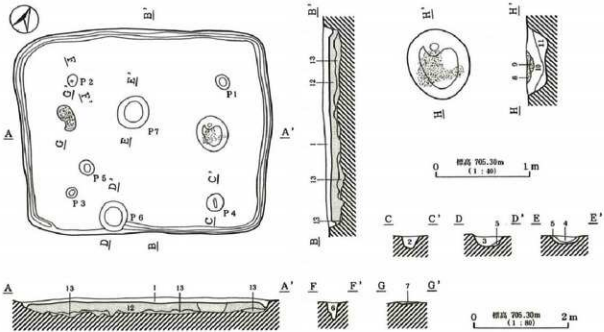
第32図 H5号住居址(3)

第14表 H5号住居址出土遺物観察表

No	器種	法量			外形	成形・調整・文様		備考
		口径(実)	底径(備)	器高(厚)		外面	内面	
1	甌	(29.0)	—	(8.7)	ヘラミガキ		ヘラミガキ	
2	甌	(14.4)	—	(5.9)	ヘラミガキ、顔部輪線状文		ヘラミガキ	
3	甌	—	—	(4.8)	ヘラミガキ、赤色塗彩		ヘラミガキ、赤色塗彩	
4	甌	—	15.6	(8.4)	ヘラミガキ、赤色塗彩		剥離	
5	甌	(10.0)	—	(10.0)	縹褐色状文		ヘラミガキ	
6	甌	—	—	(12.0)	縹褐色状文		ヘラミガキ	
7	甌	(16.7)	—	(16.6)	縹褐色状文、顔部輪線状文		ヘラミガキ	
8	甌	—	(7.8)	(9.0)	縹褐色状文		ヘラミガキ	
9	甌	—	7.1	(5.2)	剥離、面模木遺痕		剥離	
10	甌	—	7.8	(3.7)	ヘラミガキ		ヘラミガキ	
11	甌	—	5.6	(2.2)	ヘラミガキ		ヘラミガキ	
12	甌	—	(5.8)	(3.2)	ヘラミガキ		ヘラミガキ	
13	甌	—	(7.0)	(2.5)	ヘラミガキ		ヘラミガキ	
14	台付甌	—	7.1	(3.4)	ヘラミガキ		ヘラミガキ、台座ナド	
15	甌	(5.0)	—	(5.1)	ヘラミガキ		ヘラミガキ	
16	高坏	19.6	11.9	13.1	ヘラミガキ、赤色塗彩		坏部ヘラミガキ、赤色塗彩 胴部ナド、赤色顔料付着	
17	高坏	(21.6)	—	(4.6)	ヘラミガキ、赤色塗彩		ヘラミガキ、赤色塗彩	
18	高坏	(23.6)	—	(4.6)	ヘラミガキ、赤色塗彩		ヘラミガキ、赤色塗彩	
19	高坏	(30.2)	—	(9.6)	ヘラミガキ、赤色塗彩		ヘラミガキ、赤色塗彩	
20	高坏	—	(16.6)	(13.3)	ヘラミガキ、赤色塗彩		ナド、赤色顔料付着	
21	高坏	—	(14.9)	(7.1)	ヘラミガキ、赤色塗彩		坏部ヘラミガキ、赤色塗彩 胴部ナド、赤色顔料付着	
22	高坏	—	(14.1)	(5.3)	ヘラミガキ、赤色塗彩		ハケム、ナド、赤色顔料付着	
23	鉢	11.1	3.4	4.5	ヘラミガキ、赤色塗彩		ヘラミガキ、赤色塗彩	
24	鉢	16.0	4.5	5.5	ヘラミガキ		ヘラミガキ	
25	鉢	(21.9)	—	(11.0)	ヘラミガキ		ハケム、ヘラミガキ	
28	礫石	12.5	4.8	3.2				250 g
29	礫石	13.3	7.8	3.9				550 g
30	礫石	11.0	6.6	4.7				460 g
31	礫石	10.0	7.1	5.6				520 g
32	礫石	10.4	7.2	5.6				520 g
33	礫石	10.4	4.9	3.2				200 g
34	方石	6.8	6.0	4.4				370 g

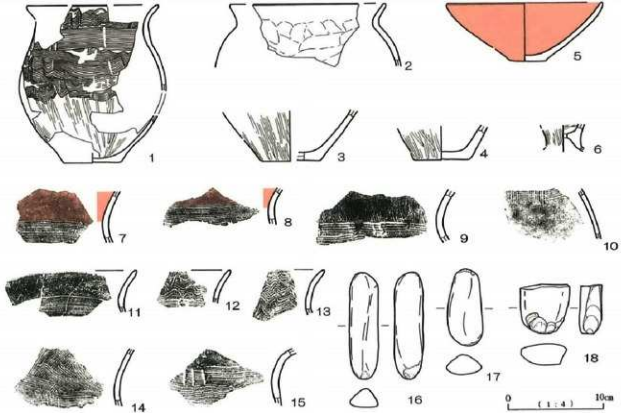
## H6号住居址(第33図、図版17・22)

本住居址は調査区南側、Ⅵ-W-14-4グリッドに位置し、他遺構との重複関係はない。南北3.88m、東西4.92mの東西に長い隅丸長方形を呈し、壁残高2~10cm、床面積18.9㎡を計測する。長軸方位はN-75°-Eを示す。周溝は南壁西側で一部断絶するもののほぼ全周する。覆土は黒色土の単層で、床面は12・13層を埋め戻して構築される。



1. 黒色土層 (10YR2/1) 炭化物多量に含む。ローム粒・白色砂子含む。しまりやゆあり、粘性あり。
2. 黒褐色土層 (10YR2/3) ローム粒・軽石含む。
3. 黒褐色土層 (10YR2/3) ローム粒・軽石・炭化物含む。
4. 黒褐色土層 (10YR2/2) ローム粒・軽石・炭化物含む。
5. 黒褐色土層 (10YR2/2) ローム粒・軽石・炭化物含む。
6. 黒褐色土層 (10YR2/2) ローム粒・軽石含む。

7. 黄褐色土層 (10YR5/6) 焼土層、暗褐色土含む。
8. 褐色土層 (7.5YR4/4) 焼土層、炭化物・黒色土含む。
9. 暗褐色土層 (7.5YR5/6) 焼土層、炭含む。
10. 暗褐色土層 (10YR3/3) 軽石・焼土含む。
11. 黒褐色土層 (10YR3/2) 軽石・焼土含む。
12. 黒褐色土層 (10YR2/2) 軽石多く含む。ローム粒含む。盛り方理上。
13. 褐色土層 (10YR4/4) ローム主体。軽石多く含む。しまりあり。盛り方理上。



第33図 H6号住居址

ピットは7基が検出された。P1～P4が主柱穴と考えられ、13cm～36cmの深さを有する。

炉址は住居址東側、P1・P4間より検出された。37cm×33cm、深さ10cmの床炉である。また、西側床面上より53cm×30cmの範囲で焼土の分布がみられた。

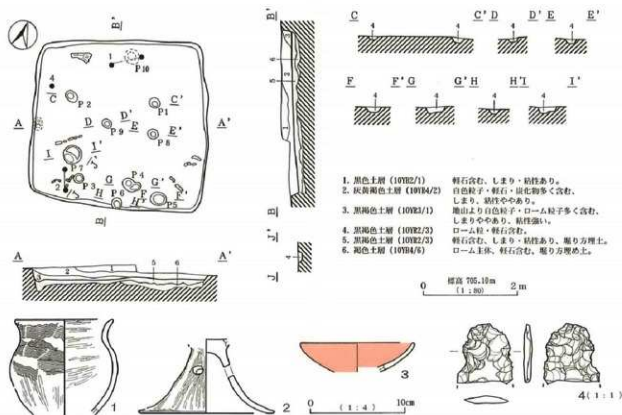
遺物は甕（1～4・11～15）、鉢（5）、器台（6）、壺（7～10）の他、石器（16～18）を图示した。

甕には体部に櫛溝波状文の施文される1・11～13・15と羽状文の14があるが、無文の2が1点出土している。鉢（5）は内外面に赤色塗彩が行われる。6は器台としたが判然としな。壺はいずれも小片であり器形の知れるものはないが、頸部文様には櫛溝による横線文または蕪状文の7～9とT字文の10がある。

16～18は敲石で安山岩製である。

第15表 H6号住居址出土遺物観察表

No	器種	法 量			成形・調整・文様	内 面	備 考
		口径(長)	底径(幅)	器高(厚)			
1	甕	(14.0)	(6.0)	(16.6)	櫛溝波状文、頸部蕪状文	ヘラミガキ	
2	甕	(16.4)	—	(6.6)	ナデ	ナデ	
3	甕	—	6.4	(5.2)	ヘラミガキ	ヘラミガキ	
4	甕	—	6.0	(3.4)	ヘラミガキ	ヘラミガキ	
5	鉢	(16.6)	3.7	6.2	ヘラミガキ、赤色塗彩、摩滅	ヘラミガキ、赤色塗彩、調整	
6	器台	—	—	(2.5)	ヘラミガキ	器受部ヘラミガキ、脚部ナデ	
16	敲石	11.3	3.0	2.3			105.8g
17	敲石	8.0	3.8	2.2			96.9g
18	敲石	5.2	5.2	2.4			103.9g

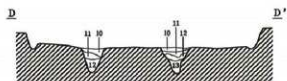
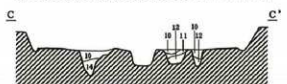
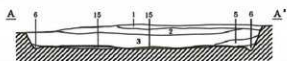
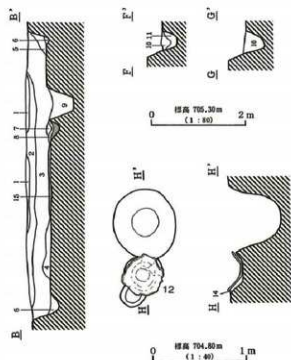
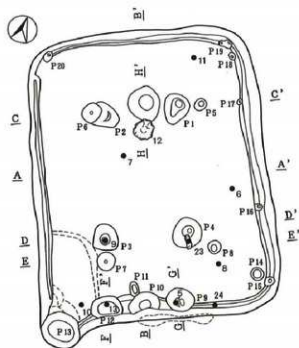


第34図 H7号住居址

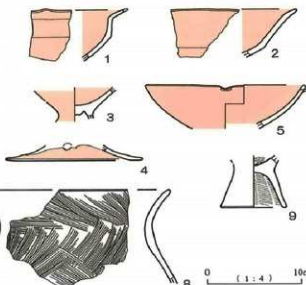
第16表 H7号住居址出土遺物観察表

No	器種	法 量			成形・調整・文様	内 面	備 考
		口径(長)	底径(幅)	器高(厚)			
1	甕	10.4	—	(10.1)	櫛溝波状文	ヘラミガキ	
2	高坏	—	(14.4)	(7.8)	ヘラミガキ	ナデ	穿孔4
3	鉢	(12.0)	—	(3.1)	ヘラミガキ、赤色塗彩	ヘラミガキ、赤色塗彩	
4	打製石皿	1.6	1.5	0.2			0.5g





- |                       |                       |
|-----------------------|-----------------------|
| 1. 暗褐色土層 (10YR3/3)    | 粘性あり、腐作土の底。           |
| 2. 黒褐色土層 (10YR2/2)    | ローム粒・軽石・炭化物含む。        |
| 3. 黒褐色土層 (10YR2/2)    | ローム粒・軽石・炭化物含む。        |
| 4. 黒褐色土層 (10YR2/2)    | ローム粒・軽石・炭化物多く含む。      |
| 5. 暗褐色土層 (10YR3/3)    | ローム粒・軽石・炭化物含む。        |
| 6. 黒褐色土層 (10YR2/3)    | ローム粒・軽石含む、しまりなし。      |
| 7. におい鈍褐色土層 (10YR4/3) | ローム粒・軽石含む。            |
| 8. 暗褐色土層 (10YR3/3)    | ローム粒・軽石含む。炭化物多く含む。    |
| 9. 暗褐色土層 (10YR3/3)    | ローム粒・軽石・炭化物含む。        |
| 10. 黒褐色土層 (10YR2/3)   | 軽石・炭化物含む、しまりなし。       |
| 11. 褐色土層 (10YR4/4)    | ローム主体、軽石多く含む、しまりなし。   |
| 12. 暗褐色土層 (10YR3/4)   | ローム・軽石多く含む、しまりなし。     |
| 13. 黒褐色土層 (10YR5/6)   | ローム主体、軽石多く含む、しまりなし。   |
| 14. 黒褐色土層 (10YR2/3)   | 軽石・炭化物・焼土含む、軽子や中粒あり。  |
| 15. 黒褐色土層 (10YR2/2)   | ローム粒・軽石・炭化物含む、細り方堆め土。 |



第35図 H 8号住居址 (1)

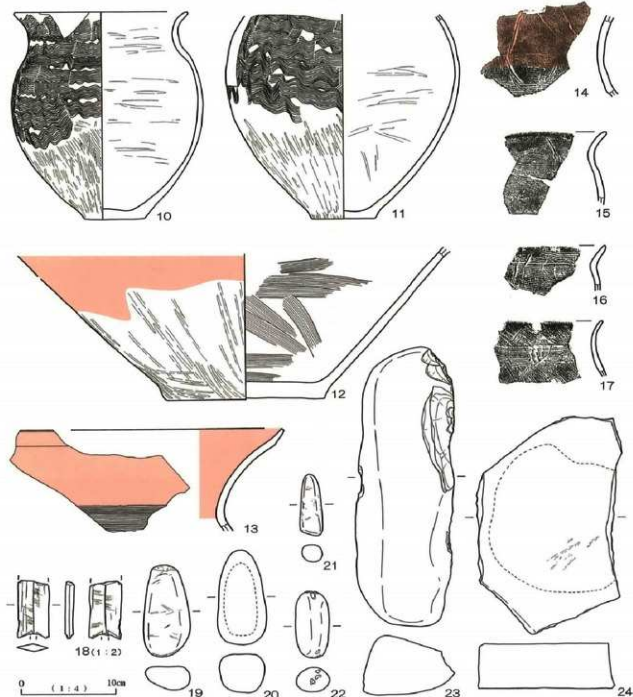
H7号住居址 (第34図、図版17・22)

本住居址は調査区南側、Ⅳ-W-カー5グリッドに位置する。他遺構との重複関係はない。南北3.40m、東西3.55mの東西にやや長い隅丸方形を呈し、壁残高7~26cm、床面積11.6㎡の小型の住居址である。長軸方位はN-80°-Wを示す。周溝は検出されなかった。覆土は自然堆積で、床面は5・6層を埋め炭して構築される。また、床面上に炭化材の分布がみられる。

ピットは床面上から9基、掘り方から2基が検出されたが、その性格は不明である。炉址は検出されなかった。

遺物は甕 (1)、高坏 (2)、鉢 (3)、石鏃 (4) を図示した。

1は小型の甕で、口縁部から体部上半に櫛波状文が施すが、頭部の塵状文は施文されない。2は無彩の高坏脚部



第36図 H8号住居址 (2)

で、ヘラミガキ調整が施され、4箇所に穿孔される。3は内外面に赤彩される鉢である。

石鏝は黒曜石製の打製石鏝(4)が1点出土している。

#### H 8号住居址(第35・36図、図版18・19・22・23)

本住居址は調査区南側、Ⅷ-X-a-4グリッドに位置し、H 9号住居址を切る。南北5.40m、東西4.32mの隅丸長方形を呈し、壁残高29~44cm、床面積23.1㎡を測る。長軸方位はN-19°-Wを示す。周溝は北西隅で一部断絶するものほは全周する。覆土は自然堆積であり、床面は15層を薄く埋め戻して構築される。

ピットは総数で20基が検出された。このうちP 1~P 4が主柱穴であり、整然と配置される。また、これに隣接してP 5~P 8が検出されていることから柱の建て替えが想定される。住居址の拡張あるいは縮小の痕跡は認められないことから上層だけが建て替えられたものと推測される。南壁下中央のP 9・P 10は出入り口に関する柱穴と考えられ、壁下に配されるP 14~P 20は補助的な柱穴と思われる。

炉址は主柱穴であるP 1・P 2間より検出された。径40cm、深さ12cmの円形の掘り方に壺の底部(12)を埋設して設けられる。また、これの北側に隣接して75cm×68cm、深さ57cmの円形の落ち込みが確認された。

遺物は高坏(1~4)、鉢(5)、甕(6~11・15~17)、甃(12・13・14)、銅鏝(18)の他、石器(19~24)を調査した。

高坏には全体の器形が知れるものはないが、坏部中に明瞭な稜を有し端部が大きく開く(1・2)。赤彩は内外面に行われる。4は脚裾部の破片で、外面に赤彩され円形の透かし孔を有する。5は内外面ともに赤彩され端部に片口が造り出される鉢である。

甕には無文の6・7と櫛指羽状文または斜走文の施文される8・17、波状文の施文される10・11・15・16がある。6・7は器高10.8cm・11.5cmの小型品でヘラミガキ調整が施されるが、外面にハケメ調整が残る。また、施文されるもののうち15~17は頸部に簾状文が巡るのに対し、8・10は簾状文が施文されない。台付甕は9が1点出土しており、内面にハケメ調整される。

壺は炉址内に埋設されていた底部(12)と受口状の口縁で頸部に櫛指の横線文が巡る13がある。

18の銅鏝は先端部と蓋部が欠損しており、残存部の長さ3cm・幅1.7cm・厚さ0.3cmを計測する。石器には19~23の敲石と24の台石がある。

第17表 H 8号住居址出土遺物観察表

No	器 種	法 量		成 形 ・ 調 整 ・ 文 様		備 考	
		口縁(長)底径(幅)	器高(厚)	外 面	内 面		
1	高坏	—	—	<5.3>	ヘラミガキ、赤色塗彩	13頸部突起	
2	高坏	—	—	<5.1>	ヘラミガキ、赤色塗彩	ヘラミガキ、赤色塗彩	
3	高坏	—	—	<3.2>	ヘラミガキ、赤色塗彩	坏部ヘラミガキ、赤色塗彩 脚部ナデ	
4	高坏	—	(14.6)	(1.6)	ヘラミガキ、赤色塗彩	ナデ、赤色顔料付着	穿孔あり
5	鉢	(17.1)	—	(4.6)	ヘラミガキ、赤色塗彩	ヘラミガキ、赤色塗彩	
6	甕	7.4	5.6	10.8	ヘラミガキ	ヘラミガキ、ナデ	
7	甕	11.4	4.5	11.5	ハケメ、ヘラミガキ	ヘラミガキ	
8	甕	(20.0)	—	(9.9)	櫛指羽状文	ヘラミガキ	
9	台付甕	—	7.1	(5.0)	ナデ	体部ヘラミガキ、台部ハケメ	
10	甕	18.4	6.4	21.9	波状成状文	ヘラミガキ	
11	甕	—	6.8	(21.4)	波状成状文	ヘラミガキ	
12	甕	—	16.9	(15.5)	ヘラミガキ、赤色塗彩	ハケメ、刷漆	
13	壺	—	—	(10.7)	ヘラミガキ、赤色塗彩	ヘラミガキ、赤色塗彩	
18	銅鏝	<3.0>	1.7	0.4	頭部櫛指横線文		
19	敲石	9.7	5.0	2.7	先端部・蓋部欠損		6.7g
20	敲石	10.0	5.2	4.3			230g
21	敲石	6.5	2.5	2.0			266g
22	敲石	7.0	3.5	2.5			43.7g
23	敲石	29.4	10.5	6.3			98.4g
24	台石	22.9	15.5	4.8			2,870g
							3,200g

#### H 9号住居址(第37図、図版18・19・23)

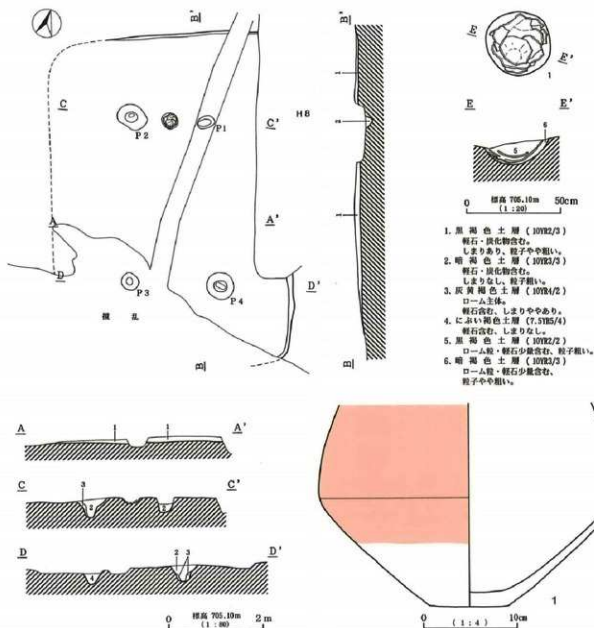
本住居址は調査区南側、Ⅷ-X-i-5グリッドに位置し、東壁部分をH 8号住居址に切られる。また、南壁部分及び床面を乱石による破壊を受け、西側は削平を受け残存しない。南北7m、東西5m前後の隅丸長方形を呈し、壁残高は残存部で4~9cmと浅い。周溝は検出されなかった。

ピットは主柱穴である4基が検出された。P2・P4は各々28cm・37cmの深さを有するが、P1・P3は擾乱により上面を破壊されており、残存部で19cm・24cmを計測する。

炉址は主柱穴であるP1・P2間より検出された。径35cm、深さ14cmの円形の掘り方に壺(1)を埋設して設けられる。出土状況から破壊した土器を炉址内に敷き詰めたものと推測される。

遺物は壺(1)が1点図示できたのみである。

1は胴部中位に稜を有し、底部を除いて赤色塗彩が行われる。



第37図 H9号住居址

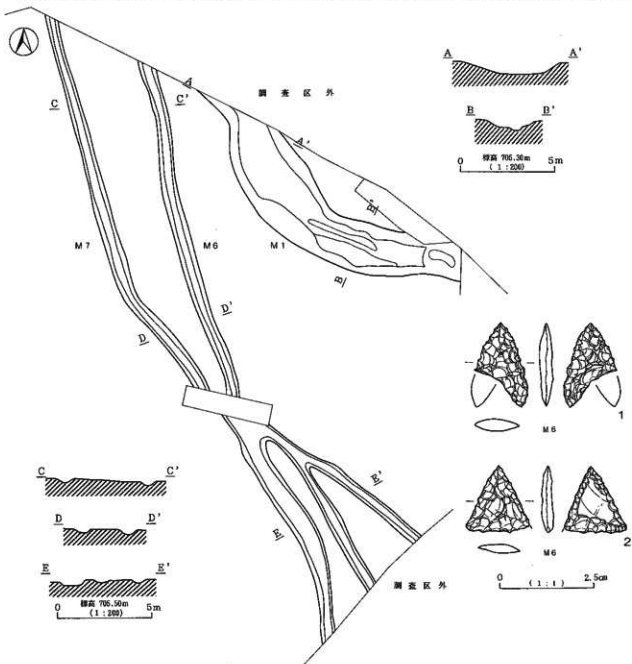
第18表 H9号住居址出土遺物観察表

No	器種	法 器		成 形 ・ 調 整 ・ 支 撐		備 考	
		口径(長)	底径(幅)	器高(厚)	外 面		内 面
1	壺	—	8.4	(21.3)	ヘラミガキ、赤色塗彩	ナデ	加

## 第2節 溝 址

M1・6・7号溝址 (第38図、図版19・23)

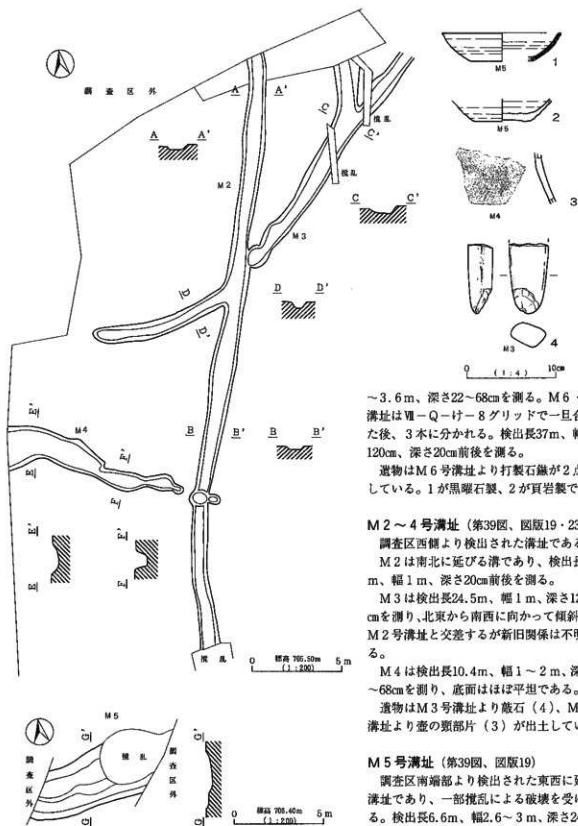
調査区北東部より検出された溝址であり、北西から南東に向かって傾斜する。M1号溝址は検出長19.7m、幅2.4



第38図 M1・6・7号溝址

第19表 M3・5・6号溝址出土遺物観察表

No	器 種	法 量			成 形・調 査・文 様		備 考
		口径(長)	底径(幅)	高さ(厚)	外 面	内 面	
1	打製石鏃	2.2	1.5	0.4			M6、0.7g
2	打製石鏃	1.8	1.7	0.3			M6、0.7g
1	須恵砂 坏	(13.4)	(6.8)	3.2	ロクロナデ	ロクロナデ	M5
2	土師砂 坏	—	6.4	(2.3)	ロクロナデ、底部網状点切り	ロクロナデ	M5
4	燧石	7.7	4.4	2.8			M3、119g



～3.6m、深さ22～68cmを測る。M6・7号溝址はⅧ-Q-1ヶ-8グリッドで一旦合流した後、3本に分かれる。検出長37m、幅60～120cm、深さ20cm前後を測る。

遺物はM6号溝址より打製石鏃が2点出土している。1が黒曜石製、2が頁岩製である。

**M2～4号溝址 (第39図、図版19・23)**

調査区西側より検出された溝址である。

M2は南北に延びる溝であり、検出長33.6m、幅1m、深さ20cm前後を測る。

M3は検出長24.5m、幅1m、深さ12～53cmを測り、北東から南西に向かって傾斜する。M2号溝址と交差するが新旧関係は不明である。

M4は検出長10.4m、幅1～2m、深さ36～68cmを測り、底面はほぼ平坦である。

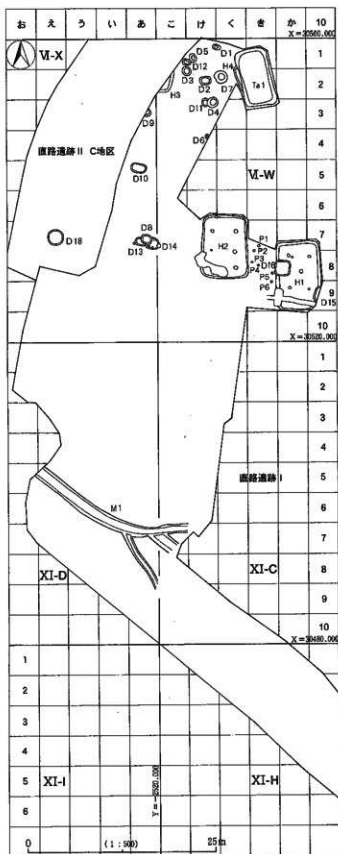
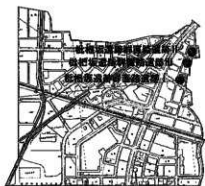
遺物はM3号溝址より敷石(4)、M4号溝址より壺の頸部片(3)が出土している。

**M5号溝址 (第39図、図版19)**

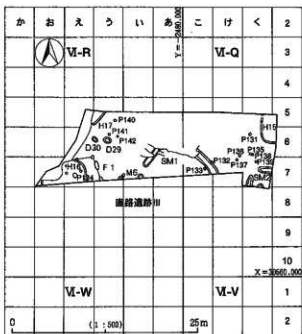
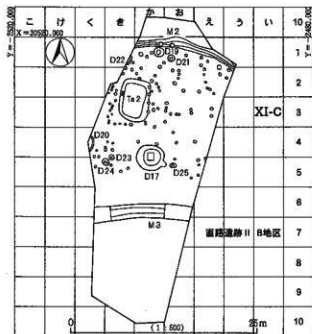
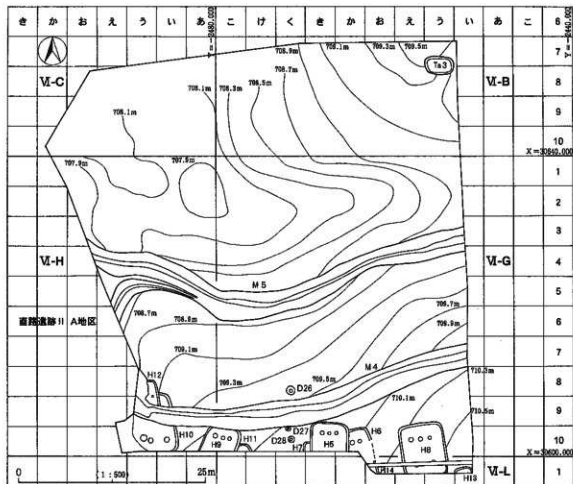
調査区南端部より検出された東西に延びる溝址であり、一部攪乱による破壊を受けている。検出長6.6m、幅2.6～3m、深さ24～41cmを測る。

遺物は須恵器杯(1)と土師器杯(2)がある。2は底部に回転糸切り痕が残る。

第39図 M2～5号溝址



第40図 批板遺跡群直路遺跡Ⅰ全体図



第41図 枇杷坂遺跡群直路遺跡Ⅱ・Ⅲ全体図

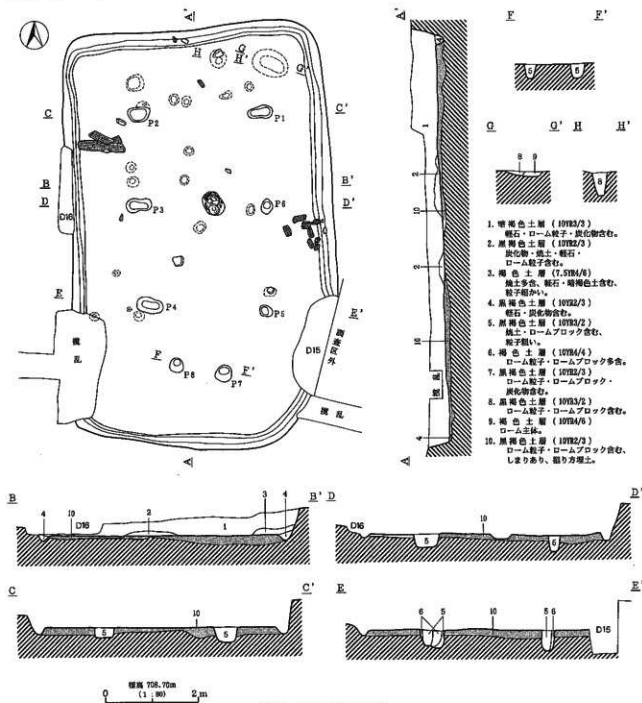


## 第VI章 枇杷坂遺跡群直路遺跡 I・II・III

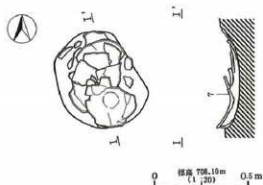
## 第1節 竪穴住居址

H1号住居址 (第42~50図、図版24~26・44~48)

本住居址は直路遺跡I調査区東端部、VI-W-か-8グリッドに位置し、東壁南側をD15号土坑、西壁中央をD16号土坑に切られる。また、南側は一部掘削による破壊を受けている。南北8.16m、東西5.04mの隅丸長方形を呈し、



第42図 H1号住居址(1)

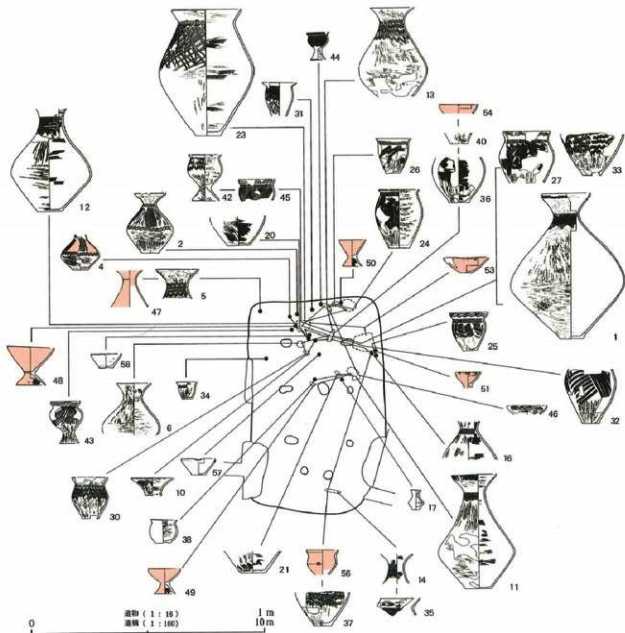


第43図 H1号住居址(2)

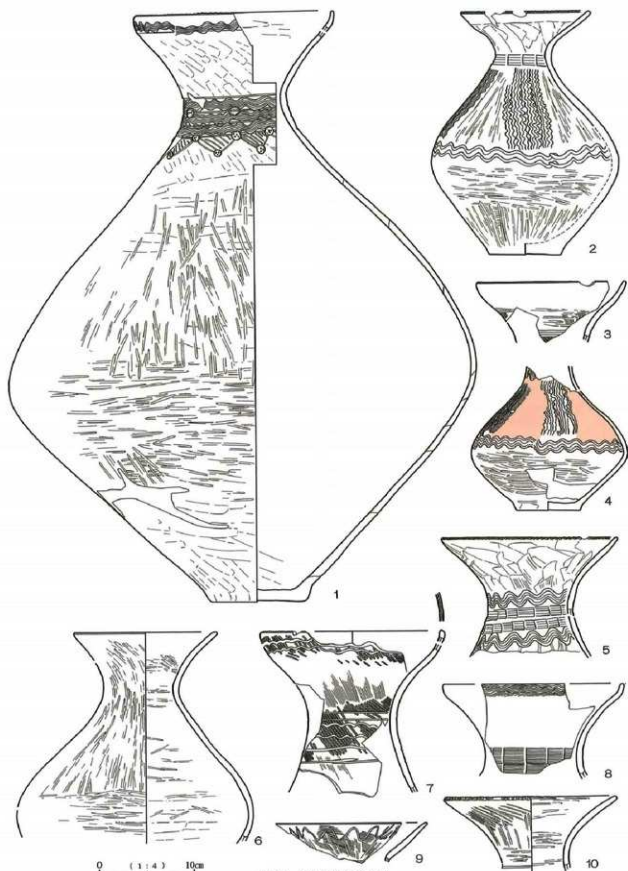
床面積41.1m<sup>2</sup>を測る。壁残高は西壁で13cm~28cmを計測し、長軸方位はN-1°-Eとはほぼ真北を示す。周溝は一部D15号土坑・擾乱によって破壊されているもの全周するものと考えられる。覆土は自然堆積であり、1層暗褐色土層が主体を占める。床面は10層を埋め戻して構築される。

ピットは床面上から8基が検出され、このうちP1~P6の6基が支柱穴を構成する。南北4.3m、東西2.7mの長方形に配され、20~30cmの深さを有する。P7・P8は南壁より約1.4m内側の床面上より検出され出入口に関する柱穴と考えられる。

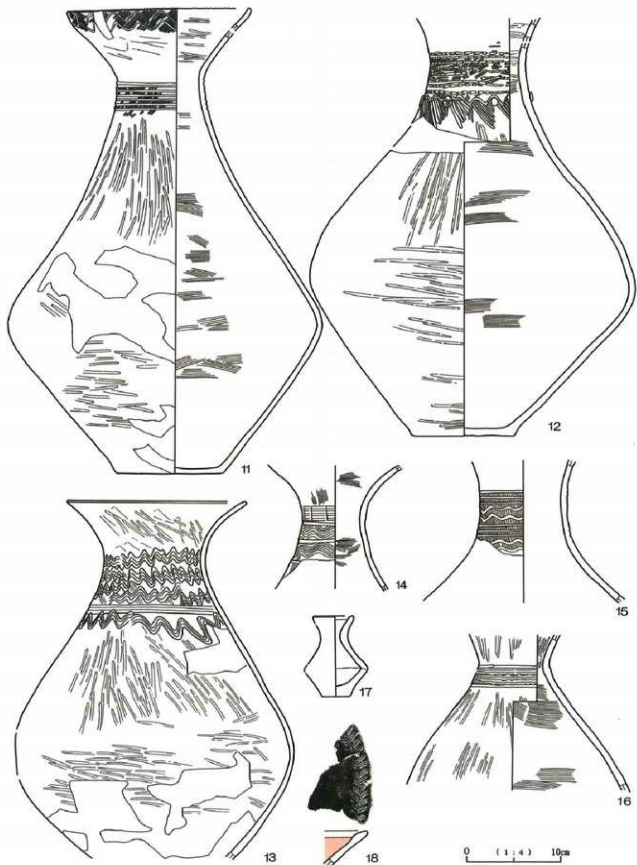
炉址は住居址のはほぼ中央、P3・P6間に位置し、52cm×42cm、深さ10cmの楕円形の掘り方に壺の底部(22)を埋設して設けられる。



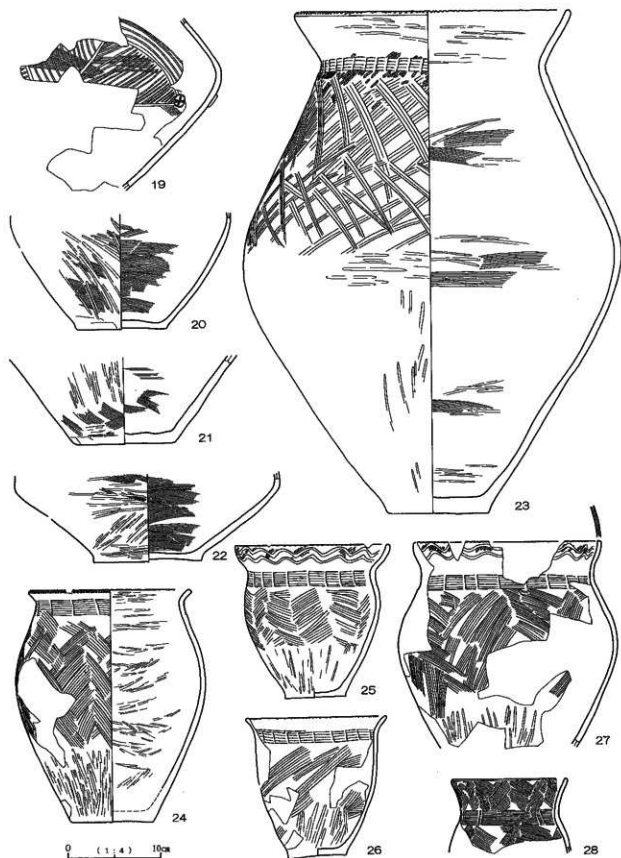
第44図 H1号住居址(3)



第45圖 H1号住居址(4)



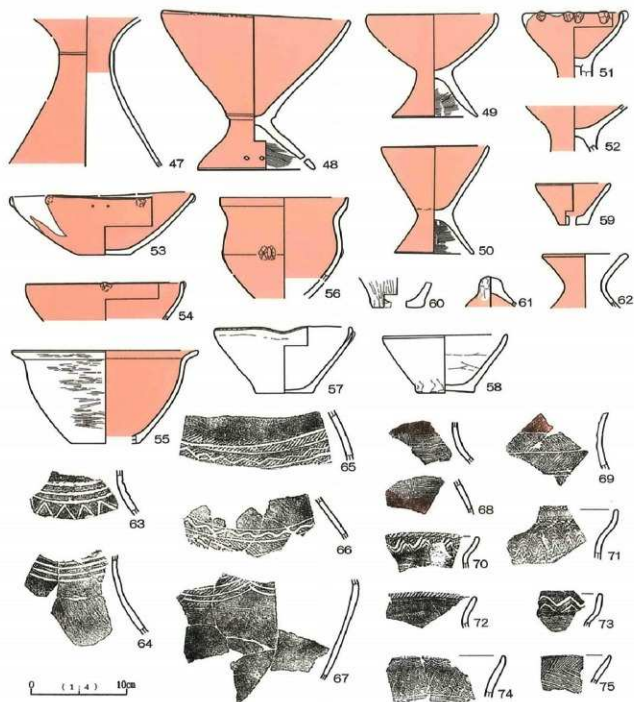
第46图 H1号住居址(5)



第47图 Ⅱ1号住居址(6)



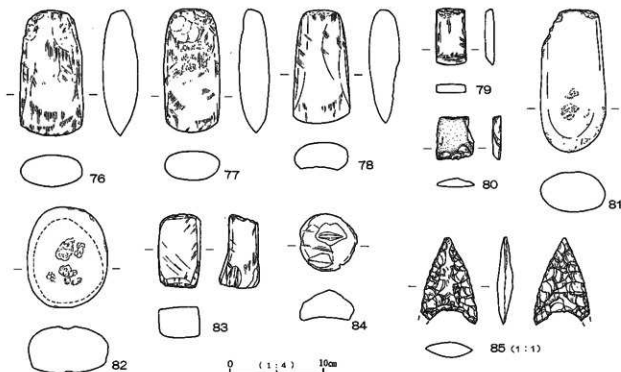
第48图 H1号住居址(7)



第49図 H1号住居址(8)

遺物は土器・石器が多量に出土しており、壺(1・23・46・47・62~69)、甕(24~37・39~45・70~75)、高坏(48~52)、鉢(38・53~58)、甕(59・60)、蓋(61)、石器(76~85)を図示した。遺物の分布状況については第44図に示したように、住居址北半部特に北壁下と炉址の周辺から集中して出土している。

壺には単純口縁のものと同受口状のものがある。受口状の1・8は口縁部に柳描波状文が、7・11・46は縄文が施された後竃描による波状文が二条巡る。頸部文様には竃描横線文・鋸歯文、柳描波状文の1、縄文を施した後竃描による刺突文・波状文・斜交文が巡る12、柳描籬状文の2・8、波状文+籬状文または横線文の5・13の他、縄文+竃描横線文・波状文、竃描横線文+柳描籬状文・波状文など多様である。また、1・12には円形貼付文が加えられる。2・4は胴部最大径部分に竃描または柳描による波状文が巡り、上半部に柳描波状文が垂下される。頸部文様は2が



第50図 H1号住居址(9)

第20表 H1号住居址出土遺物観察表(1)

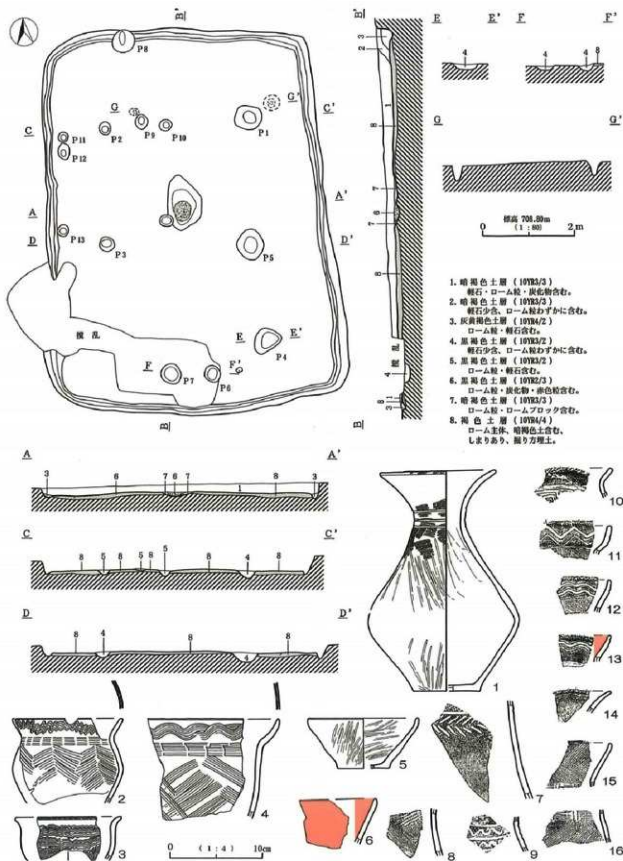
No	器種	法 量			形 態 ・ 測 量 ・ 文 様		備 考
		口径(長)	底径(幅)	器高(厚)	外 面	内 面	
1	甕	(21.2)	10.2	62.1	口唇部縄文・口縁部磨漆状文 胴部磨漆状文・細網文・磨漆状文	ハラミガキ、ナデ	
2	甕	13.9	7.7	25.7	口唇部縄文・胴部磨漆状文・ 磨漆垂下文・磨漆状文	ハラミガキ	
3	甕	(16.0)	—	<6.4	口唇部縄文・胴部磨漆状文・縄文	ハラミガキ	
4	甕	—	6.8	<15.1	ハラミガキ、赤色塗彩 磨漆状文・細網垂下文		
5	甕	18.8	—	<12.5	口唇部縄文・ 胴部磨漆状文・磨漆状文	ハラミガキ	
6	甕	(15.2)	—	<22.0	ハラミガキ	ハラミガキ	
7	甕	(19.5)	—	<17.0	口唇部縄文・口縁部縄文・磨漆状文 胴部縄文・磨漆状文・磨漆状文	ハラミガキ	
8	甕	(19.2)	—	<9.6	口唇部磨漆状文・胴部磨漆状文	ハラミガキ	
9	甕	—	—	—	—	—	
10	甕	18.5	—	<7.5	口唇部縄文・胴部磨漆状文	ハラミガキ	
11	甕	(19.6)	11.4	49.0	口唇部縄文・口縁部縄文・磨漆状文 胴部縄文・磨漆状文	ハラミガキ、ハケメ	
12	甕	—	11.1	<44.0	胴部縄文・磨漆状文・波状文・斜走文 円形貼付文	ハラミガキ、ハケメ	
13	甕	19.0	—	<37.8	胴部磨漆状文・磨漆状文	ハケメ、ハラミガキ	
14	甕	—	—	<12.7	磨漆状文・波状文・磨漆状文	ハラミガキ	
15	甕	—	—	<14.6	磨漆状文・波状文	ハラミガキ、道徳	
16	甕	—	—	<16.4	磨漆状文・磨漆状文	ハラミガキ、ハケメ	
17	甕	(4.4)	2.9	8.5	ナデ	ナデ	
18	甕	—	—	<3.7	ハラミガキ、赤色塗彩 口縁部磨漆状文	ハラミガキ、赤色塗彩 口縁部磨漆状文	
19	甕	—	—	<18.5	磨漆状文・磨漆文・円形貼付文	ハケメ、割離	
20	甕	—	9.9	<12.3	ハケメ、ハラミガキ	ハケメ	
21	甕	—	(11.0)	(9.3)	ハラミガキ	ナデ、割離	
22	甕	—	11.8	(9.4)	ハラミガキ	ハケメ	甕
23	甕	30.0	11.0	51.2	口唇部磨漆文・胴部縄文・磨漆状文 胴部磨漆状文	ハラミガキ	
24	甕	(7.7)	(8.8)	25.0	口唇部縄文・胴部磨漆状文・ 磨漆状文	ハラミガキ	



簾状文、4が波状文である。赤彩は4・18・47にみられるのみであり、18は口縁部内面に髹指羽状文が施文される。罫の口縁部形態には短く外反する単純口縁のもの、内彎して受口状となるもの、端部がわずかに受口気味に立ち上るものがあり、28を除いて口唇部に縄文または刻目が施される。単純口縁の24・26・31は頸部に髹指簾状文が走り、胴部に髹指羽状文・斜走文・波状文が施文される。小型の34は頸部に髹指波状文が一条巡るのみである。口縁部が内彎して受口状となるものには、胴部に髹指による羽状文を施文し、口縁部に縄文を施した後発縮による波状文を二条巡らす25・27と髹指波状文を巡らせる29、胴部上半に波状文を施し口縁部は無文とする30がある。いずれも口唇

第21表 H1号住居址出土遺物観察表(2)

No	器種	法 量			成 形 ・ 装 飾 ・ 文 様		備 考
		口縁(長)	底径(幅)	器高(厚)	外 面	内 面	
25	甕	16.8	6.6	16.4	口唇部縄文、口縁部縄文・亀背波状文 胴部髹指簾状文、胴部髹指羽状文	ヘラミガキ	
26	甕	(15.2)	0.1	15.2	口唇部斜走文、胴部髹指簾状文 胴部髹指羽状文	ヘラミガキ	
27	甕	(20.4)	-	<22.1>	口唇部縄文、口縁部縄文・亀背波状文 胴部髹指簾状文、胴部髹指羽状文	ヘラミガキ	
28	甕	(12.6)	-	<7.8>	髹指羽状文、胴部髹指簾状文	ヘラミガキ	
29	甕	(22.0)	-	<14.4>	口唇部縄文、口縁部縄文、髹指波状文 髹指羽状文	ヘラミガキ	伊
30	甕	15.6	7.2	17.7	口唇部縄文、胴部髹指簾状文、 髹指波状文	ヘラミガキ	
31	甕	(14.7)	-	<14.3>	口唇部縄文、胴部髹指簾状文、 髹指波状文	ヘラミガキ	
32	甕	-	7.5	<23.5>	髹指羽状文	ヘラミガキ	
33	甕	-	(8.3)	<17.7>	髹指波状文	ヘラミガキ	
34	甕	9.0	4.9	7.4	口唇部縄文、胴部髹指簾状文	ヘラミガキ	
35	甕	-	-	<7.2>	口唇部縄文、胴部髹指簾状文	ヘラミガキ	
36	甕	-	(9.0)	<19.5>	ハケメ、ヘラミガキ	ハケメ	
37	甕	-	7.6	<14.5>	髹指波状文	ヘラミガキ	
38	鉢	11.4	6.6	10.0	ナデ	ヘラミガキ、ナデ	
39	甕	-	5.1	<1.9>	ヘラミガキ	ヘラミガキ	
40	甕	-	7.8	<4.7>	ヘラミガキ	ヘラミガキ	
41	甕	-	4.1	<3.7>	ヘラミガキ	ヘラミガキ	
42	白付甕	14.2	11.9	19.7	口唇部縄文、髹指波状文	ヘラミガキ	
43	白付甕	(12.8)	8.2	17.9	口唇部髹指波状文、胴部髹指簾状文 体部鳥居山形文・斜走文	ヘラミガキ	
44	白付甕	(9.4)	6.6	11.7	口唇部縄文、口縁部髹指波状文、 胴部髹指簾状文、胴部連続コ字文	体部ヘラミガキ、白粉ナデ	
45	甕	(17.8)	-	<9.2>	口唇部縄文、口縁部髹指波状文、 胴部髹指簾状文、胴部髹指羽状文	ヘラミガキ	
46	甕	(17.4)	-	<3.8>	口唇部縄文、口縁部縄文・鳥居山形文	ヘラミガキ	
47	甕	-	-	<15.5>	ヘラミガキ、赤色塗彩	ヘラミガキ、赤色塗彩、ナデ、酒座	
48	高坏	20.2	12.6	16.3	ヘラミガキ、赤色塗彩 胴部ハケメ	坏部ヘラミガキ、赤色塗彩 胴部ハケメ	坏部穿孔2孔一対
49	高坏	(14.1)	9.2	10.9	ヘラミガキ、赤色塗彩 胴部ハケメ	坏部ヘラミガキ、赤色塗彩	
50	高坏	11.6	8.5	11.3	ヘラミガキ、赤色塗彩 胴部ハケメ、赤色顔料付着	坏部ヘラミガキ、赤色塗彩	
51	高坏	10.4	-	<6.8>	ヘラミガキ、赤色塗彩、口縁部突起	ヘラミガキ、赤色塗彩	
52	高坏	-	-	<4.4>	ヘラミガキ、赤色塗彩	ヘラミガキ、赤色塗彩	
53	鉢	19.6	5.9	6.3	ヘラミガキ、赤色塗彩	ヘラミガキ、赤色塗彩	
54	鉢	(16.7)	-	<3.9>	ヘラミガキ、赤色塗彩	ヘラミガキ、赤色塗彩	口唇部突起6、穿孔
55	鉢	(19.7)	(7.2)	9.9	ヘラミガキ	ヘラミガキ、赤色塗彩	口唇部突起
56	鉢	13.6	-	<10.6>	ヘラミガキ、赤色塗彩 胴部仁突起	ヘラミガキ、赤色塗彩	
57	鉢	14.7	6.0	7.0	ヘラミガキ、口唇部削目	ヘラミガキ	
58	鉢	13.3	6.3	6.0	ナデ	ナデ	
59	瓶	3.1	8.0	4.4	ヘラミガキ、赤色塗彩	ヘラミガキ、赤色塗彩	
60	瓶	-	5.4	<3.1>	ヘラミガキ	ヘラミガキ	
61	甕	-	-	<3.1>	ナデ、赤色塗彩	ヘラミガキ、赤色塗彩	
62	甕	(9.2)	-	<5.7>	ヘラミガキ、赤色塗彩	ナデ、ヘラミガキ、赤色顔料付着	
76	表裏石筭	13.2	6.7	3.8			566g
77	表裏石筭	13.0	5.9	3.3			455g
78	表裏石筭	12.0	6.1	3.2			372g
79	表裏石筭	6.0	3.2	0.9			41g
80	スクレイパー	4.5	4.1	0.9			23g
81	礫石	15.1	7.0	4.3			720g
82	礫石	10.6	8.6	5.0			650g
83	礫石	7.7	4.5	4.2			210g
84	石製品	6.0	6.1	3.1			35.6g
85	打製石礫	2.3	1.5	0.4			0.9g



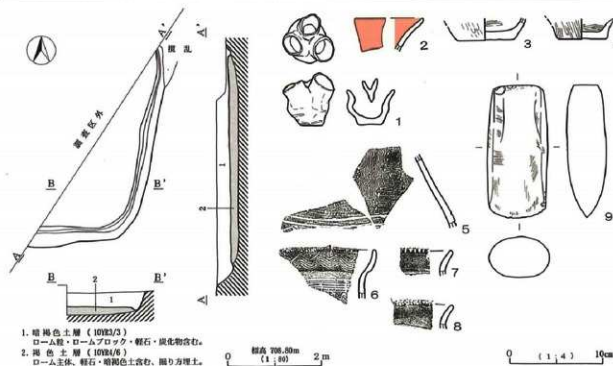
部に縄文が施され、頸部には縞状文が巡る。23・28は端部が受口状に立ち上がるものであり、23は胴部上半に褥描斜格子目文、28は口縁部から胴部に羽状文が施文される。頸部には縞状文が巡るが、23には口唇部に刻目、頸部に縄文が施される。台付甕には単純口縁で波状文の施文される42と受口状の口縁部に篋描または褥描による波状文、胴部に篋描の斜走文・コの字重ね文が施文される43~45がある。44・45は口唇部に縄文、口縁部・胴部に円形貼付文が加えられる。

高坏は胴部内面を除いて赤彩される。48は胴部に2孔一對の穿孔が行われ、51は口縁部に突起が付加される。鉢には体部が直線的に開く53・54・57・58、口縁部が短く外反する55の他、甕形の38・56があり、57には片口が造り出される。また、53・54は口縁部、56は体部中位に突起が付加される。甌は単孔で59は赤彩される。61は蓋で外面頂部を除いて内外面に赤彩される。

磨製石斧のうち76~78は太型蛤刃石斧であり、西壁下北側(76)・北壁下中央(77)・東壁下中央(78)より出土した。扁平片刃石斧である79はP2北側からの出土である。砥石(83)は四面が使用されている。打製石黒は黒曜石製の85が1点出土している。

第22表 H2号住居址出土遺物観察表

No	器種	法 量			底 形 ・ 調 整 ・ 文 様		備 考
		口径(長)	底径(幅)	器高(厚)	外 面	内 面	
1	甕	12.7	(7.4)	23.8	口唇部縄文、頸部縄文、胴部横縞文	ヘラミガキ、ナデ	
2	甕	(11.9)	-	(9.1)	口唇部縄文、口縁部篋描波状文、胴部篋描縞状文、胴部褥描羽状文	ヘラミガキ	
3	甕	(11.5)	-	(4.7)	口唇部縄文、胴部褥描波状文	ヘラミガキ	
4	甕	-	-	(10.7)	口唇部縄文、口縁部篋描波状文、胴部篋描縞状文	ヘラミガキ	
5	鉢	(12.0)	(5.7)	(5.4)	ヘラミガキ	ヘラミガキ	
6	鉢	-	-	(4.9)	ヘラミガキ、赤色塗彩	ヘラミガキ、赤色塗彩	



第22図 H3号住居址

第23表 H3号住居址出土遺物観察表

No	器種	法 量			底 形 ・ 調 整 ・ 文 様		備 考
		口径(長)	底径(幅)	器高(厚)	外 面	内 面	
1	ニシヤア上層	-	2.5	5.5	ナデ	ナデ	
2	甕	-	-	(3.5)	ヘラミガキ、赤色塗彩	ヘラミガキ、赤色塗彩	
3	甕	-	6.1	(2.1)	ヘラミガキ	ヘラミガキ	
4	甕	-	5.2	(2.1)	ヘラミガキ	ヘラミガキ	
9	磨製石斧	14.0	6.5	4.3			710g

H2号住居址 (第51図、図版26・48)

本住居址は直路遺跡Ⅰ調査区東側、VI-W-く-7グリッドに位置し、他遺構との重複関係はないものの、南西部分を掘乱による破壊を受けている。南北7.88m、東西5.60mの隅丸長方形を呈し、床面積42.8㎡を測る。壁残高は西壁で約20cmを計測するが、南壁付近は床面近くまで削平を受けている。長軸方位はN-1°-Eとほぼ真北を示す。周溝は全周する。覆土は自然堆積であり、1層暗褐色土層が主体を占める。床面は8層を埋め戻して構築される。

ピットは13基が検出された。このうちP1～P5が主柱穴であり、南西に位置する主柱穴は掘乱によって破壊されており残存しない。P6・P7は南壁下中央から検出され、出入り口に関する柱穴と考えられる。上面を掘乱により破壊されているが、床面からの深さは15cm前後である。

炉址は住居址のほぼ中央に構築されており、108cm×76cmの規模を有する地床炉である。

遺物は壺(1・7～9)、甕(2・4・10～16)、鉢(5・6)を図示した。

1は単純口縁の所謂細頸壺である。口唇部と頸部に縄文を施した後、頸部に竪溝による横線文が3条巡る。南壁直下東側からの出土である。甕には口縁部が外反する単純口縁のものと同型として受口状になるもの他に端部がわずかに受口気味に立ち上がる15がある。単純口縁の2は頸部に籐状文が巡り、口縁部に波状文、胴部に羽状文が施文される。受口状となる4・11～13は構構または竪溝による波状文が口縁部に巡る。

鉢には直線的に立ち上がる体部から端部がわずかに内彎する5・6があり、6は内外面に赤彩される。

H3号住居址 (第52図、図版27・48)

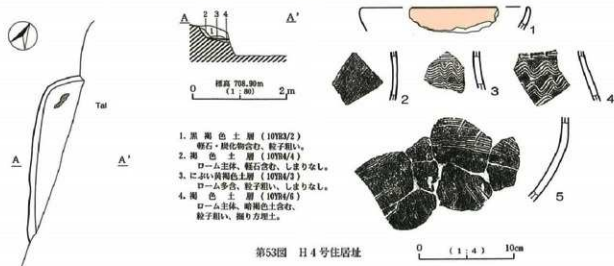
本住居址は直路遺跡Ⅰ調査区北側、VI-W-こ-2グリッドに位置する。大半が直路遺跡ⅡC地区に延びるが削平を受けたためか残存しない。したがって規模・形状等は不明である。壁残高は30cm内外を測る。調査部分の壁下からは幅10～15cmの周溝が確認された。覆土は1層からなり、床面は2層を埋め戻して構築される。ピット・炉址は調査範囲からは検出されなかった。

遺物はミニチュア土器(1)、壺(2・5)、甕(3・4・6～8)、石器(9)を図示した。

1は多口縁をもつミニチュア土器である。覆土層からの出土であり混入品であろうか。9は大型蛤刃の磨製石斧であり、調査部分北端部床面上から出土した。

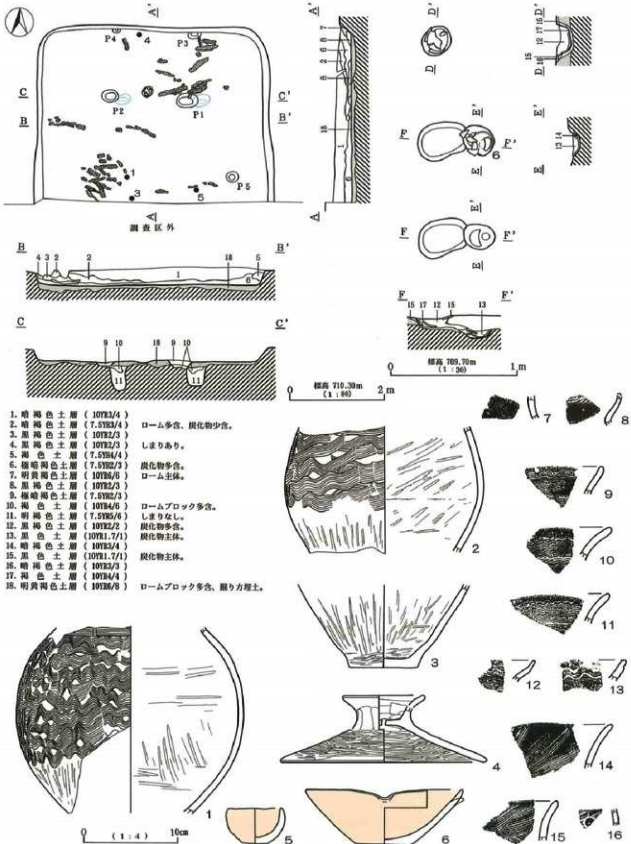
H4号住居址 (第53図、図版27)

本住居址は直路遺跡Ⅰ調査区北端部、VI-W-く-2グリッドに位置するが、大半をTa1号堅穴状遺構に切られており、西壁北側が検出されたのみであるため、規模・形状等は不明である。壁残高は25cmを測る。覆土は自然堆積と



第24表 H4号住居址出土遺物観察表

No	器種	法 量		成 形 ・ 調 整 ・ 文 様		備 考
		口径(長)	底径(幅) 器高(厚)	外 面	内 面	
1	鉢	(18, 1)	— (2, 4)	ヘタミガキ, 赤色赤彩	ヘタミガキ, 赤色赤彩	



第54図 H5号住居址

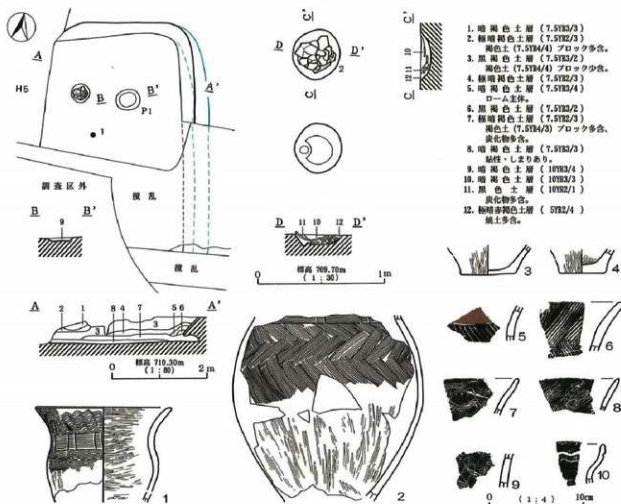
考えられ、床面は4層を埋め戻して構築される。残存する範囲からはピット・炉址は検出されなかったが、北側床面上に炭化材が認められた。

遺物は鉢(1)、甕(2~5)を図示した。

1は端部でわずかに内側し内外面に赤彩される。鉢としたが高坏とも考えられる。甕の文様は櫛描によるもので斜走文と波状文がある。

第25表 H5号住居址出土遺物観察表

No	器種	法 量			成 形 ・ 調 整 ・ 文 様		備 考
		口径(長)	底径(幅)	器高(厚)	外 面	内 面	
1	甕	—	—	<19.6>	櫛描波状文、頭部櫛描條状文	ヘラミガキ	
2	甕	—	—	<13.3>	櫛描波状文	ヘラミガキ	伊
3	甕	—	7.2	<8.7>	ヘラミガキ	ヘラミガキ	
4	甕	(8.8)	(21.8)	7.1	ヘラミガキ、ナゲ	ヘラミガキ	
5	ミニチュア土器	5.8	2.7	3.8	ヘラミガキ、赤色塗彩	ヘラミガキ、赤色塗彩	
6	鉢	16.6	6.0	5.8	ヘラミガキ、赤色塗彩	ヘラミガキ、赤色塗彩	伊



第55図 H6号住居址

第26表 H6号住居址出土遺物観察表

No	器種	法 量			成 形 ・ 調 整 ・ 文 様		備 考
		口径(長)	底径(幅)	器高(厚)	外 面	内 面	
1	甕	14.4	—	<10.0>	櫛描波状文、頭部櫛描條状文	ヘラミガキ	
2	甕	—	—	<19.5>	櫛描波状文、頭部櫛描條状文	ヘラミガキ	伊
3	甕	—	5.8	<2.8>	ヘラミガキ	ヘラミガキ、磨減	
4	甕	—	4.8	<2.4>	ヘラミガキ	ヘラミガキ	

## H5号住居址 (第54図、図版31・32・48)

本住居址は直路遺跡Ⅱ、A地区南端部、VI-G-き-10グリッドに位置し、H6・7号住居址を切る。南半部は調査区外のため未調査である。東西4.7m、壁残高は東壁で31~40cm、西壁で10~27cmを測る。周溝は検出されなかった。覆土は自然堆積であり、床面は18層を埋め戻して構築される。本址は焼失住居であり床面上には炭化材が散在し、炭化物を多量に含む6層が床面を覆っている。

ピットは5基が検出され、P1・P2が主柱穴である。P1・P2が床面下約10cmで西へズレていることから、本址で地盤のズレが生じていることが確認された。北壁下から検出されたP3・P4は7cm・9cmと浅く補助的な柱穴と考えられる。

炉址は主柱穴であるP1・P2間より検出されたが、同様に上部が西へズレている。床面上で径24cmの規模を有し、鉢(6)と甕の胴部(2)を埋設して設けられる。

遺物は甕(1~3・8~16)、蓋(4)、ミニチュア土器(5)、鉢(6)、壺(7)を図示した。

甕は胴部が張り球形を呈するもので、柳描籠状文・波状文が施文される。蓋(4)は体部が直線状に開き、把手部は頂部に凹みもち中央は穿孔される。5は鉢型のミニチュア土器、6は片口が造り出される鉢であり、ともに内外面に赤色塗彩される。

## H6号住居址 (第55図、図版32・48)

本住居址は直路遺跡Ⅱ、A地区南端部、VI-G-か-10グリッドに位置し、H5号住居址に切られる。また、攪乱による破壊を受けており、北東隅付近が検出されたのみであるため規模・形状等は不明である。壁残高は36~50cmを測るが、本址も地盤のズレによる影響を受けており東壁が床面上約10cmの高さで西へ40cm程移動している。周溝は検出されなかった。覆土は自然堆積である。

ピットは北東に配される主柱穴が1基検出された。径50cm×44cmの規模を有する。

炉址は北側主柱穴間に位置すると考えられ、径80cm、深さ15cmの円形の掘り方に甕(2)を埋設して設けられる。土器の出土状況から破壊した土器片を敷き詰めたものと推測される。

遺物は甕(1~4・6~10)、壺(5)を図示した。

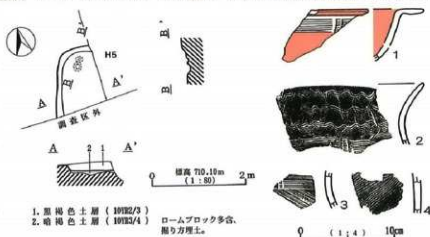
甕には頸部に柳描による籠状文が廻り、口縁部から胴部に波状文が施文される1と羽状文が施文される2がある。5は甕の頸部片で柳描による横線文・斜走文がみられ外面に赤彩される。

## H7号住居址 (第56図、図版32)

本住居址は直路遺跡Ⅱ、A地区南端部、VI-G-き-10グリッドに位置し、H5号住居址に切られる。また、大半が調査区外であり北西隅部分がわずかに検出されたのみであるため規模・形状等は不明である。壁残高は8~14cmを測る。周溝は検出されなかった。覆土は1層のみで、床面は2層を埋め戻して構築される。調査範囲の床面上からはピット・炉址は検出されず、掘り方からピット2基が検出された。

遺物は高坏(1)、甕(2~4)を図示した。

1は口縁部が罌状に屈曲する高坏の坏部で上部に籠状文が廻り赤彩される。甕には柳描波状文の2と斜走文の3・4がある。

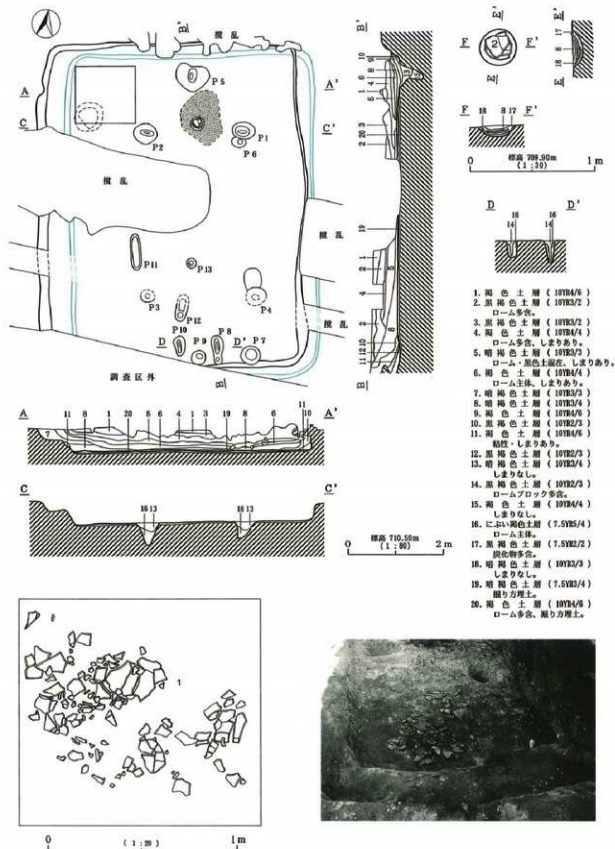


第56図 H7号住居址

第27表 H7号住居址出土遺物観察表

No	器種	法量		成形・調査・文様		備考
		口径(長)	底径(幅) 器高(厚)	外面	内面	
1	高坏	-	-	(5, 4)	ヘラミガキ、赤色塗彩、柳描籠状文	ヘラミガキ、赤色塗彩





第57図 H8号住居址(1)



## H 8号住居址 (第57・58図、図版33・48・49)

本住居址は直路遺跡Ⅱ、A地区南東部、VI-G-う-10グリッドに位置する。擾乱による破壊を受けており南壁西半部は調査区外のため未調査である。南北8.6m、東西5.6mの隅丸長方形を呈し、床面積は46㎡内外を測る。壁残高は40cm前後を測るが、本址も地盤のズレによる影響を受けており、床面上約24cmの高さで壁体が西へ60cm・北へ30cm程移動している。周溝は検出されなかった。覆土は自然堆積で、床面は19・20層を薄く埋め戻して構築される。



第58図 H 8号住居址 (2)

第28表 H 8号住居址出土遺物観察表

No	器種	法 量		成 形 ・ 測 整 ・ 文 様		備 考	
		口径(長)	底径(幅)	壁厚(厚)	外 面		内 面
1	皿	32.4	—	<47.3>	ヘラミガキ、赤色塗彩 頭部彫線模文・斜文	口縁部ヘラミガキ、赤色塗彩 胴部	
2	壺	(22.0)	—	<27.7>	櫛目状文、頭部彫線模文	ヘラミガキ	印
3	鉢	(11.7)	—	<4.0>	ヘラミガキ、赤色塗彩	ヘラミガキ、赤色塗彩	
4	高坏	—	7.7	<5.5>	ヘラミガキ、赤色塗彩	字ア	
5	土製円盤	3.5	—	0.6	ヘラミガキ、赤色塗彩	ハケメ	重量0.9g

ピットは床面上から13基が検出された。このうちP1～P4が土柱穴であり、南北3.5m、2.2mの長方形に配され、P1が36cm・P2が50cmの深さを有する。北壁下中央から検出されたP5は56cmの深さを有し棟持柱であろう。P8～P10・P12は南壁下中央から検出され出入口に関する柱穴と考えられる。深さはP8が47cm、P10が34cmを測る。炉址は主柱穴であるP1・P2間に位置し、径28cm、深さ8cmの円形の掘り方に甕(2)を埋設して設けられる。土器の出土状況から破損した土器片を炉底に敷設したものと推測される。また、炉址周辺の床面上には薄い炭の分布が認められた。

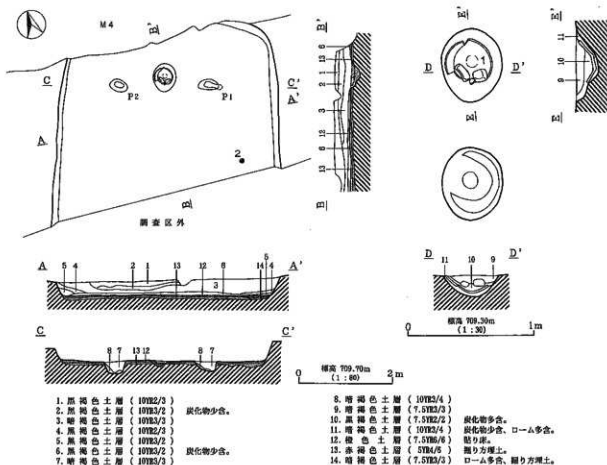
遺物は壺(1・6・7)、甕(2・8～14)、鉢(3)、高坏(4)、土製円盤(5)を図示した。

- 1の壺は第57図で示したように住居址北西隅の床面上から破砕した状態で出土した。頸部は鉛描平行沈線4条によって区画された間に斜走文が綾杉状に充填される。外面と口縁部内面に赤色塗彩が行われる。
- 2は炉址内に埋設された甕で、口縁部から胴上半部にかけて鞠指による羽状文が施文された後頸部に縷状文が廻る。
- 3は内外面ともに赤彩された鉢である。4は高坏の脚部で外面に赤色塗彩が施される。
- 5は壺の胴部片を利用した土製円盤で赤彩され裏面にハケメ調整が残る。

### H9号住居址 (第59・60図、図版34・49)

本住居址は直路遺跡Ⅱ、A地区南端部西側、VI-G-10グリッドに位置し、H11号住居址を切る。北壁部分にM4号溝址による破壊を受け、南半部は調査区外に延びており未調査であるため、東西4.5mが計測できたのみである。壁残高は24～48cmを測る。周溝は検出されなかった。覆土は自然堆積で、床面は13・14層を埋め戻した後12層を用いて貼り床としており、炭化物を含む6層が床面全体を覆く覆っている。

ピットは主柱穴であるP1・P2が検出された。P1は43cm×20cm、P2は38cm×26cmの楕円形を呈し、深さは各々20cm・30cmを計測する。



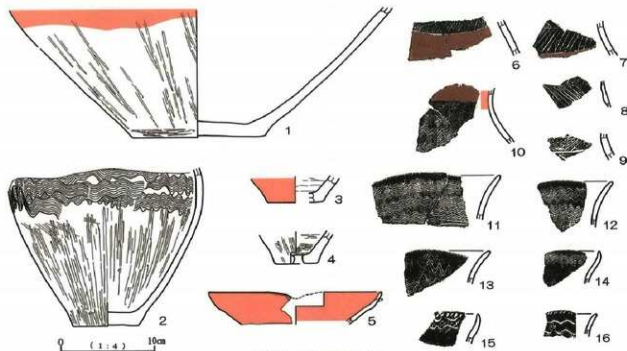
第59図 H9号住居址(1)

炉址はP1・P2間より検出された。径57cm×47cm、深さ16cmの掘り方に壺の底部(1)を埋設し、南側に竈を2個置いて設けられる。

遺物は壺(1・3・6~10)、甕(2・11~16)、甌(4)、鉢(5)を図示した。

1は炉址内に埋設されていた壺の底部である。外面は底部付近を除いて赤彩され、内面は剥離が著しい。3は外面に赤彩される小型の壺である。頸部文様には豎描の平行沈線で区画された間に斜走文が充填される6~9と緋描波状文が走る10がある。

2は胴上半部に緋描波状文が施文される甕で、調査範囲の南東部床面上から出土した。4は単孔の甌でヘラミガキ調整が行われる。5は内外面に赤彩される鉢で片口が造り出される。



第60図 H9号住居址(2)

第29表 H9号住居址出土物観察表

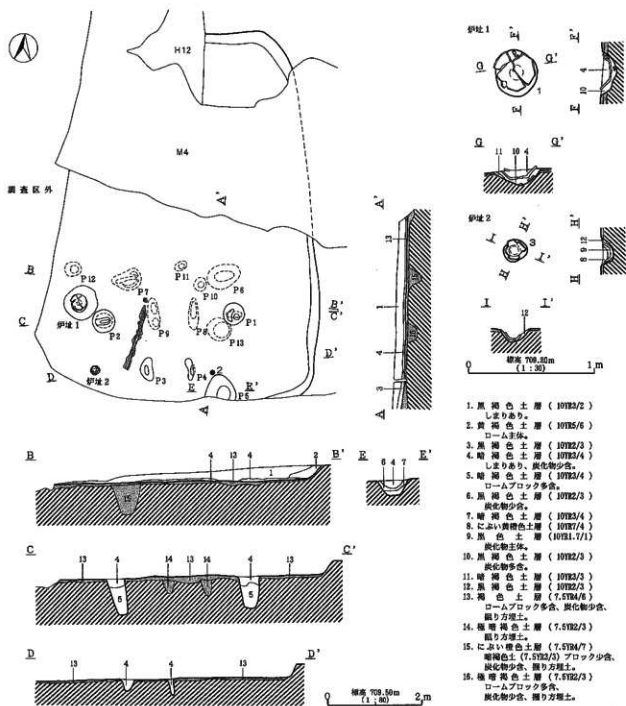
No	部 種	法 量			成 形 ・ 調 整 ・ 文 様		備 考
		口径(長)	底径(幅)	器高(厚)	外 面	内 面	
1	壺	—	14.2	(13.4)	赤色塗彩、ヘラミガキ	剥離	
2	甕	—	7.0	(16.5)	緋描波状文	ヘラミガキ	
3	壺	—	(6.0)	(2.5)	ヘラミガキ、赤色塗彩	ナデ	
4	甌	—	(4.6)	(3.1)	ヘラミガキ	ヘラミガキ	
5	鉢	(18.4)	—	(3.4)	ヘラミガキ、赤色塗彩	ヘラミガキ、赤色塗彩	

#### H10号住居址(第61・62図、図版35・49)

本住居址は直路遺跡Ⅱ、A地区南西端部、VI-H-い-9グリッドに位置し、北側をH12号住居址・M4号溝址に切られる。また、西側及び南側は調査区外であり削平されている。北東隅と南半部が検出されたのみであるため規模は不明であるが、南北7.6m、5.6m前後の隅丸長方形を呈するものと推定される。壁残高は残存する北壁で8~12cm、東壁南側で21~30cmを測る。調査範囲内では周溝は検出されなかった。覆土は自然堆積で、炭化物を含む4層が床面を薄く覆っている。床面は13層を埋め戻して構築される。

ピットは床面上から5基、掘り方から8基が検出された。このうちP1・P2が南側に配される主柱穴であり、北側の主柱穴はM4号溝址によって破壊されており残存しない。P1・P2は62cm・74cmの深さを有する。P3・P4は南壁下中央に位置するもので出入り口に関する柱穴と考えられる。深さはP3が36cm、P4が28cmを計測する。また、P1・P2の北側掘り方から検出されたP6・P7は本址の建て替え以前の主柱穴であり、P8・P9は出入り口施設の柱穴であろう。したがって、本址では住居址の拡張が行われたものと考えられる。

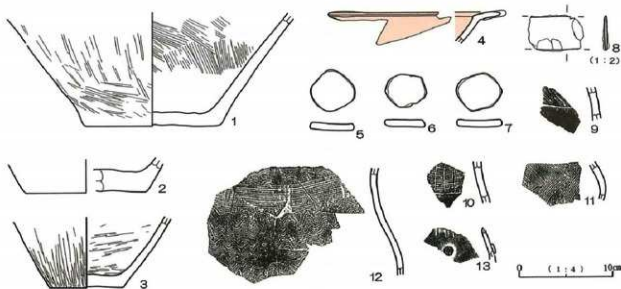
炉址はP2の西側に隣接して炉址1が、P2から南へ80cm離れて炉址2が検出された。炉址1は壺の底部(1)を埋設して構築され72cm×66cmの規模を有する。炉址2は甕の底部(3)を埋設して設けられ38cm×32cmを計測する。



第61図 H10号住居址(1)

第30表 H10号住居址出土遺物観察表

No	器種	法 量		成 形 ・ 調 整 ・ 文 様		備 考
		口徑(長)	底径(幅) 器高(厚)	外 面	内 面	
1	甕	—	14.5 (11.3)	ヘラミガキ	ハケメ	貯1
2	甕	—	12.8 (3.0)	漆滅	漆滅	
3	甕	—	7.8 (7.2)	ヘラミガキ	ヘラミガキ	貯2
4	高坪	—	(3.4)	ヘラミガキ、赤色塗彩	ヘラミガキ、赤色塗彩	口唇部変形
5	土製内蓋	4.7	0.7	ヘラミガキ、漆滅	ハケメ、漆滅	資料部片、17.2g
6	土製内蓋	4.4	0.8	ヘラミガキ、漆滅	ハケメ、漆滅	資料部片、16.8g
7	土製内蓋	4.9	0.7	ヘラミガキ、漆滅	ハケメ、漆滅	資料部片、13.9g
8	鉄製高	3.0	1.8 0.2	鋸?		2.8g



第62図 H10号住居址(2)

遺物は壺(1・2・9・10)、甕(3・11~13)、高坏(4)、土製円盤(5~7)、鉄製品(8)を図示した。

1は炉址1内に埋設されていた壺の底部で内面にハケメ調整が残る。甕には炉址2内に埋設されていた底部(3)の他に櫛描羽状文の11、波状文の12・13があり13には円形貼り付け文が付加される。4は高坏の坏部片であり、口縁部が鐮状に開いて突起が貼り付けされ内外面に赤彩される。

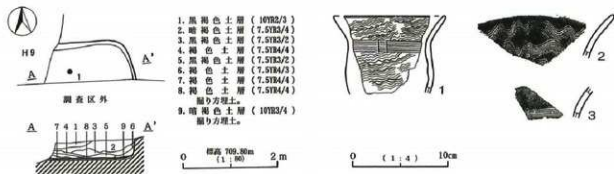
5~7は壺の胴部片を利用した土製円盤である。鉄製品には鎌と思われる8があり、幅1.8cm、残存長3cmを測る。

## H11号住居址(第63図、図版36)

本住居址は直路遺跡Ⅱ、A地区南端部、VI-G-ニー10グリッドに位置し、西側をH9号住居址に切られる。また、南側大半は調査区外であり未調査であることから、北東隅付近のわずかな範囲を調査したにすぎないため規模・形状等は不明である。壁残高は調査範囲内で33~42cmを測り、層溝は検出されなかった。覆土は7層からなり人為埋土であろうか。床面は8・9層を薄く埋め戻して構築される。調査範囲内からはピット・炉址は検出されなかった。

遺物は甕(1~3)を図示した。

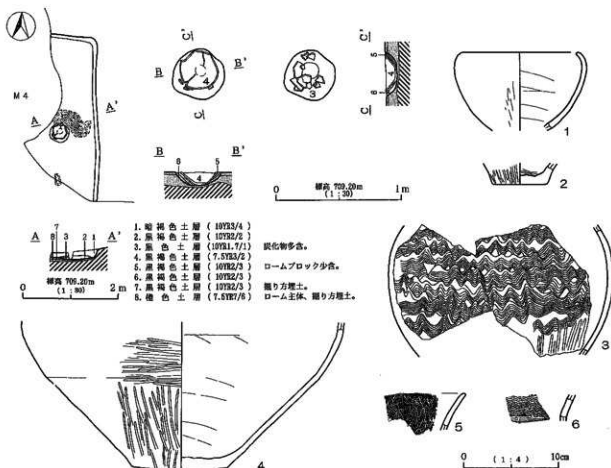
1は調査範囲内西側の床面上から出土した甕で、口縁部から胴部にかけて櫛描波状文が施文された後頸部に簾状文が巡る。2・3は同一個体であり1と同様な文様構成である。



第63図 H11号住居址

第31表 H11号住居址出土遺物観察表

No	器種	法 登	成 形 ・ 調 整 ・ 文 様		備 考
			外 面	内 面	
1	甕	口径(尺) 底径(幅) 器高(厚) 〔11.8〕 — (8.2)	櫛描波状文、頭部櫛描波状文	ヘアミガキ	



第64図 H12号住居址

第32表 H12号住居址出土遺物観察表

No.	器種	計量			成形・調整・文様		備考
		口径(長)	底径(幅)	器高(厚)	外面	内面	
1	鉢	(12.4)	—	(8.2)	ヘラミガキ、調整	ナデ	
2	壺	—	(5.8)	(2.3)	ヘラミガキ	ヘラミガキ	
3	壺	—	—	(13.7)	櫛波状文	ヘラミガキ	伊
4	壺	—	(10.1)	(16.5)	ヘラミガキ	ナデ、櫛波	伊

H12号住居址 (第64図、図版36・49)

本住居址は直路遺跡Ⅱ、A地区南西端部、VI-H-う-8グリッドに位置しH10号住居址を切る。M4号溝址に大半を切られており、北壁及び東壁の一部がわずかに残存しているのみであるため規模・形状等は不明である。壁残高は残存部で8~18cmを測り、周溝は検出されなかった。床面は7・8層を埋め戻して構築される。

ピットは検出されなかった。

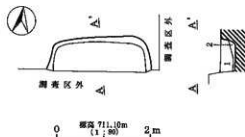
炉址は、残存部南側から検出された。径40cm、深さ10cmの円形の掘り方の底面に堯の胴部片(3)を敷設し、さらに壺の底部(4)を埋設して設けられる。また、炉址北側の床面上には薄い炭の分布が認められた。

遺物は鉢(1)、壺(2・3・5・6)、壺(4)を図示した。

1は口縁部が内彎する鉢で、ヘラミガキ調整され無彩である。

壺には炉址底面に敷設されていた3の胴部片がある。球形を呈し櫛波状文が施文される。

4は炉址内に埋設され炉体として使用されていた壺の底部であり、外面にはヘラミガキ調整が施されるが内面は剥離が著しい状態である。



1. 暗褐色土層 (10YR3/3)  
 2. 黒褐色土層 (10YR2/2)  
 黒褐色土 (10YR5/6) ブロック多含。

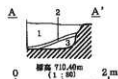
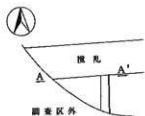
第65図 H13号住居址

## H13号住居址 (第65図、図版36)

本住居址は直路遺跡Ⅱ、A地区南東端部、VI-L-1-1グリッドに位置する。他遺構との重複関係はないものの、南側大半が調査区外であり北壁部分がわずかに検出されたのみであるため東西長2.2mが計測し得るのみであり形状は不明である。この規模から住居址とは異なる性格の遺構とも考えられる。壁残高は22~32cmを測り、周溝は検出されなかった。覆土は2層からなり自然堆積である。

ピット・炉址は調査範囲内からは検出されなかった。

出土遺物はなく時期は不明である。



1. 暗褐色土層 (10YR2/3)
2. 黒褐色土層 (10YR2/3)
3. 暗褐色土層 (10YR2/3)

第65図 H13号住居址

## H14号住居址 (第66図)

本住居址は直路遺跡Ⅱ、A地区南東端部、VI-L-1-1グリッドに位置する。大半が調査区外であり、北側を攪乱により破壊を受けているため東壁の極くわずかな範囲が確認されたのみである。したがって、壁残高54cmが計測し得るのみであり規模・形状は不明である。周溝は検出されなかった。覆土は3層からなり自然堆積である。

ピット・炉址は調査範囲内からは検出されなかった。

出土遺物はなく時期は不明である。

1. 暗褐色土層 (10YR2/3)
2. 黒褐色土層 (10YR2/3)
3. 暗褐色土層 (10YR2/3)

第66図 H14号住居址

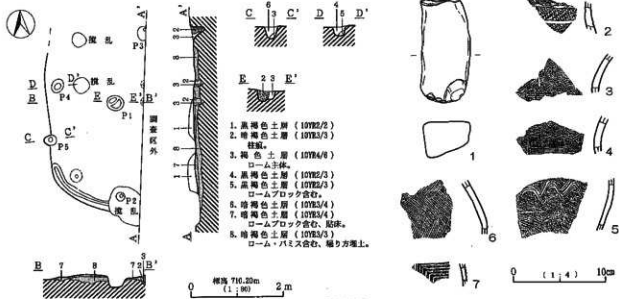
## H15号住居址 (第67図、図版41・49)

本住居址は直路遺跡Ⅲ調査区北東端部、VI-Q-1-5グリッドに位置し、東側は調査区外のため未調査である。また、北半部は削平を受け残存しないため南西隅付近が検出されたのみであり規模・形状は不明である。壁残高は南壁で7cmを測る。周溝は南壁下で検出された。床面は7・8層を埋め戻して構築される。

ピットは床面上から5基が検出された。P1が主柱穴と考えられ、径20cmの柱痕が確認された。P3~P5は本址に伴うものかどうか判然としない。炉址は調査範囲には存在しない。

遺物は石器(1)、壺(2)、壺(3~7)を図示した。

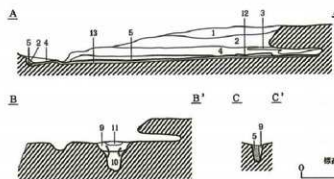
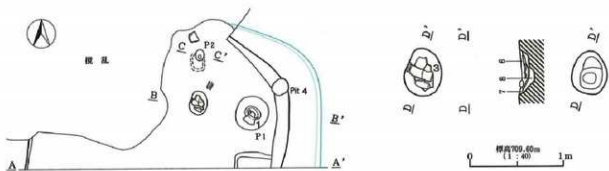
1は安山岩製の敲石である。2は壺の頸部片であり、3~7は壺の口縁部・胴部である。



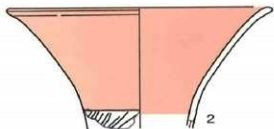
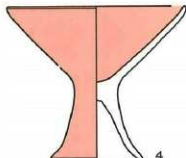
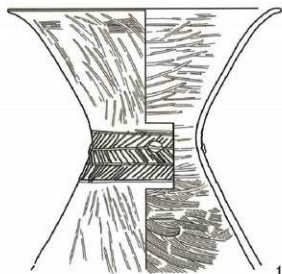
第67図 H15号住居址

第33表 H15号住居址出土遺物観察表

No	器種	法 量			底 形・調整・文様		備 考
		口径(長)	底径(幅)	高さ(厚)	外 面	内 面	
1	磨石・敲石	11.3	5.4	3.8			252g



1. 黒褐色土層 (10YR2/2) ~5mm大パミス含む。
2. 黒褐色土層 (10YR3/2) ~1cm大パミス・ローム粒子多含。
3. 暗褐色土層 (10YR3/3) 10YR5/6ローム多含。
4. 黒褐色土層 (10YR2/3) ~5mm大パミス・ローム粒子含む、しまりあり。
5. 黒褐色土層 (10YR2/2) 柱眼、パミス・ローム粒子多含。
6. 黒褐色土層 (10YR2/2) 炭化物粒子多含。
7. 黒褐色土層 (10YR1.5/1) ローム主伴、塊ける。
8. 褐色土層 (7.5YR4/3) ローム粒子多含。
9. 黒褐色土層 (10YR2/3) ローム粒子多含。
10. 暗褐色土層 (10YR3/4) ~1cm大パミス多含。
11. 黒褐色土層 (10YR3/2) ロームブロック多含。
12. 上より黄褐色土層 (10YR6/3) ローム上面に粘る。
13. 褐色土層 (10YR4/4) ローム主伴、たたき状、しまる。



12

0 (1:4) 10cm

第68図 H16号住居址(1)



## H16号住居址 (第68・69図、図版41・42・50)

本住居址は直路遺跡Ⅲ調査区南西端部、VI-R-エー7グリッドに位置し、北西部分を擾乱による破壊を受ける。また、南西大半は調査区外であり未調査のため規模・形状等は不明である。確認された範囲で東西5.1mを測り、壁残高は東壁で31~49cm、西壁で7~20cmを計測する。本址も地盤のスレにより床面付近で東壁が約1m西へ移動している。周溝は検出されなかった。覆土は自然堆積で、床面は13層を薄く埋め戻して構築される。また、東壁下南側の床面上には幅80cm、厚さ4cmで12層が貼られている状況が確認された。



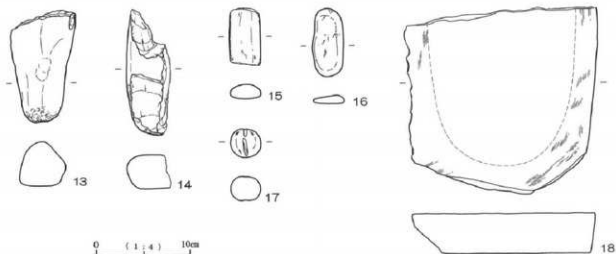
ピットは2基が検出された。このうちP1が主柱穴であり60cmの深さを有する。P2は炉址の北70cmの床面上から検出され径14cmの柱痕が確認された。36cmの深さを有し棟持柱であろう。炉址は北側主柱穴間に位置すると考えられ、径50cm×40cmの楕円形の掘り方に壺の底部(3)を埋設し、南側に礎を1個置いて設けられる。

遺物は壺(1~3)、高坏(4)、甕(5~12)の他石器(13~18)を図示した。

1はP1内より出土した壺で、頸部に髷描による4条の平行沈線によって区画された間に斜走文が菱杉状に充填され、円形貼付文が5個付加される。2の壺も同様な文様構成であるが、2は内外面に赤色塗彩が行われているのに対して1は無彩である。3は炉址内に埋設されていた壺の底部で剥離が著しい状態である。4は口縁部がわずかに内彎する高坏で、脚部内面を除いて赤彩される。

甕には小型で頸部に鬘状文が巡る5の他、液状文の6~9、羽状文の10・11がある。12はコの字重ね文が施文され台付甕と思われる。

石器には敲石(13~16)と有溝石錐(17)、台石(18)がある。



第69図 H16号住居址(2)

第34表 H16号住居址出土遺物観察表

No.	器種	法 量		成 形 ・ 調 整 ・ 文 様		備 考
		口径(長)	底径(幅)	器高(厚)	外 面	
1	壺	29.1	-	27.5	髷縹横線文・斜走文、円形貼付文5	ヘラミガキ、ハケメ P.1
2	壺	(28.2)	-	(12.8)	ヘラミガキ、赤色塗彩、頸部髷縹横線文・斜走文	ヘラミガキ、赤色塗彩
3	壺	-	11.2	(8.6)	ヘラミガキ、剥離	ハケメ、剥離
4	高坏	(19.1)	9.8	16.2	ヘラミガキ、赤色塗彩	ヘラミガキ、赤色塗彩、脚部ナデ
5	甕	(9.1)	(3.2)	6.6	髷縹鬘状文	ヘラミガキ
13	撻石・敲石	11.8	6.9	5.1		462g
14	撻石・敲石	13.3	4.7	3.7		304g
15	撻石・敲石	6.0	3.4	1.5		45g
16	撻石・敲石	7.2	3.4	1.3		36g
17	石錐	3.0	3.3	2.6	有溝	33g
18	台石	19.7	20.6	4.9		3,560g

## H17号住居址 (第70図、図版42・50)

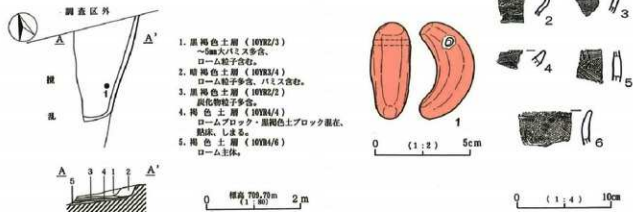
本住居址は直路遺跡Ⅲ調査区北西端部、VI-R-うー5グリッドに位置するが、西側は乱瓦による破壊を受けている。また、北は調査区外のため未調査であり南東隅付近が調査されたのみであるため規模・形状等は不明である。壁残高は2~25cmを測り、周溝は検出されなかった。覆土は自然堆積で、床面は4・5層を埋め戻して構築される。

ピット・炉址は調査範囲内からは検出されなかった。

遺物は土製勾玉(1)、甕(2~6)を図示した。

土製勾玉(1)は東壁下南側の床面上から出土した。長さ5.1cm・厚さ1.9cm・重さ22gを測り赤彩される。

甕は小片のため器形の知れるものはないが、受口状の口縁部に縄文を施した後甕指による波状文が2条巡る2、液状文・羽状文が施文される3~6がある。



第70図 H17号住居址

第35表 H17号住居址出土遺物観察表

No	器種	法 量			成 形 ・ 調 整 ・ 文 様		備 考
		口径(長)	底径(幅)	器高(厚)	外 面	内 面	
1	土製勾玉	5.1	2.1	1.9	ヘラミガキ、赤彩塗彩		22g

## 第2節 竪穴状遺構

## Ta1号竪穴状遺構 (第71・72図、図版28・50)

本址は直路遺跡Ⅰ調査区北端部、VI-W-きー2グリッドに位置し、H4号住居址を切る。南北6.96m、東西3.24mの隅丸長方形を呈し、床面積22.1㎡を測る。壁残高は50cm内外を測り、長軸方位はN-13°-Wを示す。周溝は幅20cm、床面からの深さ10cmの規模で壁下を巡る。覆土は自然堆積で、1層が主体を占める。

ピットは床面上から14基が検出された。P1~P12は東西3本、南北4本の総柱状に配置され、径15~20cmの柱裏が確認された。深さはP12が最も浅く35cmを計測するが、P1~P11は50~70cmの深さを有する。

遺物は古銭(1~7)の他弥生土器壺(8)、甕(9~11)、台付甕(12)、蓋(13)、石器(14~16)を図示したが、弥生土器・石器は混入遺物である。

1は「至道元寶」(初铸年995年)、2は「景祐元寶」(1034年)、3は「皇宋通寶」(1038年)、4~6は「元豊通寶」(1078年)、7は「政和通寶」(1111年)であり、書体は1が真書、2~4・7が篆書、5・6が行書である。

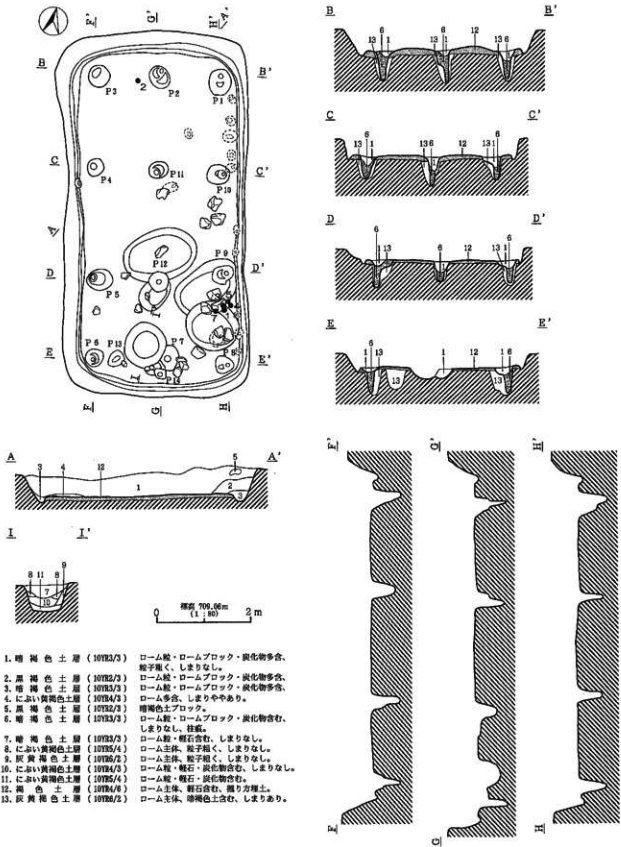
## Ta2号竪穴状遺構 (第73図、図版37)

本址は直路遺跡Ⅱ、B地区北側、XI-C-かー3グリッドに位置し、Pit40・88・89・107に切られる。南北4.5m、東西2.9mの南北に長い隅丸長方形を呈し、床面積11.7㎡を測る。壁残高は東壁で32~39cm、西壁で11~16cmを測り比較的緩やかな傾斜で立ち上がる。長軸方位はN-11°-Eを示す。周溝は検出されなかった。覆土は5層からなり自然堆積である。

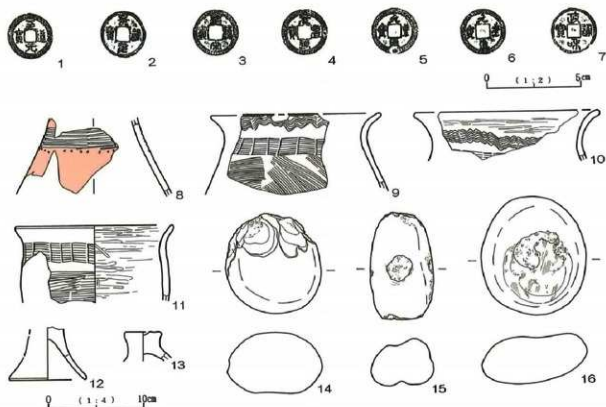
ピットは北壁下から1基、西壁中から2基の3基が検出されたが本址に伴うものかどうか判然としない。

遺物は鉢(1)、壺(2)を図示したが、いずれも混入遺物である。

1は内外面に赤彩される鉢で、内場する口縁部に突起が付加される。2は壺の頸部片で甕指による平行沈線が巡る。



第71図 Th 1号壑穴状遺構 (1)



第72図 Ta1号壑穴状遺構(2)

第36表 Ta1号壑穴状遺構出土遺物観察表

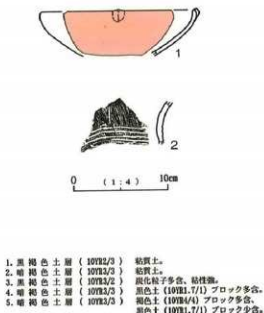
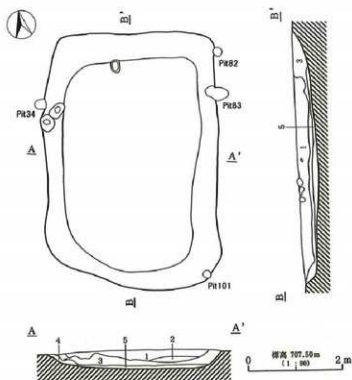
No	器種	法 量			外 形 ・ 調 整 ・ 文 様		備 考
		口径(径)	底径(幅)	器高(厚)		内 面	
1	滑石瓦質	2.4	—	—			3.0g
2	滑石瓦質	2.4	—	—			3.5g
3	滑石瓦質	2.4	—	—			3.8g
4	元色滑石	2.4	—	—			3.5g
5	元色滑石	2.4	—	—			3.5g
6	元色滑石	2.4	—	—			3.8g
7	政和通寶	2.4	—	—			3.5g
8	壑	—	—	(8.0)	赤色塗彩、長編横線文・刺突文	ナデ	
9	壑	(18.2)	—	(8.4)	口縁部扇線透状文、肩部扇線透状文	ハラミガキ	
10	壑	(19.8)	—	(5.1)	扇線透状文、節線透状文	ハラミガキ	
11	壑	(16.8)	—	(8.1)	扇線透状文	ハラミガキ	
12	白付壑	—	(8.2)	(5.3)		ナデ	
13	壑	3.9	—	(3.1)		ナデ	
14	礫石・黒石	10.5	10.3	6.6			1,020g
15	礫石・黒石	11.3	6.7	5.2			585g
16	礫石・黒石	12.5	11.2	5.3			980g

Ta3号壑穴状遺構(第74図、図版37)

本址は直路遺跡Ⅱ、A地区北東端部、VI-B-ウ-7グリッドに位置する。他遺構との重複関係はない。南北1.6m、東西3.4mの東西に長い隅丸長方形を呈し、長軸方位N-88°-Wとはほぼ東西方向を示す。床面積は4.8㎡を測る。壁残高は52~87cmを計測し、南壁東側にテラス状の張り出しを有する。幅1.5mで床面からの高さは約10cmを測る。覆土は1層が主体を占め、2層は壁付近と床面を覆っている。

ビッドは検出されなかった。

遺物は弥生土器が出土しているが混入遺物であり図示できたものはない。

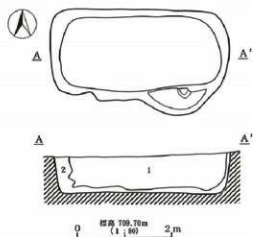


1. 黒褐色土層 (10YR2/3) 鉄質土。
2. 暗褐色土層 (10YR2/3) 鉄質土。
3. 黒褐色土層 (10YR2/2) 炭化粒子多量、粘性強。
4. 暗褐色土層 (10YR2/3) 黒色土 (10YR1.7/1) ブロック多量。
5. 暗褐色土層 (10YR2/3) 黒色土 (10YR4/4) ブロック多量、黒色土 (10YR1.7/1) ブロック多量。

第73図 Ta 2号竪穴状遺構

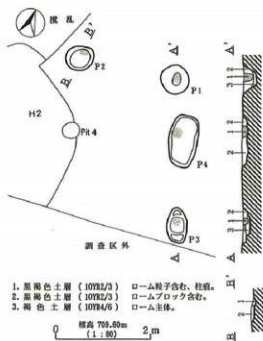
第37表 Ta 2号竪穴状遺構出土遺物観察表

No	部 位	法 量	成 形・調 整・文 様		備 考
			外 面	内 面	
1	鉢	口径(長) 底径(幅) 器高(厚) (16.2) — (4.8)	ヘラミガキ、赤色塗彩	ヘラミガキ、赤色塗彩	口縁部突起



1. 暗褐色土層 (10YR3/3) に赤い褐色土 (7.5YR5/4) ブロック多量、しまりあり。
2. 黒褐色土層 (10YR2/3) 炭化粒子少含、堅くしまる。

第74図 Ta 3号竪穴状遺構



1. 黒褐色土層 (10YR2/3) ローム粒子含む、粒粗。
2. 暗褐色土層 (10YR2/3) ロームブロック含む。
3. 褐色土層 (10YR4/6) ローム主体。

第75図 F 1号掘立柱建物址

## 第3節 掘立柱建物址

## F1号掘立柱建物址(第75図)

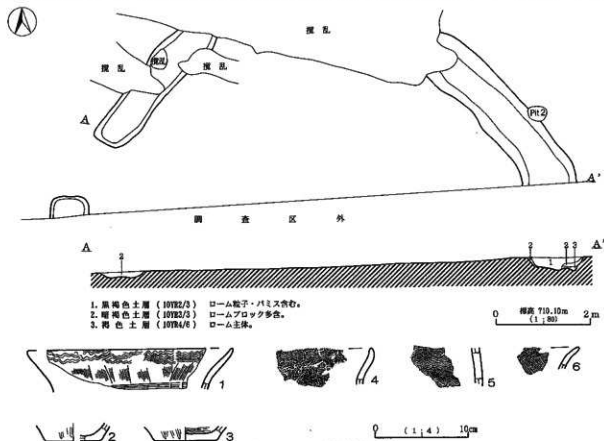
本址は直路遺跡Ⅲ調査区南西部、VI-R-う-7グリッドに位置する。西側は覆乱による破壊を受けており、南側は調査区外のため未調査である。東西1間・南北2間の4基について調査を行ったのみであるため規模等は不明である。柱間はP1・P2間2.0m、P3・P4間1.88m、P4・P1間1.14mを測り、柱穴は円形あるいは楕円形で7~20cmの深さを有し、径14~24cmの柱痕が確認された。

出土遺物はない。

## 第4節 周溝址

## SM1号周溝址(第76図、図版43)

本址は直路遺跡Ⅲ調査区南側中央、VI-Q-こ-7からVI-R-い-7にかけて検出された。Pit 2に切られる他覆乱による破壊を受けている。また、南半部は調査区外であり未調査のため全体の規模・形状等は不明であるが、径10m前後の円形または方形を呈するものと思われる。溝幅74~116cm、深さ8~49cmを測り、北西部分1.2mを掘り残して開口部を設けている。覆土は3層からなり、底面は平坦である。主体部は確認されていないが周溝塞であろう。



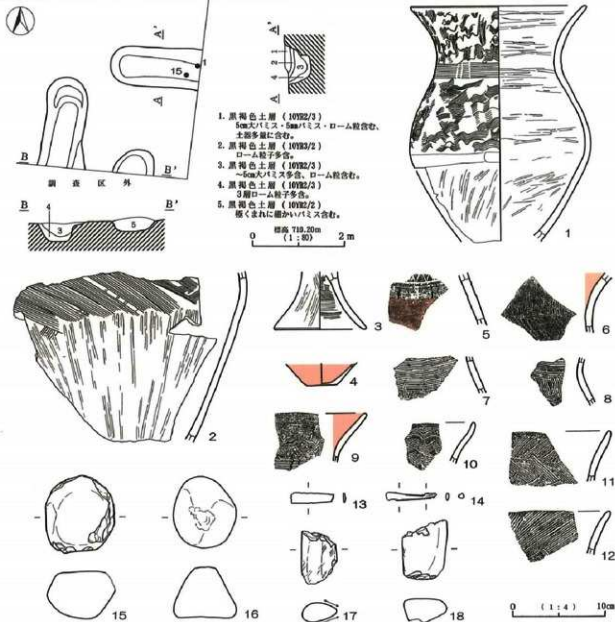
第76図 SM1号周溝址

第38表 SM1号周溝址出土遺物観察表

No.	器種	法 量		成 形 ・ 調 整 ・ 文 様		備 考
		口径(長)	底径(幅)	容高(厚)	外 面	
1	甕	(21.9)	—	(4.3)	口縁部輪溝波状文、胴部條線條状文	ヘラミガキ
2	甕	—	(6.0)	(1.6)	ヘラミガキ	ヘラミガキ
3	甕	—	(6.6)	(1.4)	ヘラミガキ	ヘラミガキ

遺物は弥生土器が出土しており、1～6の甕を図示したが全体の器形が知れるものはない。

1はわずかに受口気味に立ち上がる口縁部に波状文が1条廻り、頸部に簾状文が認められる。他に口縁部と胴部に波状文が施文される4・5、口縁部に羽状文が施文される6がある。



第77図 SM2号周溝址

第39表 SM2号周溝址出土遺物観察表

No	器種	法 量			成 形 ・ 調 整 ・ 文 様		備 考
		口径(長)	底径(幅)	器高(厚)	外 面	内 面	
1	甕	19.2	—	〈25.5〉	唇縁波状文、頸部簾状文	ハラミガキ	
2	甕	—	—	〈18.3〉	唇縁羽状文	ハラミガキ	
3	台付甕	—	(10.0)	(6.2)	ハラミガキ	ハケメ	
4	鉢	—	(3.4)	(2.3)	ハラミガキ、赤色塗彩	ハラミガキ、赤色塗彩	
13	刀子	4.7	1.2	0.2	両端欠損		6.1g
14	刀子	5.4	0.8	0.6	両端欠損		6.2g
15	礫石・礫石	8.4	7.5	5.2			320g
16	礫石・礫石	7.8	6.8	5.5			360g
17	礫石・礫石	5.7	3.9	2.1			38g
18	礫石・礫石	6.3	4.9	3.0			33.1g

## SM2号周溝址(第77図、図版43・51)

本址は直路遺跡Ⅲ調査区南東端部、VI-Q-く-7グリッドから検出された。他遺構との重複関係はないものの、東・南側が調査区外に延びているため全体の規模・形状等は不明である。また、溝による区画内から検出された落ち込みも別遺構の可能性もある。溝址はともに2mが検出され、北西部分を掘り残して幅70cmの開口部を設けている。深さは北溝が41~53cm、西溝が35~43cmを測り西溝は北端部にテラスを有する。覆土は4層からなり、底面は平坦である。限られた範囲での調査のため明確ではないが、方形区画の四隅または一箇所を掘り残した周溝墓の可能性も考えられる。

遺物は弥生土器・鉄製品・石器が出土しており、甕(1~3・9~12)、鉢(4)、壺(5~8)、刀子(13・14)、敲石(15~18)を図示した。

1は北溝東端部覆土上面から出土した甕で、口縁部から胴上半に帯描波状文を施した後頸部に簾状文が巡る、また、胴中位の波状文下にナデが施される。甕には他に羽状文の2・11・12があり、9は口縁部内面に赤色塗彩が行われる。台付甕は3の台部が1点出土している。

壺は全体の器形が知れるものはないが、頸部文様に簾状文の上に山形文がみられる5、帯描線文+斜走文の6、帯描線文の7の他に横線文下に「U」字状の文様がみられる8があり多様である。

刀子には刃部の13と茎部の14があり同一のものであろう。

## 第5節 土坑

直路遺跡Ⅰ・Ⅱ・Ⅲからは総数で30基の土坑が検出された。以下、各遺跡毎に記載する。なお、各土坑の規模・形状等については土坑一覧表に記した。

## 直路遺跡Ⅰ(第78・79図、図版28・29・51)

直路遺跡Ⅰからは16基の土坑が検出された。これらはすべて住居址の検出された調査区の北半部に集中する。形状は円形または楕円形を呈するものが主体的であるが、D8・16号土坑にみられるように方形のものも存在する。

土坑内から出土した遺物は、D15号土坑から出土した小皿(11)を除いて本遺跡で調査された住居址から出土する遺物と同様なものであるが、全体の器形が知れるものはない。各土坑から出土した遺物は以下のとおりである。

D4号土坑からは赤色塗彩された高坏の坏部(1)の他に壺(13・14)、甕(15・16)が出土している。

D7号土坑からは比較的多くの遺物が出土しており、壺(2~4・18・19)、甕(5~9・17・20~22)、蓋(10)を図示した。壺には帯描による4条の平行沈線間に斜走文が縦線状に充填され、頸部文様帯を除いて赤彩される2の他に同様な文様をもち無彩の18・19がある。5・6は波状文・簾状文が施文される甕であるが、5はわずかに内側すく口縁部に円形貼付文が付加される。他に羽状文の20・21がある。10は蓋の頂部で外面は赤彩され内面はヘラミガキ調整が行われる。

11はD15号土坑から出土した小皿であり、底部に回転糸切り痕が残る。

## 直路遺跡Ⅱ(第80・81図、図版38・39)

直路遺跡ⅡではA地区から3基(D26~28)、B地区から8基(D17・19~25)、C地区から1基(D18)の12基が検出され、形状は円形または楕円形を呈する。各地区における土坑の分布については、A地区では調査区南端部中央、M4号溝址の両側に3基がまとまって検出され、B地区では調査区北側M2号溝址付近と調査区中央付近の2箇所に集まる傾向が指摘できる程度である。C地区ではD18号土坑が検出されたのみであるが、直路遺跡Ⅰで調査された土坑と同じまわりに入るものと思われる。このうち井戸址であるD17号土坑を除いて性格は不明である。

D17号土坑はB地区中央、XI-C-か-4グリッドから検出され、他遺構との重複関係はない。南北3.44m、東西3.64mのはは円形プランの南東部分に長さ1.1m、最大幅80cmのテラス状の張り出しを有する。確認面から1m下で1mの方形に組まれた板材の木枠が確認された。木枠は1mまで掘り下げを行ったが底面は湧水のため不明である。木枠内には1層黒褐色土層が堆積し、上面縁辺には20~30cm大の礫が円形に並べられたように検出された。

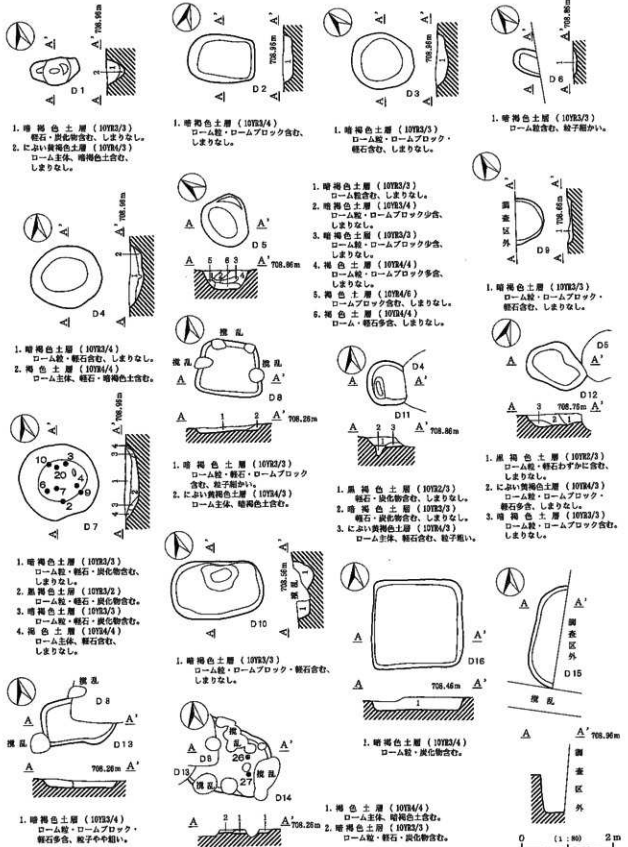
本址からの出土遺物はない。

## 直路遺跡Ⅲ(第82図、図版42・51)

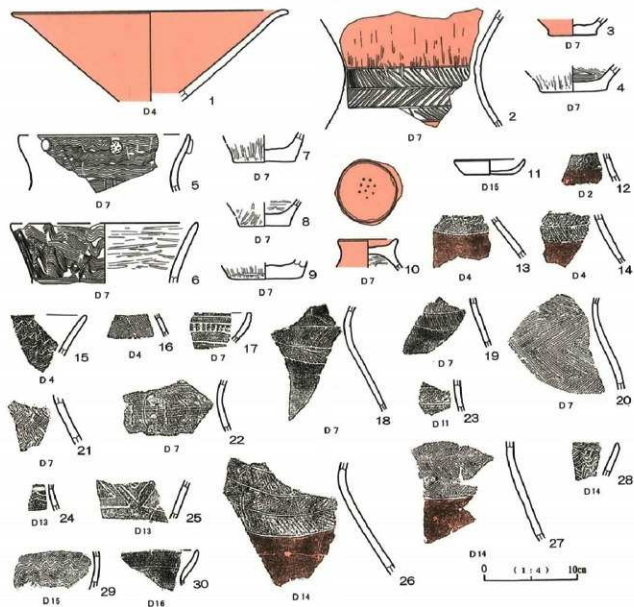
直路遺跡Ⅲからは調査区西側から隣接してD29・30号土坑の2基が検出され、いずれも楕円形を呈する。

D29号土坑からは甕(1・2)が出土しており羽状文・波状文が施文される。3はD30号土坑から出土した安山岩製の台石であり、掘面には細い線状痕が認められる。





第78図 D1～16号土坑



第79図 D2・4・7・11・13~16号土坑出土遺物

第40表 D4・7・15号土坑出土遺物観察表

No	器種	法 量			成 形 ・ 調 整 ・ 文 様		備 考
		口径(長)	底径(幅)	器高(厚)	外 面	内 面	
1	高坏	(29.4)	—	(9.5)	ヘラミガキ、赤色塗彩	ヘラミガキ、赤色塗彩	D4
2	甕	—	—	(11.6)	縦縞横文・羽状文、赤色塗彩	ヘラミガキ、赤色塗彩、割離	D7
3	甕	—	5.5	(1.7)	ヘラミガキ、赤色塗彩	割離	D7
4	甕	—	7.1	(2.3)	ヘラミガキ	ハケメ	D7
5	甕	(18.2)	—	(5.8)	縦縞波状文、横縞波状文、円形貼付文	ヘラミガキ	D7
6	甕	(19.8)	—	(6.3)	縦縞波状文、横縞波状文	ヘラミガキ	D7
7	甕	—	6.6	(2.8)	ヘラミガキ	ヘラミガキ	D7
8	甕	—	5.4	(2.5)	ヘラミガキ	ヘラミガキ	D7
9	甕	—	7.8	(1.8)	ヘラミガキ	ヘラミガキ	D7
10	甕	6.4	—	(3.0)	ヘラミガキ、赤色塗彩	ヘラミガキ	D7
11	小皿	7.6	5.4	1.6	ロクロナデ、底面周縁糸切り・ケズリ	ロクロナデ	D15